

アサヒ新聞

一原・村越二世の遺品の頃より傳來するものとされる古物類は、現在古寺や土器
街の本堂内に安置する。

沖ノ原遺跡

今さる御家よりよこながれを發揮せしもの故文部省の河川工事課江添水道
課が委嘱官職の参考字典、内閣文庫本院所蔵門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

—熊本県天草郡五和町二江—

二江字の成澤大河、水戸川、木戸川、西門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

二江字の成澤大河、水戸川、木戸川、西門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

二江字の成澤大河、水戸川、木戸川、西門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

二江字の成澤大河、水戸川、木戸川、西門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

二江字の成澤大河、水戸川、木戸川、西門真鏡印文庫からも参考字典更新のう
ち

会員登録

手 紙 本 言 文 著

発刊に寄せて

郷土の考古学研究家柳原高太郎氏の多年にわたる、土器石器類の採取により、二江沖ノ原一帯が縄文時代の遺跡であると推定されていたが、昭和33年5月町が施工した対岸通詞島之の海底水道工事において、縄文時代の貝塚が発見されたことにより決定的となった。

その後現地を調査された県文化財専門委員坂本経庵先生をはじめ、研究者等の助言を受けた町は、沖ノ原遺跡の重要性を認め発掘調査にふみきり、昭和34年8月第一次調査に着手した。以来第四次調査までに、夥しい遺物が出土し、人々の目を驚かせた。さらに発掘調査やその後の研究により、次々と学界における貴重な資料として考証されるに至り、文献としてこれらの報告書の刊行を企図していたが、昭和49年調査団長をつとめられた坂本先生の死去等もあり一時中止したが、その後発掘調査にあたられた諸先生の御協力を得てこのたび遂に報告書の刊行のはこびとなつたことは慶びにたえない。

執筆していただいた諸先生は何れも斯界の第一線で御活躍中の方々であり、多忙な公務の傍ら整理執筆を頼むしたことは感謝にたえないところである。

いまここに貴重な文献として本報告書を刊行するにあたり、故坂本先生を始め物故された当時の関係者の靈に対し、謹しんで御報告申しあげるとともに、御協力を賜った執筆者諸先生・県文化課ならびに関係各位に深く感謝の意を表する次第である。

昭和59年3月

五和町教育委員会

教育長 荒木秀年

序に代えて

田辺哲夫

熊本県立熊本高等学校長

沖ノ原遺跡は天草最大で、しかも、魅力的な数々の特性を備えた大遺跡であり、故坂本經堯が執念を燃やし続けたフィールドでもあった。

敗戦後、実証的だというのでブームを起していた考古学界で、県下の第一人者として、縦横の大活躍をしていた在野の考古学者が坂本經堯であった。その坂本の一つの念願は天草へ調査の手を伸ばすことになった。それというのも、熊本県は戦前でも考古学の調査研究がかなり進んでいたところなのに、天草地方は空白に近い状況で残っていたからである。

昭和30年、坂本の指導下にあった玉名高校考古学部が2週間夏の合宿を天草の入口ともいいうべき維和島で行ない、古墳群の調査をした。これを契機に、村崎盛之氏等の協力を得て、坂本の足跡は三角町を含め、天草全島に及ぶことになり、やがて、昭和46年『天草の古代』という概説的な単行本を刊行するに至って、一応の結実をみることになるのである。

昭和32年4月9日、本渡の芭州館に落着いた坂本のもとへ、鶴田倉造氏は、この十余年二江の柳原高太郎氏が蒐集した土器や石器の一部を持ち込んだ。坂本の日誌である『考古隨想』を見ると、この日既に、土師器の支脚を「新資料」と書き、師楽式製塙土器の模式図を添えて、これが製塙土器であることを喝破しているのである。早速11日、坂本は現地へ赴き、柳原と会い、その案内で遺跡の全貌を把握したのであった。

坂本經堯はきわめて優れた組織者である。34年3月5日、通詞島への送水管敷設の際の柳原採集品を実査した坂本は、終始、調査の推進に努力されている五和町教育委員長猪股末秋氏や天草の郷土新聞「みくに」社長吉見教英氏の協力に力を得て、遺跡の重大性と調査の緊急性から本格的な学術調査を決意するのであった。3月25日には『沖ノ原図録』を完成し、4月7日には『沖ノ原遺跡発掘計画書』を作成、町当局へ提出した。町長宮崎武之氏は議会に諮り、町営発掘を5月11日可決、8月1日から発掘調査を行うところまで漕ぎつけた。

五和町二江から通詞島に向けて砂嘴が伸びる。その東側が300mにも及ぶ大貝塚で、繩文前期の轟式・曾畠式、中期の阿高式、擦消繩文の鐘ヶ崎式、後期の御領式、さらには弥生式(板付II式)土器も出る。調査の端緒となった通詞島への海底送水管の埋設地区の傍らを王の字形に四つのトレンチを入れて調査したところ、貝層が二層に分れ、下の貝層は轟式や曾畠式、上の貝層は阿高式の一種とも見られる沖ノ原式ともいるべき独特な形式で、その中間の砂層には、一面に礫が散布していた。また、下の貝層下から仰臥屈葬の完全な繩文人骨が2体も珍らしく出て、これは熊本大学医学部が採取された。

石器では、石錐が最も多く、92個の魚箱に納めた遺物のうち、ほぼ半ば近くを占めた。また尖頭状石器、双角尖頭状石器と名付けた珍らしい石器も数多く、アワビをとるとき、使用するものと考え、翌年8月7日、裸もぐりの方に実験してもらったところ、成功した。そのほか、骨角器にも優品が少なくなかった。

ともかく、極めて優秀な大貝塚で、漁撈生活を中心とした大きな村落が考えられるし、土器の面でも、轟式・曾煙式・阿高式の特色を兼ねたような初めて見る様式が多量に出土し、沖ノ原式の設定も検討すべき状況であった。

一方、北西寄り、石炭積出施設の近くの第二試掘地では土師の支脚が400点以上も採取された。

発掘調査のあとは整理がたいへんなのである。10月に1週間、翌35年8月に10日間、現地で整理にあたったが、当時としては、稀有の出土量もあり、緒についた程度で終らざるを得なかった。

支脚付土器を担当した隈昭志は35年7月山口県での調査に参加し、すでに師樂式製塩土器の調査に実績をあげていた岡山大学近藤義郎氏に話をしたところ、製塩土器に間違いあるまいというので近藤の手によって、九州で初の調査をこの沖ノ原で行なうことになり、昭和39年3月下旬、第二次調査となつた。

西海岸に二つのトレンチを設定したところ、炉床も出現し、約50個ほどを並べて煮沸したさまを想定できたが、大波をかぶったものか、炉壁や天井部は残っていなかった。瀬戸内の師樂式にくらべて、脚が長いことが特色で「天草式製塩土器」と形式設定されるに至つた。古墳時代後期のものである。坂本經堯は昭和25年から、製鉄・製陶の調査に着手し、ここで製塩にも関係することになったわけで、九州における生産関係遺跡調査の開拓者といえる。また、近藤氏はその後も引き続き製塩遺跡を精力的に調査し、昭和58年には『製塩土器の研究』という大著を世に問うているのである。

次に、昭和44年、沖ノ原に天草特別養護老人ホーム「紫明寮」を建設することになり、4月25日から6日間、第三次調査を実施することになった。地点は第一次調査区の南東で繩文貝塚。坂本經堯・緒方勉が調査を担当。今回は大波による疊層によって層序を区分することができた。人骨も出土し、熊本大学第二解剖北條暉幸氏が調査、頭骨が葦石の上に安定されていて、坂本は「もがり」の儀式を復原想定した。

さらに、昭和48年7月には、通詞架橋の取付道路が新設されるため事前調査を行うことになり、隈昭志らが第四次調査を担当。このたびは人骨の発見が多く、27体。長崎大学医学部の内藤芳篤・坂田邦洋両氏が担当した。同一遺跡から、繩文・弥生兩期の人骨を多数調査できたことは、地域差を考慮する必要がないことからも重要な資料であるし、しかも比較的よく似ていることもあって、人種論にとって貴重なデーターとなろう。

以上、四次の調査によって、他に見られないほど、多彩で貴重な学術資料を提供した沖ノ原遺跡も、いまや、遺跡としては殆んど潰滅状態に瀕している。学術研究が日進月歩の情勢であることからすれば、将来の進んだ研究方法で見直しても欲しいわけで、僅かに残存する遺跡であっても、その保存は極めて重要であって、史跡指定の措置が必要であろう。

五和町当局は当初から報告書の刊行に御熱心であって、すでに昭和34年から着手されたわけであったが、昭和49年坂本經堯の死去のあと、執筆者の中心を失ない、さらに各執筆者の多忙などのため、今回まで遅延したのは申し訳ない。しかし、熊本市から隔遠の地であることやあまりにも専門的な資料であることなども遅れた原因といえよう。

昭和58年度に対岸通詞島に「五和町立歴史民俗資料館」が完成し、沖ノ原の資料をメインの展示物として、昭和59年度に開館の運びに至ると承っているが、町御当局の郷土の文化を深く敬愛される御熱意あふれる一連の施策に感服するとともに、文化財保護のあり方からも、一つの範を示されたことに対し、改めて敬意を表するものである。

この資料館の完成によって、今まで大きな障害となっていた現地での遺物整理と、それに伴う研究が可能となるわけで、運営の面で格段の御配慮が願わしい。

今回出版の運びとなった報告書は、内容的にやや濃淡もあり、いわば、概説的なものであつて、いづれ、このあと、遺物の精査のうえ、学术的にさらに深めた、全国的視野の、全面的な報告書（特論篇）が次々に刊行されることが期待されるのである。

以上、調査に至る経緯、調査の概要、今後の諸問題などにも、簡単に触れながら、今回の報告書が出版されるに至った町御当局、坂本經堯・柳原高太郎ら諸氏の極めて熱心な文化財保護の姿勢に深甚の敬意を捧げて、序に代える次第である。

里へ向うる地図を検査する。重貴が越る。田辺哲夫は見立地図の上に筆記本を取る。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。さへと紙面の検査箇所を入紙に記す。板刷り。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。

田辺哲夫は筆記本を右側に持つ。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。

田辺哲夫は左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。

田辺哲夫は左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。

田辺哲夫は左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。左側の検査箇所を右側の検査箇所と交換する。

例　言

この書は、五和町教育委員会の発表によるものである。著者たる田辺哲夫は、近藤義郎氏、内藤芳篤氏、高橋英一氏、樋昭志氏、緒方勉氏、富田紘一氏、北條暉幸氏、内藤義郎氏、内藤芳篤氏、高橋英一氏、樋昭志氏、緒方勉氏、富田紘一氏、北條暉幸氏、内藤義郎氏、内藤芳篤氏の既発表資料を転載させていただいた。

1. 本書は第1次～第4次の発掘調査に関する概要報告書である。
2. 本書の執筆は田辺哲夫、樋昭志、緒方勉、富田紘一があたり、第3次の人骨は北條暉幸氏に依頼した。
また第2次は近藤義郎氏、第4次の人骨については、内藤芳篤氏の既発表資料を転載させていただいた。
3. 遺物の整理、実測、トレース等については、熊本県教育庁文化課職員の協力をうけた。
4. 本書の刊行後、土器、石器、製塩、人骨等についての各論が企画されており、沖ノ原遺跡の位置づけがなされることを期待したい。
5. 本書の編集は、五和町教育委員会と連絡をとりながら、各執筆者協議し、田辺哲夫の指導により、主として限が当たった。

本文目次

前 言	古墳出土
調査概要	骨人の歴史とその構成
発刊に寄せて	考古学
第1章 沖ノ原遺跡の調査経緯	古墳出土の骨人
1. 調査経緯	骨人の歴史とその構成
2. 遺跡の位置	考古学
第2章 第1次調査	古墳出土の骨人
1. はじめ	骨人の歴史とその構成
2. 第1次調査前の遺跡と遺物	考古学
3. 調査日誌抄録	古墳出土の骨人
4. 発掘区の設定と遺跡・遺構	骨人の歴史とその構成
5. 出土遺物	考古学
第3章 第2次調査	近藤義郎
1. はじめ	骨人の歴史とその構成
2. 遺跡の概要	考古学
3. 天草式土器の特徴と群別	古墳出土の骨人
4. 製塙土器としての天草式土器	考古学
5. 天草式製塙土器伴出の須恵器	古墳出土の骨人
6. むすび	骨人の歴史とその構成
第4章 第3次調査	緒方勉
1. 調査の経過	骨人の歴史とその構成
2. 調査の成果	考古学
3.まとめ	古墳出土の骨人
付論 熊本県天草郡五和町沖ノ原貝塚人骨	北條暉幸
1. 緒言	骨人の歴史とその構成
2. 研究対象および研究方法	考古学
3. 人骨の埋葬状態	古墳出土の骨人
4. 出土人骨の年齢および性	考古学
第5章 第4次調査	隈昭志
1. 調査経緯	骨人の歴史とその構成
2. 遺構・遺物の検出状況	考古学

3. 出土遺物	208
付論 沖ノ原遺跡の人骨	内藤芳篤
1. まえがき	221
2. 人骨の出土状況	222
3. 人骨の編年	224
4. 沖ノ原人骨について	226

図版目次

第2章	
第1図版 発掘祭	75
第2図版 発掘時の沖ノ原	75
第3図版 発掘時の沖ノ原（西側）	76
第4図版 発掘時の沖ノ原（東側）	77
第5図版 貝層断面(1)	78
第6図版 貝層断面(2)	79
第7図版 完形土器出土状態	80
第8図版 第1号人骨検出状態	80
第9図版 遺物出土状態	81
第10図版 第4層の礫層	81
第11図版 貝層断面(1)	82
第12図版 貝層断面(2)	83
第13図版 貝層中遺物出土状態	84
第14図版 貝層中遺物出土状態	84
第15図版 貝層中遺物出土状態	85
第16図版 黒曜石製石鋸出土状態	85
第17図版 貝層断面	86
第18図版 有孔貝製品出土状態	86
第19図版 遺物出土状態	87
第20図版 猪牙製垂飾出土状態	87
第21図版 骨製髪飾出土状態	87
第22図版 貝層断面	88
第23図版 イノシシ頭骨出土状態	88
第24図版 シャチの牙と土器出土状態	89
第25図版 下層土器出土状態	89
第26図版 貝層断面	90
第27図版 遺物出土状態	91
第28図版 遺物出土状態	91
第29図版 第4号人骨検出状態	92
第30図版 第4号人骨貝輪装着状態	92
第31図版 第4号人骨埋葬土壤	93
第32図版 第4号人骨埋葬土壤と貝層断面	93
第33図版 第4号人骨装着貝輪と埋葬土 壤出土土器	94
第34図版 第5号人骨石圈	94
第35図版 第5号人骨検出状態	95
第36図版 第5号人骨腹部の礫	95
第37図版 第I試掘断面	96
第38図版 第III試掘区断面	96
第39図版 第II試掘区断面	97
第40図版 第II試掘区製塙土器出土状態	97
第41図版 発掘風景	98
第42図版 波部博士による貝の同定	98
第43図版 出土遺物(1) 磨製石斧	99
第44図版 出土遺物(2) 打製石斧	99

挿図目次

第1章	第1図 位置図 トレンチ配置図	17	第26図 第1次調査出土遺物(7)	65
第2章	第1図 調査前の遺物(1)	23	第27図 第1次調査出土遺物(8)	66
	第2図 調査前の遺物(2)	25	第28図 第1次調査出土遺物(9)	67
	第3図 調査前の遺物(3)	26	第29図 第1次調査出土遺物(10)	68
	第4図 調査前の遺物(4)	27	第30図 第1次調査出土遺物(11)	69
	第5図 調査前の遺物(5)	28	第3章	
	第6図 調査前の遺物(6)	29	第1図 沖ノ原遺跡位置図	110
	第7図 第1次調査時の沖ノ原と発掘区	37	第2図 沖ノ原A 3区東壁	111
	第8図 発掘地の地形と発掘区	38	第3図 沖ノ原B 3区南壁	113
	第9図 トレンチ配置と発掘区名	39	第4図 大田尾遺跡	114
	第10図 第I トレンチ北側断面	42	第5図 大田尾遺跡 試掘個所の位置	115
	第11図 第II トレンチ西壁断面	44	第6図 天草式製塙土器模式図	117
	第12図 第II トレンチN区遺物出土状態 貝層中下部	45	第7図 沖ノ原出土天草式製塙土器(1)	118
	第13図 第III トレンチ西壁断面	46	第8図 沖ノ原出土天草式製塙土器(2)	119
	第14図 第IV トレンチ西壁断面	49	第9図 大田尾出土天草式製塙土器	120
	第15図 第4号人骨出土状態	50	第10図 大田尾出土土器(左列) 須恵 器(右列)	123
	第16図 発掘区貝層の範囲と出土人骨	51	第11図 沖ノ原出土土器(左列) 須恵 器(右列)	126
	第17図 第I 試掘区東壁断面	53	第4章	
	第18図 第II 試掘区断面図及び平面図の 一部	53	第1図 グリット配置図	141
	第19図 第III試掘区南側断面	53	第2図 土層断面図	142
	第20図 第1次調査出土遺物(1)	58	第3図 第一貝塚と埋葬状態	145
	第21図 第1次調査出土遺物(2)	59	第4図 出土遺物 1	152
	第22図 第1次調査出土遺物(3)	60	第5図 出土遺物 2	153
	第23図 第1次調査出土遺物(4)	62	第6図 出土遺物 3	154
	第24図 第1次調査出土遺物(5)	63	第7図 出土遺物 4	155
	第25図 第1次調査出土遺物(6)	64	第8図 出土遺物 5	156
			第9図 出土遺物 6	157
			第10図 出土遺物 7	158
			第11図 出土遺物 8	159

第45図版	出土遺物(3) 石匙と剥片石器	100	第4章	
第46図版	出土遺物(4) 石鎌	100	第1図版	沖ノ原遺跡の景観
第47図版	出土遺物(5) 石鋸	101	第2図版	土層断面と混疊砂層
第48図版	出土遺物(6) 尖頭状石器	101	第3図版	貝塚
第49図版	出土遺物(7) 尖頭状石器	102	第4図版	出土遺物1
第50図版	出土遺物(8) 石錐	102	第5図版	出土遺物2
第51図版	出土遺物(9) 骨角器・釣針	103	第6図版	出土遺物3
第52図版	出土遺物(10) 骨角器・モリ等	103	第7図版	出土遺物4
第53図版	出土遺物(11) 土器 曾畠・轟式系	104	第8図版	出土遺物5
第54図版	出土遺物(12) 土器 阿高式系	105	第9図版	出土遺物6
第55図版	出土遺物(13) 土器 製塩土器	106	第10図版	出土遺物7
第56図版	尖頭状石器によるアワビ取り 模技	106	第11図版	出土遺物8
第3章			第12図版	出土遺物9
第1図版	沖ノ原遺跡全景	127	第13図版	出土遺物10
第2図版	沖ノ原 上.A1区東壁 下.A 1区南壁	128	第14図版	出土遺物11
第3図版	沖ノ原 A.3区II層の遺物出 土状態	129	第15図版	出土遺物12
第4図版	沖ノ原 上.A3区北壁 下.B 3区III層の焼土と土器	130	第16図版	出土遺物13
第5図版	沖ノ原 上.B1区西壁 下.B 1区南壁	131	第17図版	出土遺物14
第6図版	沖ノ原 上.Aカッティング 下同上の部分	132	第18図版	出土遺物15
第7図版	大田尾遺跡 上.全景 下.試掘 トレンチIII層の天草式土器出 土状態	133	第19図版	出土遺物16
第8図版	沖ノ原出土天草式製塩土器 上.塊底部 下.第I群脚	134	第20図版	出土遺物17
第9図版	沖ノ原出土天草式製塩土器 上.塊口縁部 下.第II群脚	135	第21図版	出土遺物18
第10図版	大田尾出土天草式製塩土器 上.口縁部(上中列)・底部(下列) 下.第III群脚	136	第22図版	出土遺物19
			第23図版	出土遺物20
			第24図版	出土遺物21
			第25図版	出土遺物22
			第26図版	沖ノ原出土人骨1
			第27図版	沖ノ原出土人骨2
			第28図版	沖ノ原出土人骨3
			第5章	
			第1図版	遺構出土状況
			第2図版	遺構出土状況
			第3図版	遺物写真(繩文式土器)

第12図	出土遺物9	160
第13図	出土遺物10	161
第14図	出土遺物11	162
第15図	出土遺物12	163
第16図	出土遺物13	164
第17図	出土遺物14	165
第18図	出土遺物15	166
第19図	出土遺物16	167

第5章

第1図	遺構配置図(1)	211
第2図	遺構配置図(2)	212
第3図	土器実測図(1)	213
第4図	土器実測図(2)	214
第5図	骨角器(1)	215
第6図	骨角器(2)	216

101	II古墳出土	図21等
102	II古墳出土	図21等
103	II古墳出土	図21等
104	II古墳出土	図21等
105	II古墳出土	図21等
106	II古墳出土	図21等
107	II古墳出土	図21等
108	II古墳出土	図21等
109	II古墳出土	図21等

第1章 沖ノ原遺跡の調査経緯

110	II古墳出土	図21等
111	II古墳出土	図21等
112	II古墳出土	図21等
113	II古墳出土	図21等
114	II古墳出土	図21等
115	II古墳出土	図21等
116	II古墳出土	図21等
117	II古墳出土	図21等
118	II古墳出土	図21等
119	II古墳出土	図21等

章2-屋

120	II古墳出土	図21等
121	II古墳出土	図21等
122	II古墳出土	図21等
123	II古墳出土	図21等
124	II古墳出土	図21等
125	II古墳出土	図21等
126	II古墳出土	図21等
127	II古墳出土	図21等
128	II古墳出土	図21等
129	II古墳出土	図21等

1. 調査経緯

昭和32年3月、五和町教育委員長猪股末秋氏から鶴田倉造氏（当時本渡中学校教諭）へ土器や石器が届けられた。柳原高太郎氏が20年近くもかかって探集された遺物の一部であった。そこで鶴田氏は3月17日沖の原を訪れ、有力な遺跡であることを確認され、報道されることになった。その後、鶴田氏は坂本經堯氏と連絡をとり、同年4月11日坂本氏の現地踏査が実現し、沖ノ原の砂洲一帯が縄文時代～古墳時代へかけての大遺跡であることが確認され、柳原氏の地道な努力が評価されたわけである。柳原氏は遺物採集の期日と種別を、詳細に地図に記載するとともに、耕作等による遺跡の変化についても詳しく記録してあった。

昭和33年5月、対岸の通詞島への海底簡易水道埋設工事に伴ない、柳原氏が貝層を発見し、この一帯が天草地方における最初の貝塚であることがわかった。五和町では沖の原遺跡の重要性を考え、発掘調査の気運が高まって来た。

坂本氏は昭和34年5月4日、熊本日日新聞に「沖ノ原砂丘遺跡」と題して発掘調査の意義を発表した。以下はその内容である。

沖ノ原砂丘遺跡

天草郡五和町二江 坂本經堯（熊本県文化財専門委員）

天草の古文化

有明海、不知火海の沿岸や内陸の古文化は縄文時代の早期に、さかのぼって、その後、連綿と文化系列をたどって展開しているのにその門口にあたる天草諸島では古墳の所在が知られているだけで、縄文・弥生時代の文化については、ほとんど未聞の地であった。

天草の位置と天然の事情は、古文化的な発顕をこぼむ理由はないので多年にわたって注意して調査にあたってきたがここに主要な砂丘遺跡を紹介する機会に恵まれた。

二江在住、柳原高太郎氏は十余年の長期にわたって古文化財の分布と出土状態とを綿密に記録された。ここに述べる沖ノ原砂丘遺跡は柳原氏の発見である。

沖ノ原砂丘遺跡

天草下島の北西部を占める五和町の海岸地帯は、島原半島の突端と相対して、有明海の門口、早崎海峡を扼する位置にある。通詞島はこの海峡の入口に東西に横たわり島への渡船場となっている沖ノ原岬は、なだらかな二江丘陵につづき、長さ約1,000m、基部は洪積紀の赤土であるが、先端部は砂丘となっている。西岸は東支那海の潮風にけずられて、急崖となり、東岸は波静かな二江の海に面して緩い砂浜、そこに斧研川の小流がそいで、家があつまっている。まさに海の幸、山の幸、畑の幸をかねもった適地で、古文化の発顕にふさわしい。

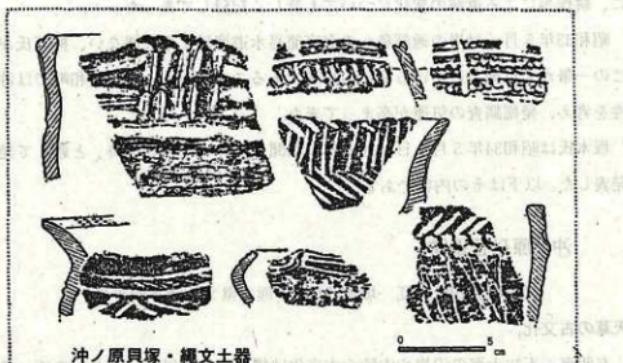
通詞島の東端には二基の円墳が並び、沖の原にも二基の破かいされた古墳がある。砂丘一帯

には縄文・弥生・土師・須恵・瓦器などの土器片が散布し、石器類も多く、鹿骨や魚骨なども採取された。畠の崖には貝殻まじりの遺物包含層があらわれている。

沖ノ原貝塚

昭和33年5月、通詞島への海底水道が埋設されたとき、貝塚の東端部があらわれて、豊富な遺物が発見された。貝塚の南側、すなわち、砂丘の中央線に近よって石器、作りくず、木炭片などが群在したが住居跡であろう。

貝塚は岬の東側、二江の海に面する緩い傾斜地に立地し、水道線にあらわれた部位は東西約14m、厚さ約70cm、貝殻は純海産の16種でカキ、ハマグリ、ホラ貝、サザエ、ニナが多い。



貝層中には縄文土器だけで、弥生土器や土師、須恵などの破片は貝層の上の耕土中に埋まっていた。縄文土器は六形式に分類されるが、その層序的な検出は、工事中のこととて十分な調査が出来なかった。

第1類 純すいな曾畠式の深鉢であるが滑石末の混和は少い。

第2類 繩式 山形口縁の深鉢で粘土紐のはりつけ凸文や貝殻条痕がある。

第3類 形式未定 繩式の粘土紐はりつけ凸文と曾畠式の斜線文とが複合し、爪形の太い凹文が加わって把手のついた深鉢、平底である。みるからに、旺盛な意欲がこもっている。

「沖ノ原式」と名称したい。

第4類 阿高式 太い爪形凹文が施され、曲線文もあるが弱い。器形は深鉢平底。

第5類 西原式 首がしまり、胴がふくらんだ深鉢で凹線の間に摺消縄文があらわれる。植物質食物の炊さんとに適した土器で、縄文生活は、この頃に大きく変化したのであろう。

第6類 御領式の典型的なもので注口土器がある。縄文土器の終末期の土器である。

阿高式浅鉢の内がわに柏葉状のヘラ描き文様が二対施されたものがあるが、珍品である。

弥生土器には須玖式の大ガメとツボの刻文ある凸帶片が出ている。カメ棺と同類であること

が注意される。その他に土師の鉢、コシキの把手、須恵のカメやハサフがあるが同地域の古墳と同時期のものである。

石器には石斧・石ヒ・石ゾク・剝片刃器などの一般的なもの外に石鍬・石棒・石刀があり、なかでも海岸礫をもって打製した尖頭器は岩礁のアワビなどをはぎとったり、貝殻を破って肉を取り出すのに便利なもので、多数の石オモリと共に強いローカル性をもった石器である。

貝・骨・角などで作った道具は、まだみつかっていないが、きな二枚貝で作った貝釧(腕輪)はメノーの石槍と共に見事である。

発掘の意義 ——本県唯一の例—— 約束の地図の文書本部 沖縄考古学研究会
繩文時代の砂丘遺跡は例が少なく沖ノ原は本県下唯一であろう。天草では最有力な繩文遺跡で、しかも繩文の前期から層々相つらなった文化を内蔵することは、比類まれな重要遺跡であるとして過言ではあるまい。

ことに、曾煙式は西唐津を中間にして朝鮮につながり、さらに沖縄の荻原に類型して、東支那海沿岸における天草古文化の位置を示すものであろう。また阿高、西原、御領などの調文中、後期の土器が内陸のそれと全く同一であることは、天草繩文が離島として孤立するものでないことを物語っている。このように沖ノ原繩文が広い世界に呼吸するのみでなく、その主体土器に旺盛な意欲がみなぎっていることは天草の自主性を示すものであろう。

五和町長宮崎武之氏を中心として、本格的な発掘計画がすすめられているが、画期的な成果が期待される。

一方、坂本氏の助言をうけて、五和町では発掘調査を実施することになった。この事業は天草地方における最初の本格的な発掘調査であった。

天草郡五和町二江沖ノ原遺跡調査計画書

第1. 目的
天草諸島における古文化は僅かに松島町、大矢野地区の古墳文化の一部が調査されたにすぎず繩文、弥生時代にさかのぼってはほとんど不明の扉にとざされている。然るに有明海、不知火海沿岸の内陸においては繩文、弥生、古墳、律令時代の系列をたどって展開していることからして、その門戸を扼する天草諸島は、それらの文化の発顕をこばむ理由はない。柳原高太郎氏の多年にわたる誠実な調査研究によって、二江沖ノ原一帯が繩文時代から古墳時代にわたる砂丘遺跡であることが判明したが、昭和33年5月通詞島水道埋設工事に際して繩文時代貝塚が発見された。

この沖ノ原遺跡を発掘して人文の淵源を究明することは天草古文化解明への端緒をうることにとどまらず日本古代史研究上に重要な貢献となるのである。尚調査資料は展示公開して天草の文化、教育、観光上の資料とすることが出来る。

第2. 遺跡の所在地 天草郡五和町大字二江字沖ノ原

第3. 発掘する面積 1. 貝塚地区 70m²

2. 砂丘地区 4m²の試掘地 4ヵ所

第4. 発掘責任者 五和町長 宮崎武之

第5. 調査担当者 菊池郡泗水村大字住吉 坂本経堯

第6. 調査担当者略歴 熊本県文化財専門委員、日本考古学协会会员、日本学术会議有資格者多くの発掘を担当し、或は指導して「古闕原貝塚調査報告」「藤尾支石墓群」その他の著書論文などがある。

第7. 調査団の組織と運営

1. 調査団は五和町長を中心として組織され、総務は運営に任じ調査員には専門学者を、調査補助員及び要員には選ばれたる地元学徒の参加を求める。

2. 調査団は調査終了後に解団し、調査報告編集委員会を結成して整理にあたる。

第8. 調査期間 昭和34年8月1日より10日間

但し、都合によって変更する場合がある。

第9. 調査の結成

1. 調査資料は地元の適所に保管して、分類、復原、実測、撮影して記録とする。

2. 周辺文化との相関関係を調査研究する。

3. 調査報告編集委員会によって調査報告書「二江沖ノ原（仮称）」を編集刊行する。

4. 発掘した文化財は文化財保護委員の指令によって決着するが天草文化財として地元保管方を要望する。

第10. 調査費の概算

1. 発掘諸費 15,000円 土地器具損償、人夫賃

2. 調査員旅費謝礼 30,000円 調査員3名の旅費、宿泊料、謝礼の最低

3. 記録写真費 35,000円 フィルム10巻、カラー2巻

4. 文具費 5,000円 諸文具、実測器材

5. 雜費 5,000円 通信、運搬、発掘雑費

6. 整理編集費 20,000円 旅費、宿泊料、諸器材、編集諸費

計 110,000円

この費用は調査の規模によって、又調査運営の都合によって増減する。

第11. その他

1. 調査実施についての研究打合会を開催する必要がある。
2. 発掘は「文化財保護委員会」に正式に届書を提出し、その認証を得て届出後30日にして着手しなければならない。
3. 調査補助員並に要員には天草郡内教育関係者、天草高等学校郷土研究部、地元の中学校、青年学級、婦人会、その他同好者、特に天草史談会会員等の自主的な参加を要請する。
4. この調査は天草郡内では初めての公式発掘であり、又この種の調査上の知識、技術学習並に文化意慾高揚の機会でもあるから現地発表、調査報告並に資料展示会或は中央学会の招致などが考慮される。

二江沖ノ原遺跡調査団組織（案）

1. 組織

団長 五和町長 宮崎 武之

総務

部長 五和町助役 宮崎 秀雄

部員 企画 山崎 義盛 高橋 伝造 宮崎 善臣

涉外 猪股 末秋 田西 政

庶務会計 田中 一男 岩崎 直正 井上 幾治

調査

部長 坂本 経堯

部員 田辺 哲夫 松岡 史 猪股 末秋 柳原 高太郎

補助員 天草史談会員 久保徳久 藤原 寛克 鶴田 倉造

堀田 善久 限 昭志

要員 天高郷土研究部員 二江中学校郷土研究部員 二江青年団 婦人会

客員 参加希望者

立合者 松本 雅明 乙益 重隆

2. 調査部の組織及び事務分掌

本部

調査本部 井戸屋旅館 保管場所 五和町役場二江出張所

現場本部事務分掌

指揮班 田辺 哲夫 長島 福正 山川 直

実測班 松岡 史 吉田 繁之 福井 市郎

発掘班 田辺 哲夫 鶴田 倉造 藤原 寛克 麻田 茂盛

田中 保明

遺物班 柳原高太郎 山下國臣 柳原操
 撮影班 松岡史 二江中学校職員 岩崎直正
 記録班 田辺哲夫 柳原高太郎 庶務記録 田中一男
 給食班 井上幾治 二江婦人会員

3. 其の他

顧問 県教育委員長 安田租龍 教育庁天草出張所次長 赤池元則
 社会教育主事 北野清治 五和町議會議長 吉田虎一
 五和町議会文教委員長 長島恒雄
 参与 教育委員 井上泰慎 二江中学校長 磨田茂盛
 二江小学校長 長島福正 二江区長代表 橋本定政
 二江婦人会長 長島八重香 二江青年団長 磯本弘志

4. 調査員経歴

坂本経堯 熊本県文化財専門委員 日本考古学協会員
 田辺哲夫 日本考古学協会員 玉名高校教諭
 松岡史 日本考古学会青年部委員 佐賀大学史学科研究室
 松本雅明 熊本県文化財専門委員
 乙益重隆 熊本県文化財専門委員
 猪股末秋 天草史談会幹事
 柳原高太郎 考古学地方研究者 遺跡発見者

5. 調査日程 (事情により変更される。)

区分 日程	午前	午後	夜間
前日	調査本部設営 器材整備	調査員集合 現地検分	調査員会
第1日 8時	結団式、歓迎式 第1貝塚発掘開始宣言	発掘継続 遺物処理 現地経過発表	全上
第2日	第1貝塚発掘継続 地形実測開始	全左、全上	全上、実測図検討 記録の整理
第3日	前日に同じ	全上	全上 発掘品の整理 研究討議
第4日	〃	全上	全上
第5日	第2貝塚、砂丘 試掘	全上、全左	全上
第6日	前日に同じ	全上	全上
第7日	補正調査	全左	全上
第8日	周辺調査、現地復旧作業	全左	全上
第9日	資料整理	発表講演会	記録提出
第10日	借用器材返納、会計事務 解団式 調査報告編集委員会結成	調査員解散	

爾 後

(大曾根田) 鉄道橋等

1. 発掘文化財は現地にて整理保管する。このため部長滞在する。(石器) 2
2. 法的書類の提出 (高太郎原) フィルム撮影 3
3. 遺物の復原、実測、撮影 (史 舟) フィルム撮影 4
4. 総合製図、記録写真調整、並に編集 (吉澤 順) フィルム撮影 5
5. 調査報告書の作製、原稿、製図、編集 (坂本経堯) 撰 6
6. 調査報告書の刊行 (吉澤 順) 印刷 7

前掲の発掘計画書にもとづき、昭和34年8月1日から10日まで発掘調査が行なわれ、多大の成果をあげることができた。この発掘には天草郡内はもとより、県下各地から調査協力者や見学者が集まり、連日新聞紙上を賑わせた。とくに、柳原氏の長女操氏は父高太郎氏とともに現場での遺物の整理にあたり、考古学親子として注目された。この間、8月9日には二江小学校講堂において調査報告会が催された。講堂はその成果を聴こうという人々で、超満員の盛況であった。

1. 調査部長挨拶 (坂本経堯)
2. 調査の経過 (猪股末秋)
3. 遺跡について (田辺哲夫)
4. 石器について (松岡 史)
5. 土器について (乙益重隆)
6. 沖ノ原遺跡の性格 (坂本経堯)
7. 団長挨拶 (宮崎武之)

なお第1次調査には以下の方々の参加、協力があった。
木村晴彦 植島弟四郎 東光彦 牧野俊方 平岡勝昭 田添夏喜 杉村彰一 山川正邦
翌35年8月1日から10日まで二江公民館で、坂本経堯、乙益重隆、田辺哲夫、松岡史氏らと
監修者とによって出土品の整理が行なわれた。またこの間、沖ノ原遺跡から出土した多量の石
器のうち、用途不明の石器があったので実験することとなつた。坂本氏はこの種の石器を「尖
頭石器」「双頭石器」と呼んでいたが、貝塚出土の鉢に一方に傷が付いていることに注目し、
鉢取り用の石器ではないかと指摘された。そこで実際に潜水夫に依頼し、この石器を使用した
実験の結果、みごとに鉢が取れることが分った。この点、坂本氏の物にこだわらない学者とし
ての発想がもたらした成果であって、まさに実験考古学の前駆といえる。

整理後の問題として、報告書の刊行が必要となり執筆担当が決まった。

1. 遺跡環境（田辺哲夫）

2. 土器について（乙益重隆）

3. 石器について（柳原高太郎）

4. 骨角器について（松岡 史）

5. 支脚土器について（隈 昭志）

6. 総括（坂本経堯）

「支脚付土器」を担当することになった隈は、たまたま昭和35年7月20日～26日、小野忠熙氏調査の山口県見能ケ浜遺跡の発掘調査に参加した。この調査で支脚付土器は製塩土器であることがわかり、この調査に参加されていた岡山大学近藤義郎氏に沖ノ原遺跡の遺物について情報を提供した。近藤氏は当時九州では製塩土器が出土する遺跡がなかったため、早速沖ノ原遺跡に注目し、調査の準備に取りかかった。昭和38年12月26日～27日、近藤氏と隈は現地を訪ね五和町教育委員会の協力を頼った。近藤氏の調査は旧石炭積出場を中心に計画され、昭和39年3月25日～30日、近藤氏及び岡山大学学生、坂本経堯、三島格、柳原高太郎、富田紘一氏と隈が参加した。このときの調査を第2次調査と呼ぶこととする。なお、第2次調査の趣旨は次のとおりである。

第2次調査趣旨

(1) 沖ノ原遺跡はどういう遺跡か

沖ノ原遺跡は先年五和町の主催で坂本経堯、乙益重隆などの先生によって大規模な発掘がなされ、その結果遺跡の性質がすく明らかになりました。ごく簡単に申しますと、この地には初め縄文時代の人々が住みつきました。いまから何千年も前のことです。その頃の人々はまだ農耕を知りませんでしたから、狩をしたり魚や貝をとったり木の実木の根を集めたりして生活していました。通詞島に行く通の東側に散っている貝殻はその頃の人々が食べてすでにものですが畠の下に厚くつもっています。この部分を発掘した時に沢山のヤジリや猪鹿の骨魚の骨などが発見されました。この時代はまだ、鉄や銅など金属の道具を作ることができなかつたので石や木や骨でいろいろな道具を作りました。その中でも石が基本の道具となつたのでこの時代を石器時代と呼んでいます。ヤジリも斧もナイフも石で作られています。

このような縄文時代の人々は食料を得やすかったのでしょうか。この沖ノ原に好んで住みつきました。もちろんずっと住み続けたわけではなく、季節によつてはよそに移つたかもしれないし、ある時は長い間無人だったこともしばしばあったでしょう。しかし、その人達が使って

いた土器を見ますと、この時代の初めから終りまでのものがみられますから長い間生活に適した場所とみられていたことも確かでしょう。

ところで、沖の原にはもっと年代の新しい人々の生活の跡もみられます。古墳時代と呼ばれる時代の遺跡です。縄文時代の終り頃からこの時代までの間千年前後は沖の原に人は殆んど住んでいなかったようです。古墳時代というのは、縄文時代の後水稻農耕をはじめそれを発達させた弥生時代に続く時代で、各地方方に政治的統一ができ上り、また大和政権の力が次第に日本の各地に及んでいった時代です。今からざっと1700年前に始まり1300年前頃まで続きました。今までに判っているところでは沖ノ原古墳時代の遺跡はそのうちの1300年前の頃のものです。

このように沖ノ原遺跡には2つのそれぞれ別の時代の遺跡が重なっております。

(2) この毎の発掘は何を目標としているか

先年の発掘では主な目標は縄文時代の研究に向けられました。今度は古墳時代の遺跡の方に重点をおくことになりました。というのは沖ノ原の古墳時代の遺跡が普通の生活遺跡ではなく塩を生産していた遺跡らしいということに気付いたからです。九州ではこれまで古墳時代の製塩の遺跡は一ヵ所も知られていないかったので研究者の間では大変不思議なことに思われていました。ところが瀬戸内海や能登半島あるいは東海地方の一部などでこれまでに発見された古代製塩の道具と非常によく似たものが先年の発掘で思いもかけず出てきたのです。そしてその後の研究によってどうも製塩遺跡らしいと思われるようになりました。そこで、この点をひとつはっきりさせようということで、この毎の発掘を行うことになりました。ですからこの毎の発掘の直接の目標は、九州における古墳時代の製塩を証明し、その状況を明らかにすることに置かれます。

(3) 古墳時代の製塩についてどのようなことが知られているか

これらの地方の古墳時代の製塩の研究もわずか十年ほど前からはじめられたばかりですから充分なことは判っておりませんが、かいづまんでいうと次のようになります。製塩には濃縮過程と煮沸（煎熬）過程の二段階がありますが、順序を逆にしてここで直接必要な煮沸過程についてまず申し上げます。

上の地方ではどこでも土器を煮沸用に使ってています。その土器は地方によってまた年代によって形がさまざまに変化しておりますが、一般にいって日常に用いる煮たき用のカメよりもかなり小形で口径12~13cmくらいから16~17cmくらいで高さは脚を入れないでほぼ口径と等しいのが普通です。そして独特な形をしています。各地方の製塩用の土器を次に図示してみます。

はじめの頃は各地方ともよく似ていますが、古墳時代の後期になると地方色があらわれ始めます。底が丸くなるのは今のところ岡山、香川で顕著です。製塩する時は濃縮した海水をこうした土器に入れ、煮沸するわけですが、1個や2個でなく數十個を一緒にならべて煮沸したと

考えられます。香川県の直島町にキヘエ島という小島があってそこに古墳時代土器製塩の遺跡がありますが、そこでは石を敷きつめた長径約2m、短径1m30~40cmの炉が発見されました。山口市の美濃ヶ浜という遺跡では石だみはありませんでしたが、砂丘の上に熱を受けやけた土塊が長径約3m、短径約2m程の間に認められ、やはり炉であると推定されました。両者の炉の違いは土器の器形に関係があると思われます。両方とも付近に灰や炭の層があつてさかんに火をいたしたこと想像させます。

今まで跡をもたずたまに見出されたもので、そのうちの一つが、山口市美濃ヶ浜の古墳です。この古墳は、その名前から、古墳時代の製塩場であると想われています。

	弥生時代	古 墓 時 代			奈良時代	
推定年代	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀
東 海	?					?
北 陸	?					?
岡 山 香 川	?					?
山 口	?					?

濃縮過程の方は証明が難しいのですが、万葉集などにみられる「藻塩焼く」「藻塩たる」という言葉から考えて海藻を海辺に干し並べ、それを順次集めて甕の上にのせ上から海水をかけ下のカン水ため（カン水カメ）でうけるという方法であったと推定しています。やはり香川県直島のクララ遺跡で当時のカン水ためと推定されるものが浜辺で発見されています。

(4) 土器を使った製塩であるとどうして証明できるか

- まず第一に製塩土器は日常のツボ・カメなどと違った特殊な形をしており文様が全く施されていないこと。このことはこの土器が特殊な用途に用いられたことを示します。
- 日常生活のツボ・カメに比べて非常に多量に作られ使われていること。このことはこの土器が消耗品として使用されたことを示します。
- この種の土器は海辺の地方にしか見られないこと。このことは海に関係ある用途を持つていたことを示します。
- 後で洗い流されなかった場合には灰や炭が多量に発見され、また加熱のあとを示す炉が発

見されること。このことはこの土器が加熱作業を伴ったことを示します。

5. 完全な形のものは殆どなく99%以上が破片で、しかも小片、細片となっているものが多く剝離する傾向がみられること。このことはこの土器の中でカン水が煮沸されたことを示します。カン水を入れて煮沸するとさまざまな結晶が土器の器壁の中にも生じそのエネルギーで剝離性を増し、小片、細片となってしまうことが多いからです。そのため土器は持続的に使用できず1、2回使ってしまうとこわれてられます。このことは2にのべたことと關係します。
 6. 土器の破片に炭酸カルシウムが肉眼にもみえる程附着している場合があること。これには硫酸カルシウムが化学変化した分も含まれていると考えられますが、このことはこの時代の生産作業全般からみてカン水の煮沸時の産物と考える他ありません。
 7. 爐の敷石や炉を構成する土塊を化学分析するとやはり炭酸カルシウムがみとめられることにあげたことと同じです。煮沸過程にこぼれたり廃棄されたりしたものが残っているわけです。
- 以上の点について沖の原遺跡の場合も注意して調べてゆけば証明できると思います。

この調査の概要について、坂本氏は昭和39年4月29日の熊本日日新聞に「天草郡沖ノ原発掘の成果——古代の製塩」を発表し、また、坂本氏、隈により、昭和39年5月30日、肥後考古学会例会において「天草古代製塩遺跡について」と題して発表した。なお、近藤氏により「天草式製塩土器」(『日本塩業の研究』15、日本塩業研究会 昭和49年3月31日)として発表されている。

天草郡沖ノ原発掘の成果

肥後考古学会長 坂本經堯

押型文土器とよばれている縄文土器は9000年もの古代の什(じゅう)器である。この土器には貝殻で形をととのえた条痕(こん)がのこっている。押型文土器は宇土市曾眞貝塚下層などのように往年の海岸の住居だけではなく、八代郡泉村下鶴や阿蘇郡小国町原ノ山など山奥にまで分布しているので海の幸と山の幸との交流は少なくとも縄文時代の早期にさかのぼるのである。海の幸とは山では珍しい貝殻だけではなく、魚や貝類また海藻(そう)を塩づけにして干したもの、後世のいわゆる「ひしお」が主要なものであったのである。人類は塩分をとらねば生きていゆけぬのである。動物の内臓や骨髓の有機塩は、確かに塩分補給に役立っていたのであるが、これだけではなく海の塩は縄文の当初から求められていたのである。

耕作文化がおこり植物食料が主食となると塩はいよいよ重大な位籠を占める。弥生時代が古墳時代に展開して内陸の開発が進むと、製塩は專業化されたのに相違ない。登り窯(がま)を

築いて高度な土器須恵を焼く技法、あるいは砂鉄をとかして鉄をつくるタタラ製鉄の技法など、進歩した「火の技法」が製塩の窯に利用されたら土器製塩は飛躍の段階に達するのである。

春となって日照が強くなると、海藻も茂り、藻塩たる法によって「ひしお」がつくられる。さらにこの濃縮した海水を土器にいれて、日照によって結晶塩をつくる原始製塩から、窯のなかで煮沸していりあげる方法に発達すると、時間の上からも量の上からも、有利になるのみでなく、製塩の場所も特別な条件をもった海岸だけに限定されないようになる。

有明海、不知火海沿岸および内陸の盛んな古墳文化の背後には必ず塩があったのである。製鉄や製陶と同じく製塩も有力な経済基盤であったと考えられる。どこで、どのような方法で製塩されたのか九州では、まだ調査研究された例がない。

天草郡五和町二江、沖ノ原は有明海の入り口の早崎海峡に位置する通島に渡る岬で、縄文早期以降、弥生時代を経て古墳時代に及ぶ大遺跡である。昭和34年、柳原高太郎氏の貝塚発見の機会に発掘されたとき、沖ノ原砂丘の性格を調べるために3ヶ所の試掘を行った。この第二試掘地は西海岸側でわずかに2m²の面積から古墳時代の鉄鎌や須恵や土師の土器とともに「わんの下に支脚をはりつけた土器」の破片が200余り出土した。特別な用途をもった土器で、九州では初見のものであるので「沖ノ原支脚土器」と名づけられた。そのころ、日本古代製塩についての研究がおこり、瀬戸内海の師樂式土器は製塩用の土器であることが確かめられたが、沖ノ原支脚土器は、この師樂式土器に類似し古代製塩土器に擬せられるようになった。

土器製塩については岡山大学考古学研究室近藤義郎氏の一連の業績がある。藻塩法によって濃縮した塩水を素焼き土器にいれて炉のなかで煮沸して結晶塩をつくる方法が実験された。瀬戸内地方、能登半島の土器製塩の調査が進み、土器産式の編年についても考察がなされるようになった。天草沖ノ原支脚土器包含地の発掘は、このような機運の上で計画されたのであった。

発掘は3月25日から30日まで6日間にわたり五和町長葦原浩二氏を団長とし、岡山大学の近藤氏一門を中心として調査団が組織され、肥後考古学会より隈昭志、亀井勇、鶴田倉造、柳原高太郎諸氏が調査員となり、二江中学、二江小学校社会科諸君が参加した。沖ノ原の平田百穂氏は調査員宿舎を提供され、五和町公民館長田中一男、二江神社宮司勝木保、沖ノ原区長橋本貞政諸氏の協力があった。ことに坂瀬川炭鉱と川床繁利氏は発掘地主として承諾されるなど、地元の積極的な協力のなかで発掘は成功した。

沖ノ原は南方の丘陵を基点として北方にのびた砂丘で東海岸は有明海に面して波静かであるが、西海岸は東支那海に面して波荒く断がいとなっている。支脚土器の散布は西海岸に添うて濃厚であり、前記の試掘地はこの西海岸側であった。天草に限らず島の耕地は直接に食生活につながるので、寸土の面積も貴重であって発掘地は空地に限られるので、必ずしも適地を選定することができない。

Aトレンチは貯炭場の空地で海岸に並行して長さ15m、幅3mを4区に区分してI、III区を発掘した。BトレンチはAトレンチの北方約30mはなれた川床繁利氏畠の空地で海岸に並行して長さ9m、幅3mを3区に区分してI、III区を発掘した。A、Bトレンチとも包含層の状態には大差はない。表土下約40cmないし60cmに大波をかぶってできたれき層が平らにのびている。このれき層より上位が古墳時代の須恵、土師、支脚土器包含層であり、れき層の下位は縄文土器層である。B I区では支脚土器包含層の直下に東西に並んだ柱穴があり、この部位の南約4m（B III区）には炉床の焼土があった。製塩跡と考えられるが、全面発掘することができなかった。

支脚土器は「わんの下に支脚をつけた素焼き土器」で大小あるが形式は同じである。口径10cm～14cmで約1ℓ内外を入れることができる。完形のものは全くなく口縁部と支脚部のみで、わんの下半部は細片となって失われている。濃縮した塩水を入れて煮沸して、結晶塩ができるとき、胎土にしみこんだ塩水も結晶するので胎土ははく離して、やがてバラバラにくずれるのである。この現象は製塩土器に通じてみられるもので、製塩土器の顯著な特徴である。

古代製塩土器



B III区に出現した炉床は南北方向に約2m、東西幅約1mのだ円形でほぼ水平である。厚さ約3cmに赤変している。この炉には前記の支脚土器數十個（約50個）を並べて煮沸することができる。炉壁や天井部が残っていないのは大波をかぶってくずれたのであろう。須恵や土師片とともに多数の支脚土器片が散乱してれき層間に埋まっていることも大波をかぶった状態を示している。

この支脚土器を用いて製塩した年代は共存する須恵や土師の形式によって古墳時代の後期、6世紀に比定される。須恵坏やはそう土師のこしき、滑石製紡錘（すい）車、ガラス小玉、鉄鎌などの共存遺物の年代も呼応している。沖ノ原の古墳、通詞島の古墳は製塩年代の營造である。製塩と運送船とによって興起した豪族の繁栄を物語るものである。

沖ノ原支脚土器は古墳時代後期における製塩用土器である。形式は瀬戸内のものとも、また北陸の製塩土器とも異なる形式上の特徴をもっているので「天草式製塩土器」と名称した。この同類の製塩土器が宇土郡三角町大田尾に発見されている。有明海、不知火海沿岸では数多くの製塩遺跡が発見されることであろう。これらの類例を比較検討することによって土器製塩の起源と終末とを知ることができるのである。ここに天草・沖ノ原における古代製塩遺跡の概要を述べて、重要課題である古代製塩についての研究足場としよう。

古代製塩遺跡発掘の意義

肥後考古学会長 坂本経堯

塩分をとらなければヒトは生きていられない。古代の人は、どうして塩をつくったのであろうか。

日本では数万年、あるいは数十万年以前からヒトが住んでいた。長い期間にわたった無土器時代の人々は、やがて土器をつくって食物を煮（に）ることをおぼえた。すなわち縄文時代に止揚されてきた。この石器時代は7、8千年の長期間にわたって、ほとんど全日本にその住居のあとをのこしている。この人々の生きるに必要な塩分はどうして摂（と）っていたのであろうか。魚や鳥獣の内臓や骨には多量の有機塩がふくまれているので、動物の補食は塩分の補給に役立ったと考えられる。

しかし、縄文後期になると、コメ、アワ、ヒエ、クリなどの澱粉食が増加していく。ことに弥生時代になると農業生産が主業となって、食料が貯蔵され、人口はぐんと増加し、ムラの集団は平野地帯にふえてくる。そうすると動物の有機塩だけでは塩分の不足をきたすので、塩を求めるための特別の手段が絶対に必要となるのである。

海岸に多い貝塚住居には、この塩づくりがあったと考えられるが、土器を使用目的によって形式を別々につくるという分化作用が少ないので、土器製塩があったとしても分析は困難である。わずかに土器に付着したカルシウムの多量性によって土器製塩が推察されている。

万葉集には海辺に藻塩焼く煙のたちのぼる風情が歌われている。この「藻塩法」は海藻を海水に浸して乾燥させ、オケの水にひたすことなども繰り返してできた濃塩水を土器に移して煮沸し、結晶塩をつくる方法である。コメ、ムギ、マメを醸酵させて塩にまぶした「般びしお」鳥類魚肉を用いた「肉びしお」海藻や果実、若芽などを用いた「草びしお」などの古語は塩の貯蔵や運搬の方法であった。

大分県国東町の国東弥生遺跡では住居跡内部に広口カメが斜めに据えつけられたものがあつて「ひしお」の貯蔵用であろうと考えられた。

弥生時代が古墳時代に展開すると、塩はいよいよ大量に必要となる。奈良時代に歌われた藻塩たく製塩法はどれぐらいの前代にさかのぼれようか。

岡山大学考古学研究室の近藤義郎教授は昭和36年夏、瀬戸内海家島群島の師楽式土器遺跡を調査して、師楽式土器を用いた古代製塩遺跡で「藻しほたる」の古語に歌われる製塩法であろうと主張した。近藤氏はさらに能登半島における土器製塩遺跡を調べて、煎熬用の土器には台付、棒状尖底、平底の3種があり、その形式差は編年（古さの相違）を考えられることを指摘された。煎熬用土器は濃縮塩水を天日乾燥するものではなく、火気を通じて結晶塩をつくるもので、遺跡には塩分によって剥離痕のある多量の土器がたい積し、木炭末や灰がともなっている。このような古代の土器製塩遺跡は九州では発見されたものがない。

天草郡五和町二江字沖ノ原は天島下島北面の通詞島に渡る小さな岬である。東は有明海の門

口となる早崎海峡に面し、波静かな砂浜となり、西は東シナ海につながる天草灘に面して、海岸は荒く断がいとなっている。二江住の柳原高太郎氏の多年の調査で、沖ノ原全域が古代遺跡で、北半は砂丘遺跡であることがわかった。昭和34年の貝塚部位の発掘では、縄文早期の曾畠系貝層下の完全人骨2体と1万点をこす多数の遺物を出した。なかでも、縄文中期層には接身具、骨角器などに優秀なものがあり、その姿相は意欲おう盛で「沖ノ原式」の学名をもって呼ぶにふさわしいものであった。

沖ノ原砂丘と周辺には縄文貝塚のほかに弥生中期の土器が表面採取されており、大石囲いの石室墳二基があり、土師、須恵の散布が少なくない。また狭い瀬戸を渡った通詞島にも二基の円墳と磨石斧、土師、須恵、多数の黒曜石の剣片が採取されている。瓦器や青白磁も出土するので沖ノ原は少なくとも縄文早期より各時代、時代の人文の跡をもつという複雑な大遺跡である。こうした事情から、貝塚の主発掘地のほかに3ヶ所の試掘を試みたのであった。

この第2試掘地では、縄文ではなく土師系の奇妙な土器が、 2m^2 の狭い面積から200余点掘り出された。この土器はほとんど破片となって堆積して完形は1個もない。復原すると口径10cm内外の深窓の下に、座つきの支脚がついたもので「沖ノ原支脚土器」と名づけた。この土器片堆積層には須恵カメの破片が多く包含し、鉄製のカマ、木炭末も混じていた。須恵や鉄カマの年代は古墳後期のものに比定されるものである。埋れている多量の支脚土器は普通の生活用の什（じゅう）器ではなく特殊な用途をもつものであろうと考えられていた。

このように古代製塩遺跡にぎせられる沖ノ原の発掘は、地元五和町を主体として有志の協力によって3月25日から5日間の予定で実施されることになった。発掘の規模はいろいろの事情によって製塩施設の全貌を掘開することは出来ないが、古代史上の重要な新しい分野である古代製塩問題解明への一步となるであろう。

沖ノ原は九州における古代製塩遺跡の第1号であるが、決して沖ノ原だけではない。現に熊本県宇土郡三角町大田尾においても同類遺跡が最近に発見されている。沖ノ原発掘が糸口となって、九州における製塩遺跡研究が展開することになれば今後の発掘の意義は重大といえよう。

（毎日 39. 3. 3）

その後、昭和44年、特別養護老人ホーム「紫明寮」の建設事業がもちあがった。町教育委員会の依頼によって、敷地予定地内の調査を坂本經堯、緒方勉両氏が行なった。

昭和48年6月1日、五和町教育委員会から県文化課へ通詞架橋計画があるとの連絡があった。通詞島へは当時渡船によるほかなく、交通の便をよくするために架橋するという計画であった。この架橋に伴ない砂洲の中央部に取付道路が新設されることになり、事業は県土木部漁港課の担当であることがわかった。県事業ではあるが完成後は町道へ移管するということから、調査経費は五和町が負担することになった。そこで6月12日、県文化課から林幹彦氏と限が現地踏査を行ない、池崎圭吾教育長、長嶋福正公民館長、総務課山本繁氏らと協議し、7月4日から

発掘調査を行なうことになった。調査主体は五和町とし、柳原高太郎氏と隈及び東幸雄、豆塚仁志、佐藤智氏らが調査にあたり、出土した人骨については急速長崎大学内藤芳篤、坂田邦洋氏らが調査し、8月8日調査を終了した。なお、この間福岡県文化課松岡史氏、同県地区調査員前田軍治氏らが来町され、調査に関する助言及び協力をうけた。

調査報告会は昭和48年11月5日、二江小学校講堂で開かれた。

1. 沖ノ原遺跡の人骨について（内藤芳篤）

2. 沖ノ原遺跡について（隈昭志）

なお、人骨については内藤氏により「沖ノ原遺跡の人骨」（長崎大学医学部 1973. 10. 15）として報告されている。

以上、第4次にわたる発掘調査が実施されたが、報告書の刊行がなかなか進行せず五和町としても何とか刊行の努力を図られたが、坂本經堯氏が昭和49年に逝去されたため、一次中断のやむなきにいたった。しかし、五和町としては調査報告書刊行をさらに具体化するため、昭和51年、田辺哲夫氏（当時玉名高等学校校長）と協議し、その意をうけて昭和51年9月2日、隈は五和町へ出向いて整理計画を協議した。その後、遺物整理等の予算が計上され、数次にわたる打合を開いて報告書の刊行となった。

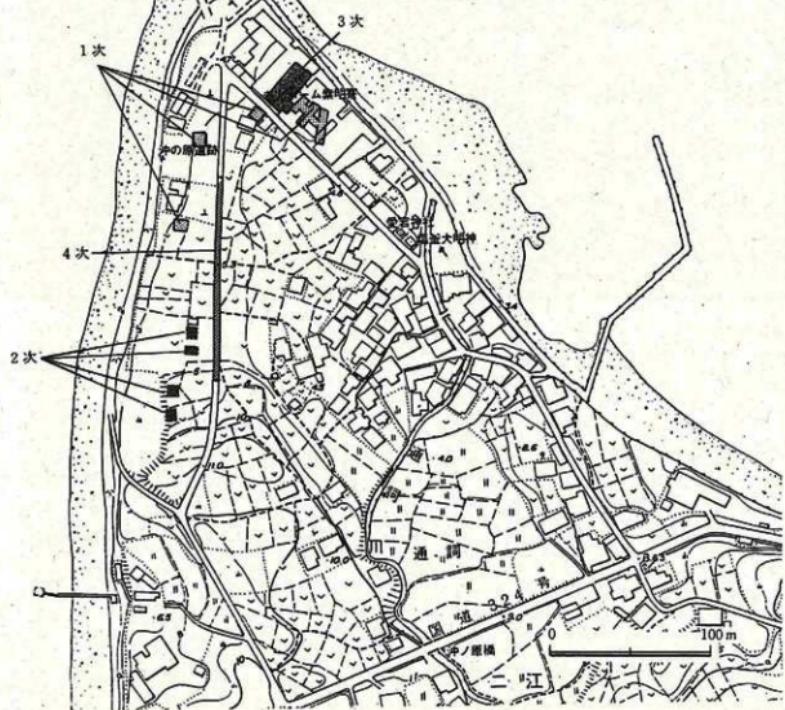
2. 遺跡の位置（第1図）

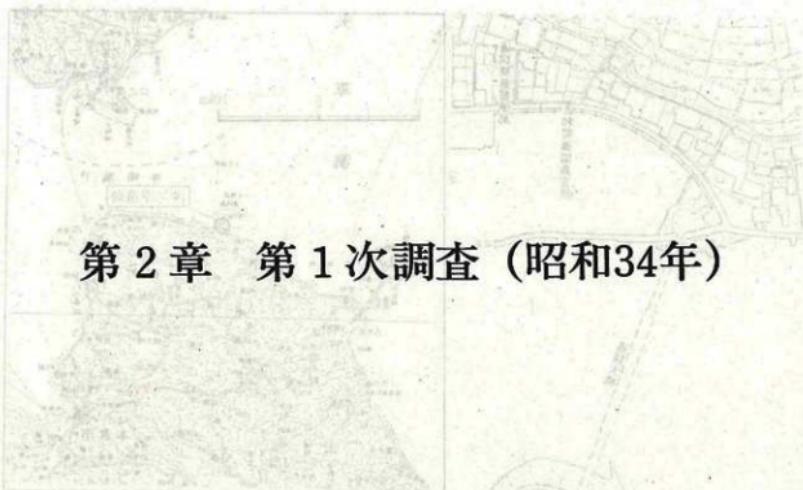
天草下島の北端部は比較的単調な円弧状の海岸線であるが、ほぼその中央部に三角形に突出した半島が沖ノ原である。行政上は、天草郡五和町大字二江字沖ノ原である。なだらかな二江の丘陵から北方にのびる地形は砂嘴によって形成された地形である。砂嘴は北を頂点とした三角形状を呈し、東西幅は付け根の部分で約460m、南北の長さは約450mで、全体として北方に向って緩かに傾斜している。標高は付け根を走る国道324号で8m～11m、砂嘴の突端で0mである。また砂嘴は中央部がやや高く、西寄りに小さな高まりがある。

砂嘴の北は狭い瀬戸を隔てて通詞島を望み、西は天草灘に、東は早崎海峡に面している。通詞島との間は、潮の干満による潮流が著しく、架橋以前の交通手段であった渡船（伝馬船）も、潮流を横断するのに苦労が多かった。

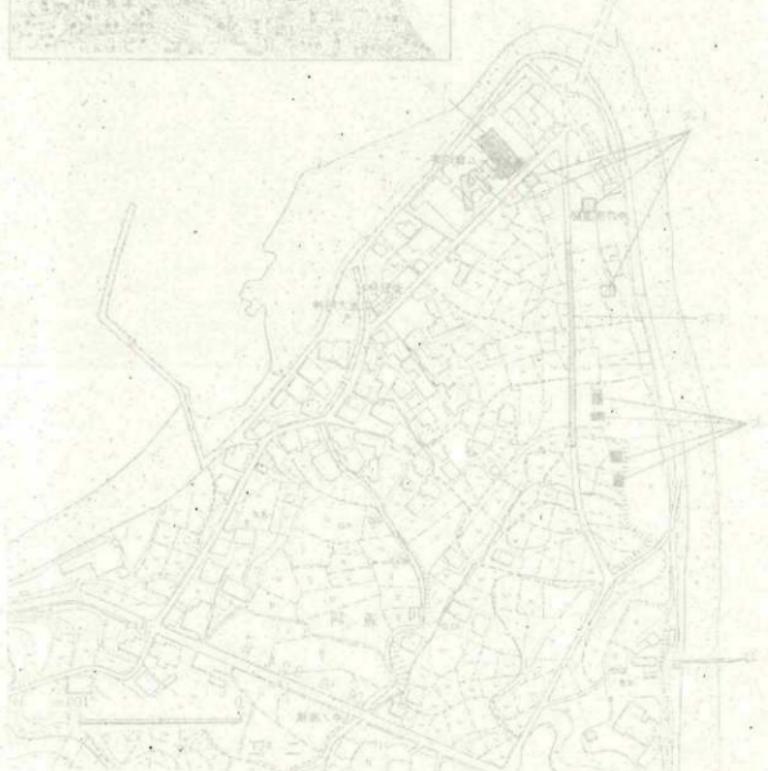
遺跡は砂嘴の突端から南北約300mまでに広がりをもつと推定され、それより以南では遺物の散布状態もまばらになる。遺跡の範囲については昭和10年代から表面採集を続けられた柳原高太郎氏の努力に負うところが多い（第2図）。これらの採集による資料によれば、縄文時代中期を中心とした一群と古墳時代後期の遺物が大半であった。

周辺の遺跡としては、沖ノ原に沖ノ原東古墳、同西古墳があり、対岸の通詞島の東端丘陵上に通詞島北古墳、同南古墳が存在する。





第2章 第1次調査（昭和34年）



1.はじめに

沖ノ原遺跡は柳原高太郎氏より発見され、見守られてきた。その時期も、氏の幼年時代から出土遺物に興味を持たれたとの事であり、定かでない。しかし、それがまとまって発見されたのは昭和33年、通詞島への簡易水道埋設工事により貝層の切断により出土した遺物によってである。これも柳原氏の注意深い遺跡の観察により発見されたものであるといえる。鶴田倉造氏から連絡をうけた坂本経堯氏は、柳原氏の採集資料を実見し、「それを実測した。これが、沖ノ原遺跡が学界に知られる端緒となったものである。そこには柳原氏の長年の遺跡に対する執念と、また、偶然ともいえる坂本氏との出会いがこの報告書の基ともなったのである。これが契機となり第1次の調査が実施され、その時出土した製塩土器の追及のため第2次調査、また、土木工事による第3、4次の調査へと繋がっていった。

この間、柳原氏は地元にあって遺跡の調査と観察を続けられ、坂本氏は第1次から4次までの全ての調査に指揮をとられている。沖ノ原遺跡が、今知られているのは、この両氏の御努力に負うところが多いことをまず記しておきたい。

第1次調査から25年、沖ノ原貝塚の名は全国の研究者の知る所となつたが、度々計画された報告書は種々の事情もあり、ついに刊行されるには至らなかつた。だが、地元の五和町では報告書出版の意を捨てられず、ここに第1次から4次までの報告書刊行にこぎつけられた訳である。現在、各地の都道府県や市町村では無数の発掘調査が実施されている。しかし、残念なことにそれは自分達の歴史を知り、郷土をいかに理解するかという基本姿勢に立脚したものは皆無にちかい。多くのものは発掘調査から報告書の刊行まで、ベルトコンベア式に事務処理されたものの成果にすぎない。事情が許さず報告書の刊行が無かったものは、そのまま打ち捨てられ、顧みられることは少い。その様な風潮の中で、五和町によるこの報告書の刊行には敬意を表さなければならぬ。

しかし、25年の時の流れは大きい。終始調査の主体となられた坂本氏は昭和49年9月14日に他界され、それからもう10年にもなる。沖ノ原報告書は氏の最も気にかけられていたことであり、病床に臥してまでも心配されていた。また、この間に調査に関係された方々においても熊本を去られた方や病を得て他界された方もおられる。沖ノ原貝塚に青春をかけられた調査員も今は各々の職に幹部クラスとして多忙な日々を送られている。

坂本氏は生前、調査資料を丹念に整理され、貴重な調査録を数多く作られている。この調査録は先生の没後、松枝未亡人と御子息経昌氏により適切に保管されてきた。そこで第1次調査の報告は、この調査録をもとに富田が執筆することとなったものである。富田自身は、この第1次調査とは全く関係をもつておらず、坂本先生の弟子の末席を汚させていただいていることによる重責である。このため、あえて故坂本経堯先生と連名にさせていただいた。だが、調査

の雰囲気や感動を体験せず、執筆表現に適切さを欠くやも知れない点を御詫び申し上げたい。

尚この報告に使用させていただいた資料は、坂本氏作成の調査録のほか、土器については報告書作成予定の土器担当であられた乙益重隆氏の拓本・実測になるものをそのまま使用させていただいている。記して感謝申し上げたい。

2. 第1次調査前の遺跡と遺物

沖ノ原貝塚の出土遺物は長年に亘り柳原氏により収集されてきた。それにより舌状に突出する砂丘上のほぼ全面にわたり、縄文・弥生・古墳の各時代の遺物の出土が知られる。昭和32年4月9日、坂本氏はその収集資料を見て遺跡の重大さを直感し、柳原氏の案内で遺跡を踏査している。33年5月には、通詞島への水道管敷設工事中、柳原氏により貝層の存在が確認され、多くの資料が得られた。

この間の事情を坂本氏が34年5月に纏められた調査録の一部により紹介しよう。

柳原高太郎氏は多年に亘って注目され、その蒐集にかかる古代資料は、縄文・弥生・古墳時代にわたっている。現在のところ天草郡内に於ける唯一の縄文住居址（筆註・生活遺跡のこと）の発見である。昭和33年5月、通詞島に渡る水道管の敷設工事にあたって、柳原氏は情熱をそそいで調査にあたられ、遂に有力なる貝塚遺跡を発見されたのであった。

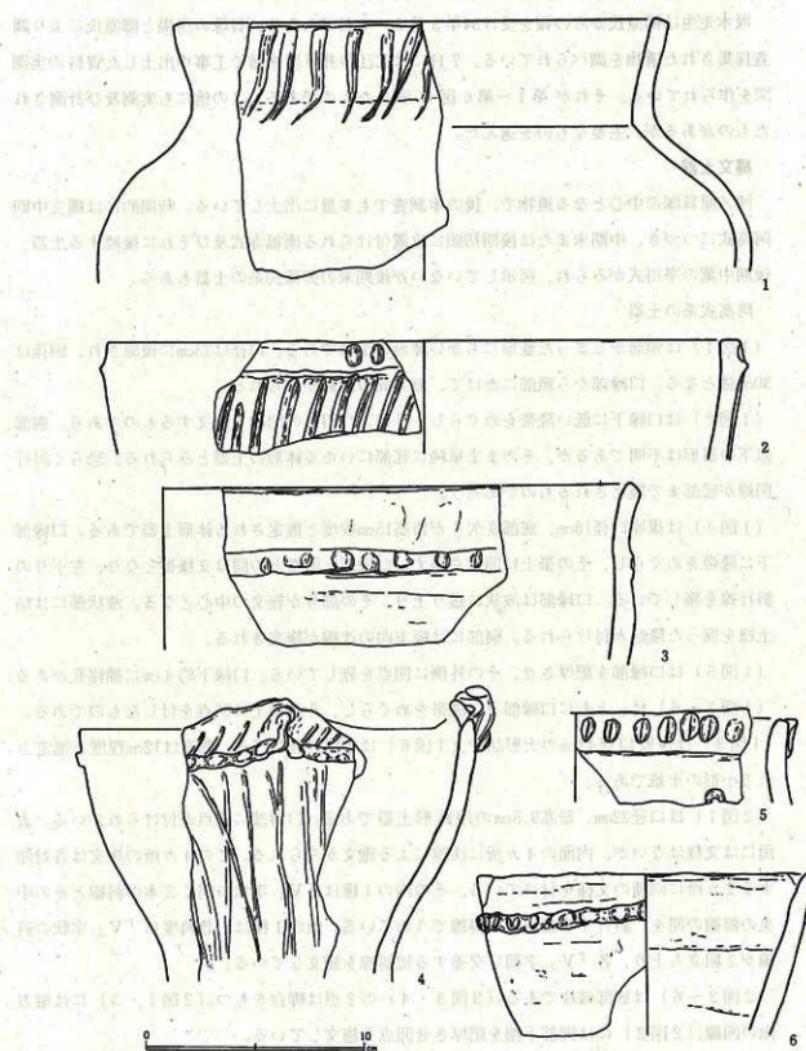
筆者は昭和32年4月9日、本渡市荅洲館に於いて柳原コレクションの一部を拝見して驚き、その後柳原氏の東尋で二江を訪うこと三度、柳原氏の精緻な報文書状によって理解を深めて、「天草古文化の前進一通詞の遺跡」並に「二江の古文化」（みくに紙）を発表して柳原氏の業績をたたえるところがあった。昭和34年3月5日～8日にわたって、沖ノ原貝塚資料をつぶさに調査研究することが出来た。柳原氏は健康を害していられたのにもかかわらず、御子方と共に懇切に教示して頂いた。

重大な意義をもつ沖ノ原貝塚の発見は正に純固として情熱あふれる柳原高太郎氏の努力の結果である。

このように、柳原氏の調査により、貝塚の状況も次第に知られるようになったらしい。

昭和33年5月の水道管敷設では貝層が切断され、この遺跡が貝塚を形成していることが判明した。柳原氏はこの工事で多数の遺物が出土しているため、工事のあい間あい間に調査を続けられた。この貝層は道路から東に9mのところで、貝塚西端があらわれ、23mのところで終った。この部分以東は埋立土層であり、遺物は存在しなかったという。貝層は約80cmの厚さで、遺物の包含は貝層下の土層にまで及ぶ。この貝層は岬の東側傾斜面に海岸線に沿って南北に長く堆積するようである、と推定された。

この確認された貝塚とは別に半島状に突き出した岬の西側の畑にも貝殻の散布するものがあ



第1図 調査前の遺物(1)

り「地主は貝殻が堆積している」という。これは「沖ノ原 西貝塚?」と記録されている。

坂本先生は柳原氏からの報を受け34年3月5～8日にわたり、貝塚の現場と柳原氏により調査採集された遺物を調べられている。7日には二江の井戸屋旅館で工事中出土した資料の実測図を作られている。それが第1～第6図に示したものである。この他にも実測及び計測されたものがあるが、主要なものを選んだ。

縄文土器

沖ノ原貝塚の中心となる遺物で、後の本調査でも多量に出土している。時期的には縄文中期阿高式につづき、中期末または後期初頭に位置付けられる南福寺式及びそれに後続する土器、後期中葉の辛川式がみられ、図示していないが後期末の御領式系の土器もある。

阿高式系の土器

(1図1)は頸部がしまった壺形にちかい鉢形の土器である。口径は23cmに復原され、胴径は30cm強となる。口縁部から頸部にかけて、縦方向の凹線がみられる。

(1図2)は口縁下に低い隆帯をめぐらし、その下に斜行の凹線を施文するものである。胴部以下の器形は不明であるが、そのまま単純に底部にいたる鉢形の土器とみられる。恐らく斜行凹線が底部まで施文されるものであろう。

(1図4)は復原口径18cm、底部を欠くが器高15cm程度と推定される鉢形土器である。口縁部下に隆帯をめぐらし、その帶上に凹点を施す。口縁部と隆帯との間は文様帶となり、左下りの斜行線を施している。口縁部は波状に盛り上り、その部分が施文の中心となる。波状部には粘土紐を捩った隆起が付けられる。胴部には縦方向の沈線が施文される。

(1図5)は口縁部を肥厚させ、その外側に凹点を施している。口縁下約4cmに補修孔がある。

(1図3・6)は、ともに口縁部下に隆帯をめぐらし、その帶上に凹点を付したものである。

(1図3)は復原口径42cmの大形品で、(1図6)は復原口径16.5cm、器高は12cm程度と推定される小形の土器である。

(2図1)は口径22cm、器高9.5cmの浅鉢形土器である。口唇部に凹点が付けられている。表面には文様はないが、内面の4ヵ所に沈線による施文がみられる。この4ヵ所の施文は各対向する2ヵ所に同種の文様を付けている。その内の1種は、「V」字状に開く2本の斜線とその中央の縦線の間を、斜行する葉脈状の斜線でうめている。他の1種は、急角度に「V」字状の斜線が2組立ち上り、各「V」字間に交差する短斜線を施文している。

(2図2～6)は底部破片である。(2図3・4)の2点は脚台をもつ。(2図1・3)には縦方向の凹線、(2図2)には脚部下端を肥厚させ凹点を施文している。

これらの土器はいずれも阿高式系に属するが、ほとんどのものは南福寺式である。(1図1、2図1)は、それよりも後出である可能性がある。

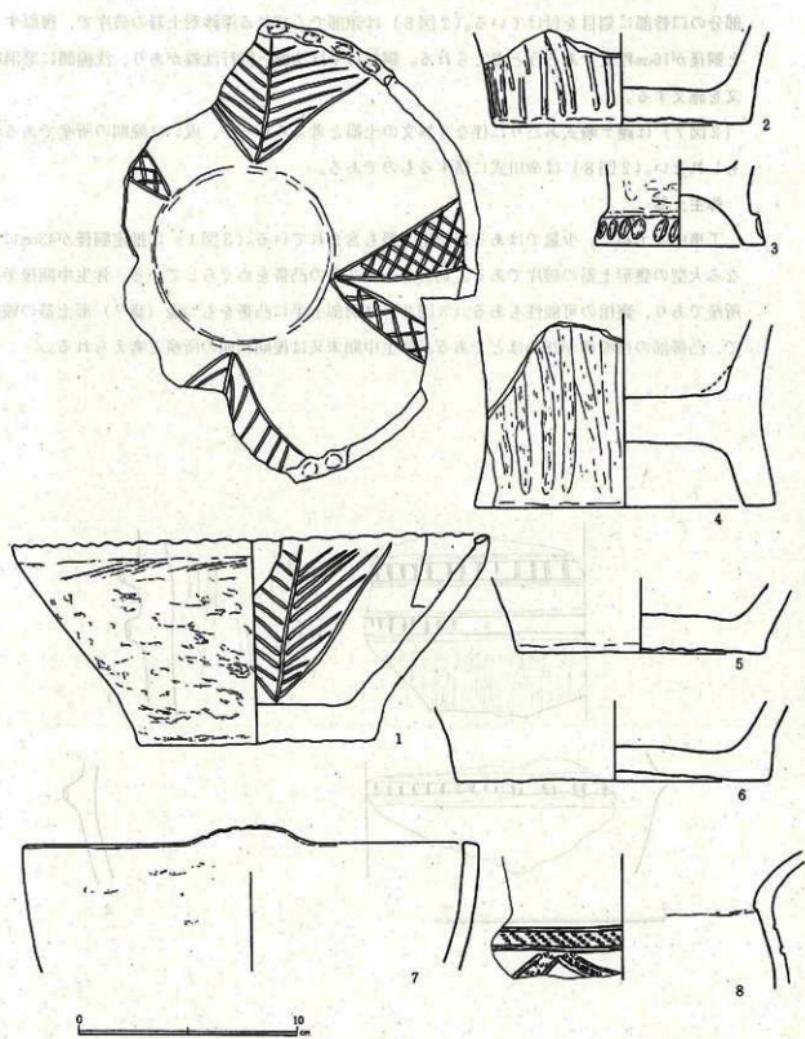
後期中葉の土器

内を、3強調や頭一四面鏡口の断面が前口側第一、二枚土器等の「漆板毛面鏡」(4図5)

の半圓底、外内面の様子等を示す。又細部(3図1)。4(4)の左側は頭部と諸器口の接觸

部細部口面施方。(左)吹き出物口付近の施方。右(右)吹き出物口付近の施方。

省略省略の問題。又、(左)ある器の文部の半圓底、(右)吹き出物口付近の施方。



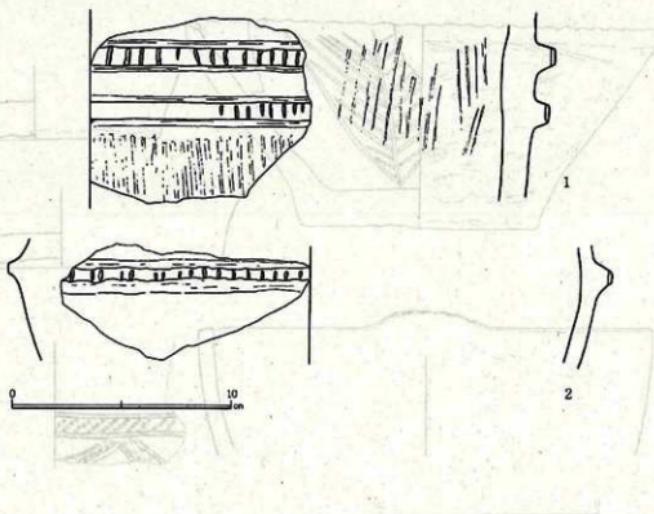
2. 調査前の遺物(2)

(2図7)は器面を研磨した鉢形土器で、復原口径21cmを測る。口縁部の一部が隆起し、その部分の口唇部に刻目を付けている。(2図8)は頭部でくびれる深鉢形土器の破片で、復原すると胴径が16cm程度であろうと考えられる。胴部に平行沈線と斜行沈線があり、沈線間に磨消繩文を施文する。

(2図7)は鐘ヶ崎式あたりに伴なう無文の土器と考えられるが、或いは晩期の所産であるかもしれない。(2図8)は辛川式に属するものである。

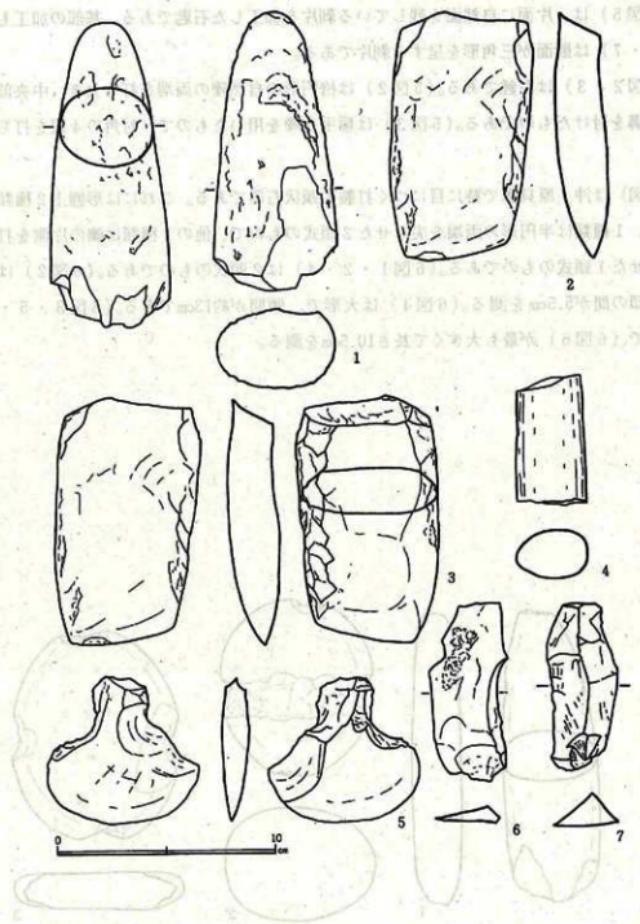
弥生土器

工事中の土器に、少量ではあるが弥生土器も含まれている。(3図1)は推定胴径が43cmにもなる大型の甕形土器の破片である。刻目をもつ2条の凸帯をめぐらしている。弥生中期後半の所産であり、甕棺の可能性もある。(3図2)は胴部上半に凸帯をもつ壺(窓?)形土器の破片で、凸帯部の復原径が28cmほどである。弥生中期末又は後期初頭の所産と考えられる。



第3図 調査前の遺物(3)

頭頂部・上口部・側面の表面を磨いたもの（1図2）。表面が粗びきのもの（1図3）。表面が粗びきで側面を磨いたもの（2図1）。側面を磨いた頭頂部・上口部・側面を磨いたもの（2図2）。



第4図 調査前の遺物(4)

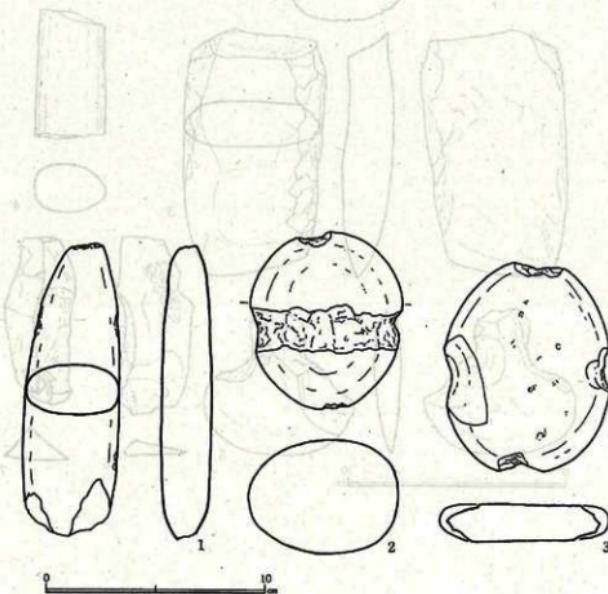
石 器

(4図1～3、5図1)は磨製石斧である。(4図2・3)は基部及び側面を粗く加工し、刃部を研ぎ出している。(4図4)も磨製石斧かと考えられる。

(4図5)は、片面に自然面を残している剥片を加工した石匙である。基部の加工も粗い。(4図6・7)は断面が三角形を呈する剥片である。

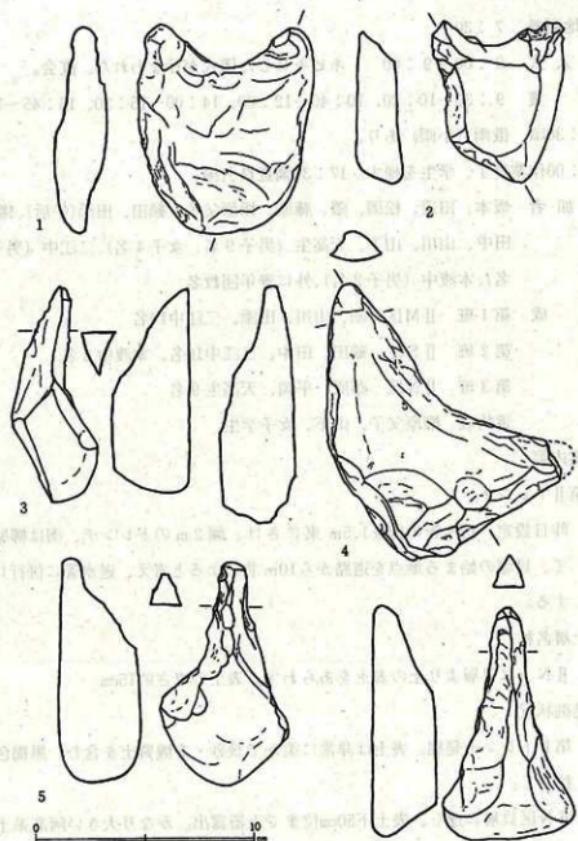
(5図2・3)は石鏃である。(5図2)は楕円形の自然礫の両端を打ち欠き、中央部に搞打による溝を付けたものである。(5図3)は扁平な礫を用いたもので、対角の4辺を打ち欠いている。

(6図)は沖ノ原貝塚で特に目につく打製尖頭状石器である。これには形態上2種類のものがある。1種類は半円形の両端を尖らせた2頭式のもので、他の1種類は礫の片側を打ち欠いて尖らせた1頭式のものである。(6図1・2・4)は2頭式のものである。(6図2)は小形で、頭と頭の間が5.5cmを測る。(6図4)は大形で、頭間が約13cmである。(6図3・5・6)は1頭式で、(6図6)が最も大きくて長さ10.5cmを測る。



第5図 調査前の遺物(5)

図1員8手続研顎



第6図 調査前の遺物(6)

3. 調査日誌抄録（田辺哲夫氏の調査ノートより）

昭和34年 8月 1日

・現地到着 7:30

・鍵入式 8:00~9:00 キビキビした儀式が行なわれた。直会。

・作業 9:30~10:20、10:40~12:00、14:00~15:20、15:45~17:00

・16:30頃、俄雨（小雨）あり、

・17:00作業終了、学生を帰す。17:30調査員引揚

・参加者 坂本、田辺、松岡、隈、藤原、柳原父子、鶴田、田添（午後）、猪股、平岡、田中、田中、山川、山下、天高生（男子9名、女子4名）、二江中（男子20名、女子10名）、本渡中（男子2名）、外に青年団数名

・編成 第1班 ⅡM区 隈、山川、田添、二江中10名

第2班 ⅡS区 鶴田、田中、二江中10名、本渡中2名

第3班 ⅡN区 藤原、平岡、天高生 9名

遺物班 柳原父子、山下、女子学生

・作業内容

第Ⅱトレンチ

昨日設定、送水管の線を1.5m 東にさけ、幅2mのトレンチ、南は柳原見取図によつて、貝塚の始まる地点を道路から10m北によると考え、送水管に併行に長さ10m設定する。

土層名称

ⅡN上は貝層より上の表土をあらわす。表土の厚さ約15cm

発掘状況

第Ⅱトレンチ発掘。表土は非常に柔かで飛砂・有機質土を含む。黒褐色を呈し、砂鉄粒多し。

ⅡN区貝層に達し、表土下50cm位まで土器露出。かなり大きい阿高系土器の破片が多く、土器には型式差がない。貝輪、骨鏃、土器把手、魚歯など出土。

ⅡM区・ⅡS区表土下に夥しく礫が発見される。礫は平面的には雑然として高低も相当あるが、全面に密集している。ⅡS区の礫と同じ高さに須恵器・土師器の破片多し。

△実測、ⅡN区・平岡、ⅡM区・隈、断面・松岡、田辺、鶴田

遺物の取上げ、平面図、断面図に⑩、⑪の如く番号を記入しながら取上げ。

I・III・IVトレンチの表土剥ぎを学生が行なう。

8月2日

- ・集合 8:00
- ・発掘作業 8:30~10:15、10:45~12:00、14:05~15:00、15:30~17:15
- ・引揚 19:50
- ・参加者 前日同じ、本日午前・古田・井戸・午後・乙益・植島
- ・編成 第1班 I E区 限・山川
第2班 II S区 田添・鶴田・田中
第3班 II N区・II A区 平岡・藤原
- 測量班 午前中

・発掘状況

- II N区 貝塚底部（貝層下端）に到着、貝層は60~70cm。貝層底には大きな石の塊がある。貝塚は更に東に伸びる。
- II S区 貝層上面を露出す。ほぼ水平に南3mのところまで伸びている。1m30の位置に人骨発見。
- I E区 平面露出、北側の貝層と南側の敷石層を追求。人骨発見。須恵器5片出土、貝が出はじめてから-10cmのところ。
- II M区 松田少年石鐵発見。

・その他

- 13:30~16:15 富岡にある九州大学天草臨海実験所、波部忠重助教授が来られ貝類同定。同定された貝は51種。

- 8月3日
- ・作業 8:20~10:15、10:30~12:00、14:00~15:05、15:20~16:00
(本日は夏越に当たるため16時で作業打切)
 - ・引揚 18:00
 - ・参加者 坂本・乙益・田辺・松岡・田添・限・平岡・植島・鶴田・古田・井戸・田中・山川・竹内(旅館主人)・猪股・柳原父子・田中・山下・二江中(2年男子20名・女子10名・1年新に参加男子10名・女子10名)
 - ・作業分担と発掘状況

- II A区 田中担当 貝塚の北端を確かめるために、本日より着手。貝層の上に礫群がある。その下は混土破碎貝層、次に貝層、下に巨大な礫。
- II N区 平岡担当 貝層底まで露出。
- II S区 田添担当 貝塚南端をつかむ。実測。松田少年、II M区で角製矢筈状のもの

石鋸、鹿角発見。

日記 8

- I E 区・I M 区・I S 区 (I M・I S は午後より) 乙益・隈・山川担当 乙益第 2 号人骨 (I E 区) 露出。隈・植島 I E 区実測。I S 区より第 3 号人骨・石鋸発見。
I V N 区 松岡担当 牛の角に似たもの混土破碎層中に発見。
I W 区 平岡担当 夕刻垂玉発見。
・夜 討論会
尖頭状石器の使用法について 中田・田辺・新田 研究会
礫について 別野・岡本 研究会
人骨について 中藤千 研究会

地質調査 8月4日 (赤城日記 05-08日) 春霞山 (巣子村) 谷底断面 谷底

・作業 8:20~.....、.....~12:20、14:00~.....、.....~17:50

・引揚 18:30

・参加者 前日に同じ、他に藤原・天高生 (男子 2 名、女子 3 名)・二江中 50名

・作業分担と発掘状況 朱坂・藤谷達也の調査も被用の調査、出露箇所、断面

II トレンチ 田辺担当 断面実測図完成。

I E 区 隈・植島担当 拡大区を除き平図完成。人骨は乙益測図。実測後発掘、掘り下げる。

I W 区 平岡担当 断面実測。

I M 区・I S 区 乙益・山川担当 I M 区は礫層の上下とも出水式であるが、上下で若干の相違がある。下層が整然としており、上層が退化的な文様となる。I S 区は午後より着手、薄い破碎貝層があり直下は礫層、両層間に須恵器・土師器・出水式土器が若干出土。

I V N 区 松岡担当 貝層中より鹿の頭骨・磨製石斧・阿高系土器・滑石混入阿高式土器・骨角器 (ヤス) 出土。貝層下砂層下より曾畠系・轟系の土器等出土。

I V M 区・I V S 区 田添担当 発掘・断面実測を進める。表土下の土層 (厚さ約 10cm) よりかなりの土器出土。その下の混土層は更に豊富、道路側より鐘ヶ崎式土器 (渦巻文) 出土。海側に混土貝層があり、石錐は多いが、尖頭石器は少ない。

第 I 試掘区 (V 区) 1 m² を掘り下げる。石や礫が深くまで堆積するのみ。青い磁器 (近世物) 出土。

・その他

午後 坂本五和町で講演

台風が来るという。風強く涼しいが、時折飛砂あり。波高く、通詞島の岸に白波が立

つ。

日 3 月 8

夜 報告書執筆分担打合わせ、原案作成。

2011.03.08. 0-04: 8-暮 昼

新潟県立歴史博物館

8月5日

・作業 8:40~10:15、12:30~13:40、14:07~15:10、16:10~16:45

(10:15~11:30 雨)

雨天被災地巡回

・引揚 18:30

・参加者 前日に同じ、植島・二江中・御領中（男子7名、女子2名、堤田先生引率）天

高生

・作業分担と発掘状況

I E 区、I M 区 質担当 I E 区、貝層下を発掘、遺物少なし。I M 区、混土貝層は土器が少ない。貝層下疊の下より出水式が多く出土。

II トレンチ精密調査区 乙益担当 北区では純貝層の上面近くで鐘ヶ崎式2・3片検出。それとの間に礫群を介して出水式出土。その下に混土貝層、出水式らしい土器出土。その下は砂層、未調査。南区では土層20cm、出水式の新しいタイプが多い。純貝層35cm、出水式の無文のものが多く、古い要素かもしれない。

III N 区 平岡担当 本日より着手。貝層ばかりで、轟系土器2、3片出土。

III S 区 質担当 浅い混土貝層(10cm内外)があり、道路側で土師器1、須恵器2、鐘ヶ崎式若干、他は出水式出土。貝層下の土層に出水式を含む。多量の石錐が出土。

IV S 区 田添・鶴田担当 貝層はなく、土器がかなり出土。道路側で完形に近い高壙状土器出土。大形の石が多く、作業困難。

V N 区 松岡担当 貝層下に砂層があり、吉田式・轟式・曾畠式を含む。

第一試掘区 坂本担当 表土25~30cm、その下に貝層、石鋸状石器、多量の尖頭状石器、石錐、その他骨角器、獸魚骨多し。

・その他

熊本大学医学部木村晴彦氏来人骨取り上げ

取り上げ時の所見

第2号人骨 門歯の磨耗が強く、臼歯は少ない。前歯でかみ切って物を食べたのである。老年で背は小さい。

第3号人骨 老年で下顎骨が非常に大きい。第2号人骨とは逆に、臼歯が異常に磨耗している。

夜、井戸屋旅館に全員集合、ミーティング

日 1 月 8

登録料取扱規則 第1回定期会員登録料

8月6日

- ・作業 8:40~9:30、10:00~11:00、11:30~12:30、13:30~14:40
台風のため15時解散

- ・引揚 17:00

日記

- ・参加者 前日に同じ、東・杉村 本日より参加、二江中50名・本渡中15名・天高生 3名
- ・作業分担と発掘状況

II レンチ精査北区 乙益担当 ①純貝層より出水式出土、基準点下50cmより凸帯文ある出水式の一種出土。②混土貝層、厚さ4~5cm、出水式、貝压平行沈線文出土。③黒褐色砂層、礫がまばらに混じる、曾畠式・吉田式のみ共伴で出土。基準点下107cmに出土した土器が一番下である。

II レンチ精査南区 乙益担当 ①表層、出水式及びそれ以前が同じ包含、貝压波状文(吉田系)が1・2片出土。②混土貝層、出水式、貝压波状文が含まれる。③貝層下10~20cm、条痕文の薄手土器(轟式か曾畠式)1片出土。④青色細砂層、遺物の包含なし。

III N区 平岡担当 貝層中掘り下げ。土器片で直立するものがある、曾畠式。貝層下までは到達せず。

III S区 限担当 平面実測。

IV N区 松岡担当 下部貝層下より第4号人骨出土、貝輪2個装着。

IV S区 田添担当 夕刻、第5号人骨発見。

第I試掘区 坂本・牧野担当 貝層の下は砂層、地表下80cmくらいまで土器が出土。

第II試掘区 東・鶴田担当 ①0~25cm耕作土、土師器細片が多い、支脚も有。②25~50cm、須恵器、土師器出土、支脚は25~40cmが特に多い。土師器は焼状をなし支脚の上に乗るのではないか(東所見)。③50~60cm、砂層小砂礫を含む。遺物は減少するが物は変わらない。

第III試掘区 植島・杉村担当 調査完了。

- ・その他

岡本次次郎氏(53才・もぐり経験約40年、潜水3分30秒)によりもぐりについて調査。
尖頭状石器をアワビ採り具との仮説をたてる。

8月7日

- ・参加者 前日に同じ、東・牧野帰る。

台風のため生徒の出動中止、消防団幹部十数名・青年団十数名

・作業分担と発掘状況

調査・発掘と宝塚の田畠祭

II トレンチ 乙益担当 精密調査南区を掘り下げる。

III N 区 貝層下まで掘り下げる。

III S 区 獣骨の大腿骨出土。III トレンチ断面図作成。

VIN 区 第4号人骨採取、墓壙が卵形であることが判明。断面、平面実測。

IV S 区 第5号人骨露出・実測、断面実測。

第II試掘区 実測

第III試掘区 坂本担当 発掘を進め実測。

・その他

松岡、写真で大変。
田辺、地形断面図作成。

8月8日

宝塚の田畠祭

台風襲来、雨のため周辺調査中止、午前中図面の整理。午后及夜、役場にて遺物整理、
23:30まで。

柳原操さんのおいしい饅頭の差し入れあり。

8月9日

午前 資料整理

14:30より発表講演会

開会の辞 山崎教育長

1. 調査の経過 猪股教育委員長

2. 遺跡について 田辺哲夫

3. 石器について 松岡 史

4. 土器について 乙益重隆

5. 沖ノ原遺跡の性格 坂本經堯

8月10日

調査団解散

4. 発掘区の設定と遺跡・遺構

第1次調査の発掘区は柳原氏によって確認された貝塚の部分を中心に行なわれた。第7図に示すとおり、その位置は北に向って突出した砂丘の北部東側である。ここには4本のトレンチが設定され、多くの遺物が出土した。この本調査区とは別に、遺跡の状態を探るため、調査区から西側に3ヵ所の試掘区が設けられている。

調査時の沖ノ原

現在では、沖ノ原の砂丘を南北に縦断するように通島に通じる道路があり、それを中心に多くの人々が建設されている。調査の実施された昭和34年には第7図のように、砂丘中央東側の斧磨川々口を中心に沖ノ原の集落があり、そこに至る道路は県道から砂丘の東側を通っていた。この道路は突端に通じ、そこより通島への渡場であった。また、砂丘中央西側には炭坑があり、西に向って石炭積出し用の桟橋が作られていた。

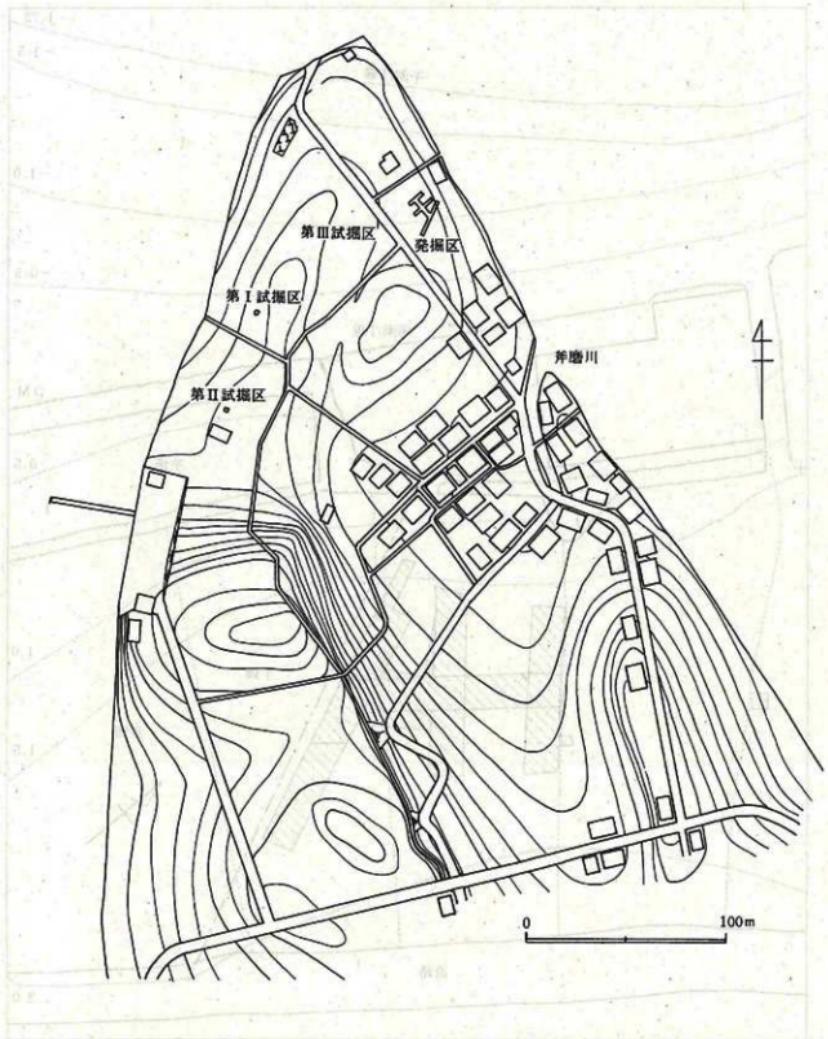
発掘区の設定

発掘区には4本のトレンチが設定された。その位置は海岸線より約15mの畠地にあたる。第8図のとおり、海岸線に石垣があり、それより内にかけて自然に高くなる地形にある。発掘区の設定地は海拔1.5mから2mの間で、南西部がやや高くなっている。発掘当時の畠地は、一帯がほぼサツマイモ畠であった。

トレンチの設定は、柳原氏によって発見された貝層と、その延長上にあたると考えられる部分に行なわれた。第Ⅰトレンチは海岸線に併行して西北—南東方向に設けられた。その方向はN-38°Wである。幅は2m、長さは第Ⅱトレンチと斜めに接するため、北側で10m、南側で9mである。第Ⅱトレンチは第Ⅰトレンチの南東側に接し、水道管工事で発見された貝塚断面に沿って設けられている。幅は2mで、長さは15mであるが、貝塚北東端を確認するため幅1mで3m拡張されている。各トレンチの呼称は第9図に示した通りである。トレンチの東西南北の方向により、NSEWで表わされている。

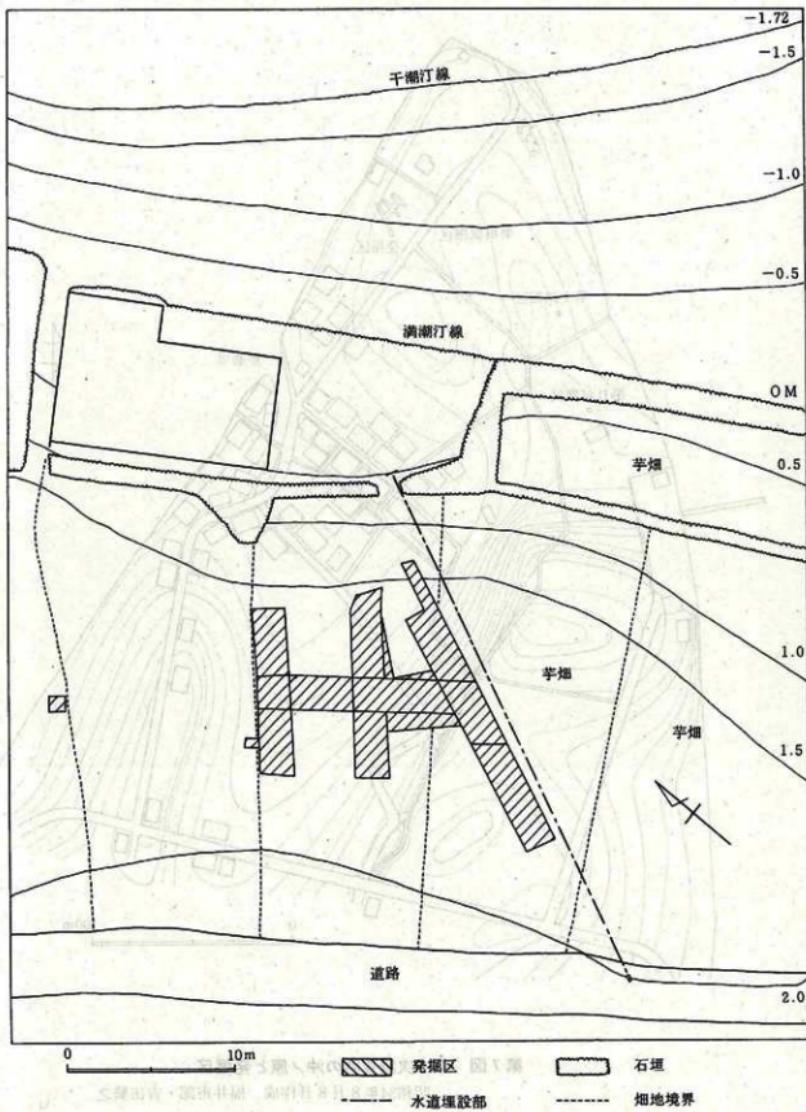
この第1次の調査区総面積は、拡張区を含めて頂度100m²である。現在、埋蔵文化財の調査に關係している私達にとって、著名な沖ノ原貝塚の第1次調査面積が100m²というのは、予想以上に狭いことで驚きの感をいだかざるを得ない。しかし、その調査区からは厖大な量の遺物が出土しており、沖ノ原においていかに面積に対して密度の高い生活が行なわれていたかを知ることが出来る。これは、Ⅱ次以降の調査についても同様のことがいえるであろう。

試掘区は砂丘西側の様子を探るために、3ヵ所が設定されている。その面積はいずれも2m×2mの4m²である。調査区のほぼ真西20mに第Ⅲ試掘区、同じく西南西約95mに第Ⅰ試掘区、同じく南西約135mに第Ⅱ試掘区が設けられている。

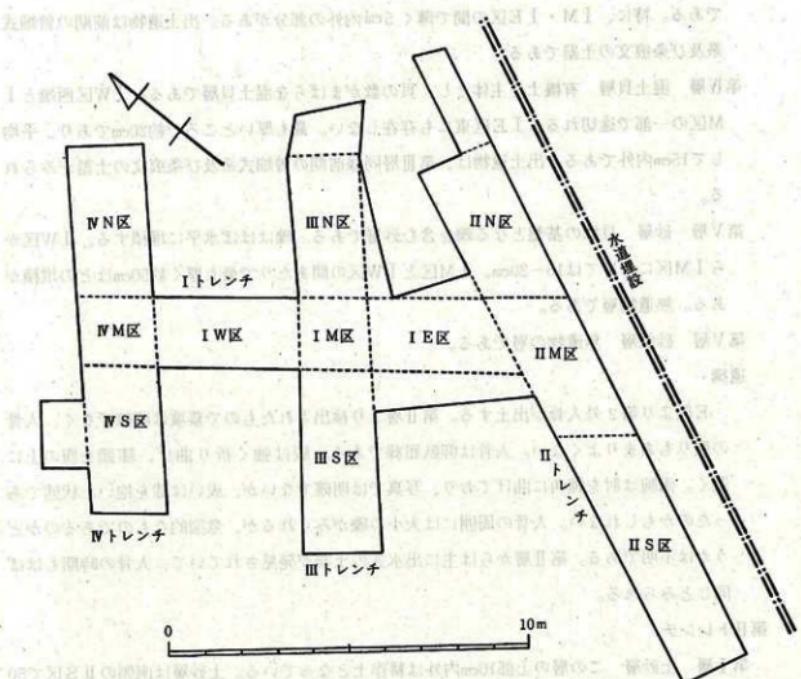


第7図 第1次調査時の沖ノ原と発掘区
昭和34年8月8日作成 福井市郎・吉田繁之

図註発土遺物の解説書 図8尾



第8図 発掘地の地形と発掘区



第9図 トレンチ配置と発掘区名

各トレンチの断面と構造

第Iトレンチ

第I層 第I混貝土層(破碎層) I E区では厚さ約70cmに達し、I M区で40~50cm、I W区で20~30cmとなる。I W区東側では、その下部で、一部分スガイの純貝層となる。I W区西端でもスガイ主体の貝層がある。出土する土器は出水式系のものである。それに少量ながら、御領式・貝殻押引文の土器が混る。I M区北側に石錐が7個まとまって出土している。

第II層 貝層土層 砂を含まない貝層土層である。I E区とI M区の大部分にみられ、I W区を中心にみられる。I W区西端で最も厚く、20cmほどの堆積がある。出土遺物は多くないが、阿高式系の土器と前期曾畠式及び条痕文の土器がみられる。

第III層 混土砂層 I W区では第II層の下に、I M・I W区では第I層である第I混貝土層の下に位置する。その厚さは、I W区で20cm前後、I M区で10~35cm、I E区で10~25cm

である。特に、IM・IE区の間で薄く5cm内外の部分がある。出土遺物は前期の曾畠式系及び条痕文の土器である。

第IV層 混土貝層 有機土を主体とし、貝の数がまばらな混土貝層である。IW区西端とIM区の一部で途切れる。IE区東にも存在しない。最も厚いところで約20cmであり、平均して15cm内外である。出土遺物は、第III層同様前期の曾畠式系及び条痕文の土器がみられる。

第V層 砂層 貝塚の基盤となる礫を含む砂層である。礫はほぼ水平に堆積する。IW区からIM区にかけては15~20cm、IM区とIW区の間あたりで最も厚く約50cmほどの堆積がある。無遺物層である。

第VI層 砂鉄層 無遺物の層である。

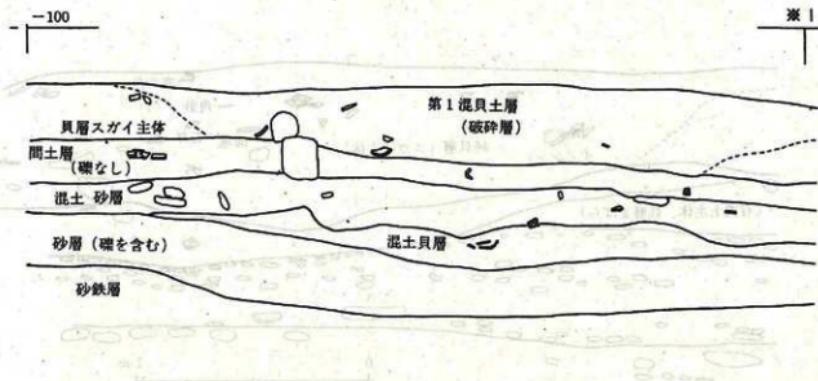
遺構

E区より第2号人骨が出土する。第II層より検出されたもので墓壙は明確でなく、人骨の残りもあまりよくない。人骨は仰臥屈葬である。膝は強く折り曲げ、膝頭を腹の上に置く。両腕は肘を鈍角に曲げておらず、写真では明確でないが、或いは膝を抱いた状態であったのかもしれない。人骨の周囲には大小の礫がみられるが、意図的なものであるのかどうかは不明である。第II層からは主に出水式の土器が発見されていて、人骨の時期もほぼ同じとみられる。

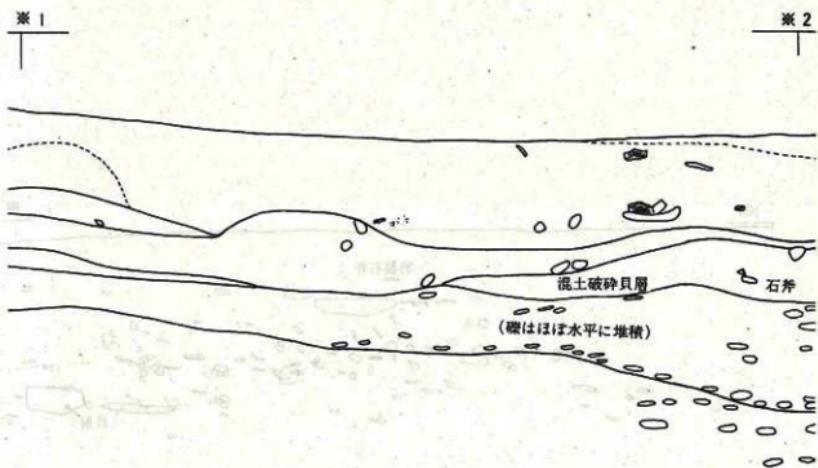
第IIトレンチ

第I層 土砂層 この層の上部10cm内外は耕作土となっている。土砂層は南側のII S区で50~60cmと深く、II M区で30~40cm、北側のII N区では30cm内外となる。上部は耕作土であるが、下部は包含層となっている。II N区では海(北)側に傾斜していて、この部分には遺物の包含はほとんどない。包含層から出土した土器は出水式、大型沈線文の土器、貝压文の土器等がみられる。

第II層 混土貝層 混土貝層はII S区の北側から、II M区・II N区にわたりみられる。その厚さは、最も厚いII M区とII N区の境付近で約60cmを測る。II S区は20~30cmで、中央部では薄くなり、南側には貝を含む層はみられない。II N区では50~60cmで、北側になるにつれて薄くなる。II M区・II S区では部分的にレイシの密集したブロックがあり、II N区にはハマグリ・サザエ・ウニ・カキの密集するブロックがある。このトレンチには、II N区とII S区に精密調査区が設けられている。その北区(II N区内)の乙益重隆氏の断面図をみると第II層を貝層(40~50cm)とし、その下の混土貝層(5~10cm)と区分されている。全体の断面図ではそれを1層としている。恐らく、部分的に混入した土の比が異っていたのではないだろうか。この層中からは、多量の土器・石器・骨角器が出土している。精密調査区の乙益氏のメモによれば出土土器が次のように記されている。北区(貝層とそ

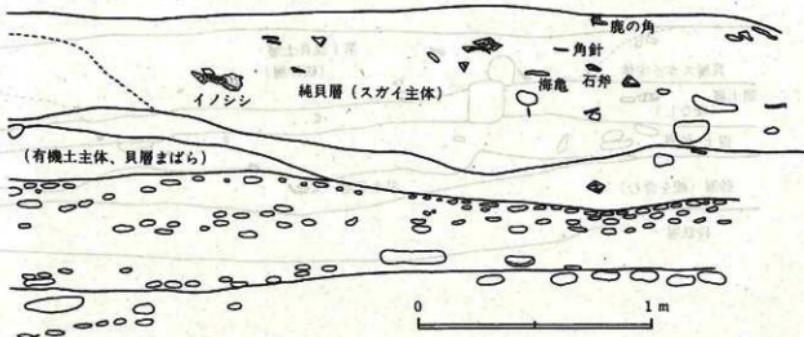


高瀬町北モペニイ工場 図01



(第1 トレンチ北側断面)

※ 2



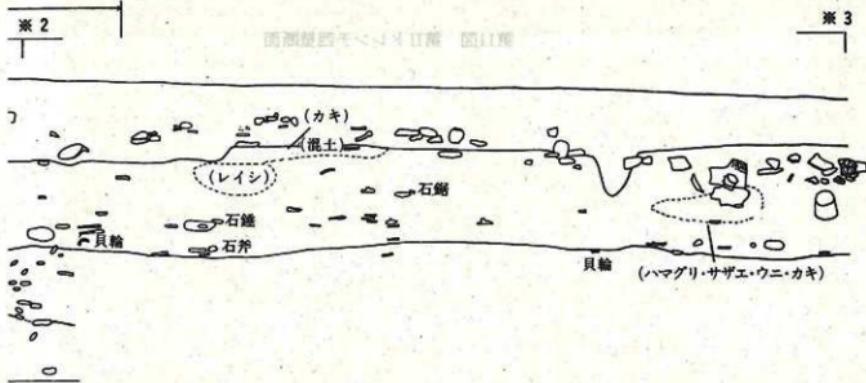
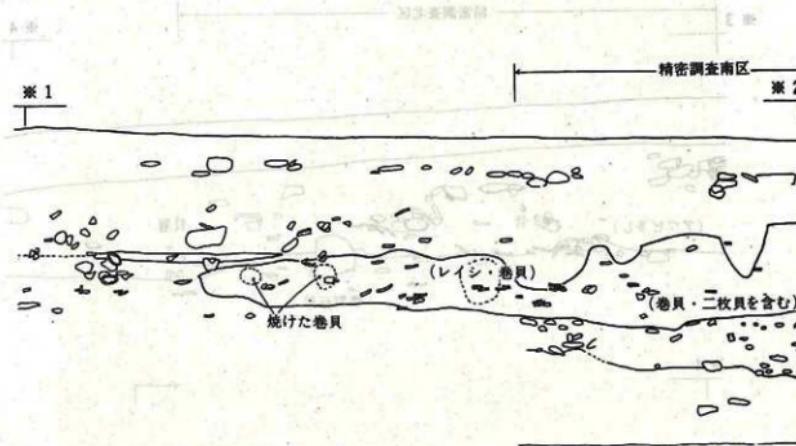
第10図 第Ⅰトレンチ 北側断面

-100

※ 1



(測量跡を示すもの)



※3 精密調査北区

※4

河内遺跡古跡

5 帯

1 帯



(アワビ多し)



貝層

2 (貝塚・木柱洞・貝都)

磨製石斧

貝塚

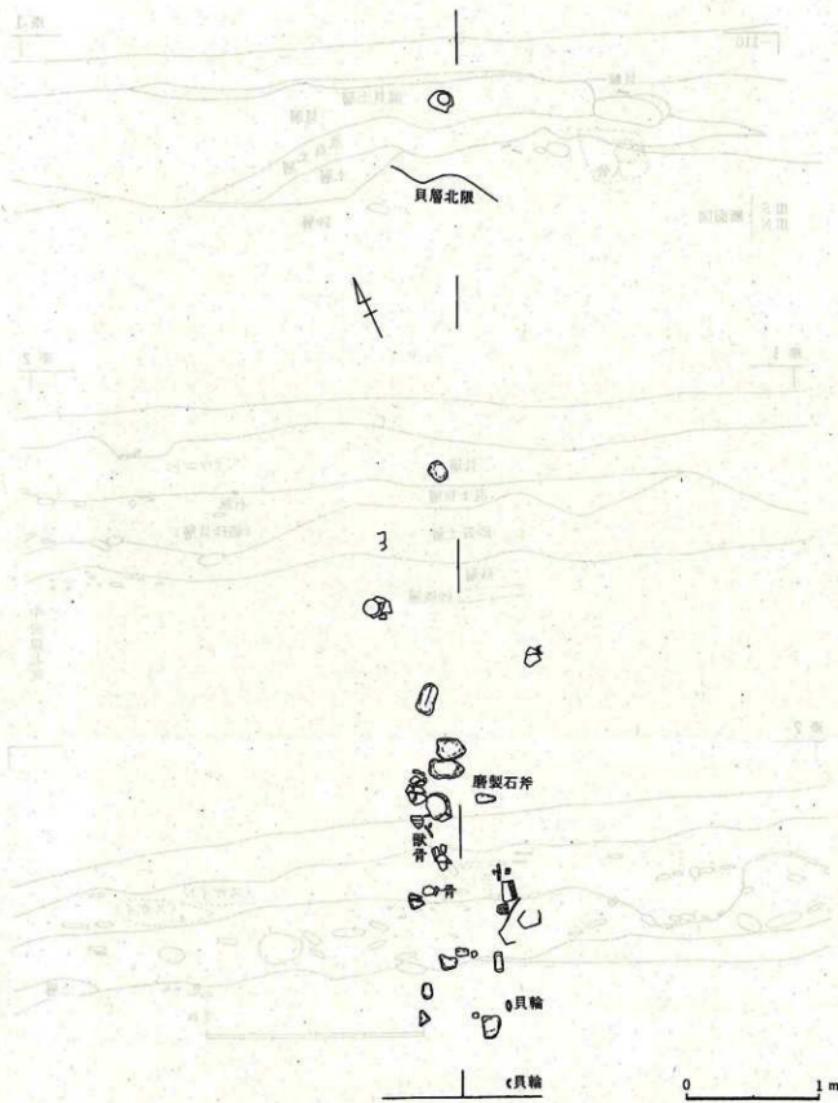
※4

5 帯

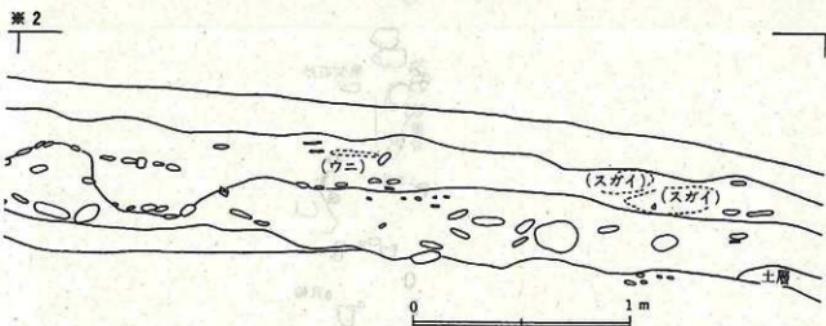
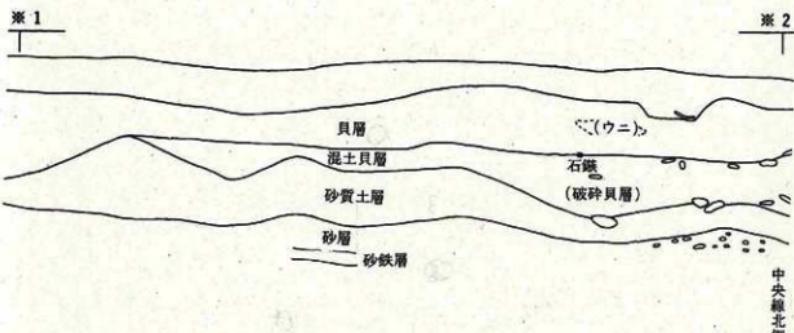
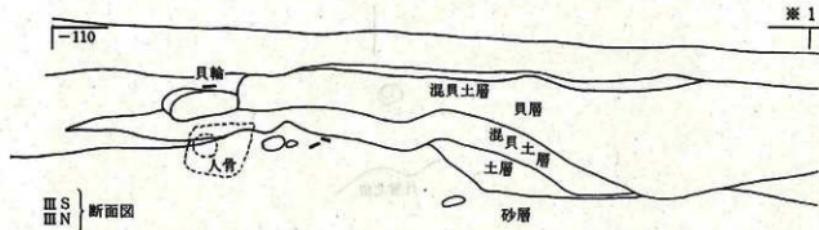
石製鎌車



第11図 第IIトレンチ西壁断面



第12図 第IIトレンチN区遺物出土状態 貝層中下部



第三圖 第IIIトレンチ西壁断面

の下の混土貝層に分かれる)では、「貝層内でも浅い部位には出水式(退化様式)が多く、深い部位には凸蒂文や大型沈線文土器片が多く、全体的な遺物の在り方は、土器様式の在り方と一致する傾向が強くうかがわれる」「混土貝層内は出水式と大型沈線文土器・貝压文が混在する」とされている。貝層上部の出土状態平面図をみると、その中には土師器の製塙土器脚片(発掘時は支脚とよばれていた)も含まれている。南区では「貝層中には出水式・大型沈線伴出」とある。

第Ⅲ層 砂層 貝層の層である。全体通しの断面図では特に分けられていないが、南・北精密調査区の乙益氏の断面図では次の様に記されている。北精密調査区では混土貝層の下に黒褐色砂層があり遺物を含む。図のメモ書きには「貝層下砂層は貝压文(貝压文・貝殻沈压文・貝殻平行線文)・轟式(典型的)・曾畠式(終末近い姿)が共伴する」とある。断面図でみると出水式も出土している。また、石鏡の出土もみられる。南精密調査区では混土貝層の下に貝層下砂層(5~20cm)があり、その下に礫を多く含む青色細砂層がある。乙益氏のメモによれば「貝層下砂層中より条痕文土器(轟式?)出土す」とある。断面図中の遺物の量は少ない。また、前記のメモにつづけて「その下に横たわる青色細砂層には何ら文化遺物なし」とある。乙益氏の精密調査区断面図をみると、北区では黒褐色砂層の50cm程度まで遺物が含まれており、南区の貝層下砂層が北側で厚くなっていることが知られる。

造構

トレンチ北側で貝層の北限を発見する。
また、Ⅱ S区の中ほどよりやや南寄りに南限がある。

第Ⅲトレンチ

第Ⅰ層 表土層 トレンチ全体としては地表面は平坦であるが、北側でやや海に向って傾斜する。表土層の厚さは15~20cmで、ほとんど耕作土となっている。

第Ⅱ層 貝層 15~30cmの厚さをもつが、Ⅲ S区中央では第V層の上面までこの貝層があり、その部分では厚さが50cmにも及ぶ。Ⅲ S区南側では一部、第Ⅰ層との間に混貝土層、厚さ5cm以下がみられた。貝層中には部分的にウニの殻やスガイが、ブロック状に集中しているのがみられる。出土遺物には出水式系の土器が多い。

第Ⅲ層 混土貝層 第Ⅱ層の下にみられるものであるが、Ⅲ S区中央の部分では、第Ⅱ層が深く、第Ⅲ層は途切れる。層は南側で薄く10~15cm、北側で厚くなり、20~30cmである。

層中からは轟式系の土器に出水式系のものが限って出土した。

第Ⅳ層 土層 砂混りの土層である。Ⅲ N区・Ⅲ S区で部分的に途切れる。厚さは10~40cmである。

第Ⅴ層 砂鉄層 基盤となる層である。Ⅲ S区では、部分的に貝層がこの層まで達する。第

IV層との境は、ほぼ平坦に推移し、激しい凹凸はない。この点から、ほとんど人間生活以前の堆積砂層とみられる。遺物はⅢ区の層上部で土器2片が出土しているのみである。

その内1点は条痕文の土器で、他の1片は内面に貝压文を付け表面に繩文を施したものである。

遺構

Ⅲ区で人骨2体出土。

第IVトレンチ

第I層 表土層 一部切れるところもあるが、ほぼ全体に認められる。トレンチ西側では畠地の境界線があり、境界石はこの表土層の上に置かれている。層の厚さは10~20cmである。

第II層 混土貝層 トレンチ全体に亘ってみられる。I・II層間に、割合平面をなしているが、II・III層の間に凹凸が激しくなっている。層の厚さは10~40cmを測る。出水式系及び鐘ヶ崎式の土器が出土する。

第III層 黒色土層 磯を含む土層で、厚さは25~60cmほどである。IVN区の北側では一部切れている。層中には土器・石器及び骨片などを含む。

第IV層 混貝土層 IVN区の中央から北側にのみ存在する貝層である。厚さは北側で25cm、中央部からやや南側で凸レンズの端のように消える。曾畠式・轟式の土器が出土する。

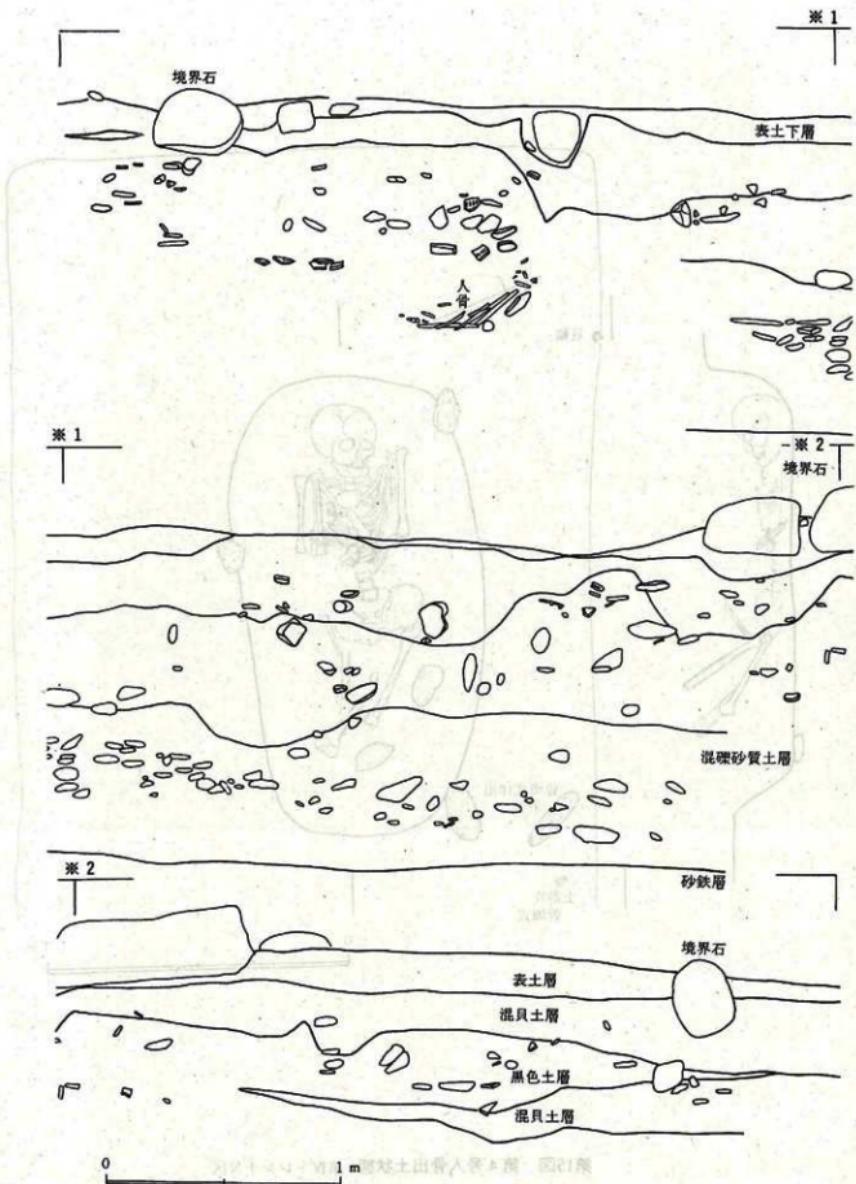
第V層 混疊砂質土層 厚さ50~70cmほどである。断面図では明確ではないが、層中より曾畠式・轟式の土器が出土する。轟式にはミミズバレ状の貼付文が存在する。

第VI層 砂鉄層 基盤となる層である。第V層との境は、ほぼ水平で、地表下140cmほどのところに層の境がある。

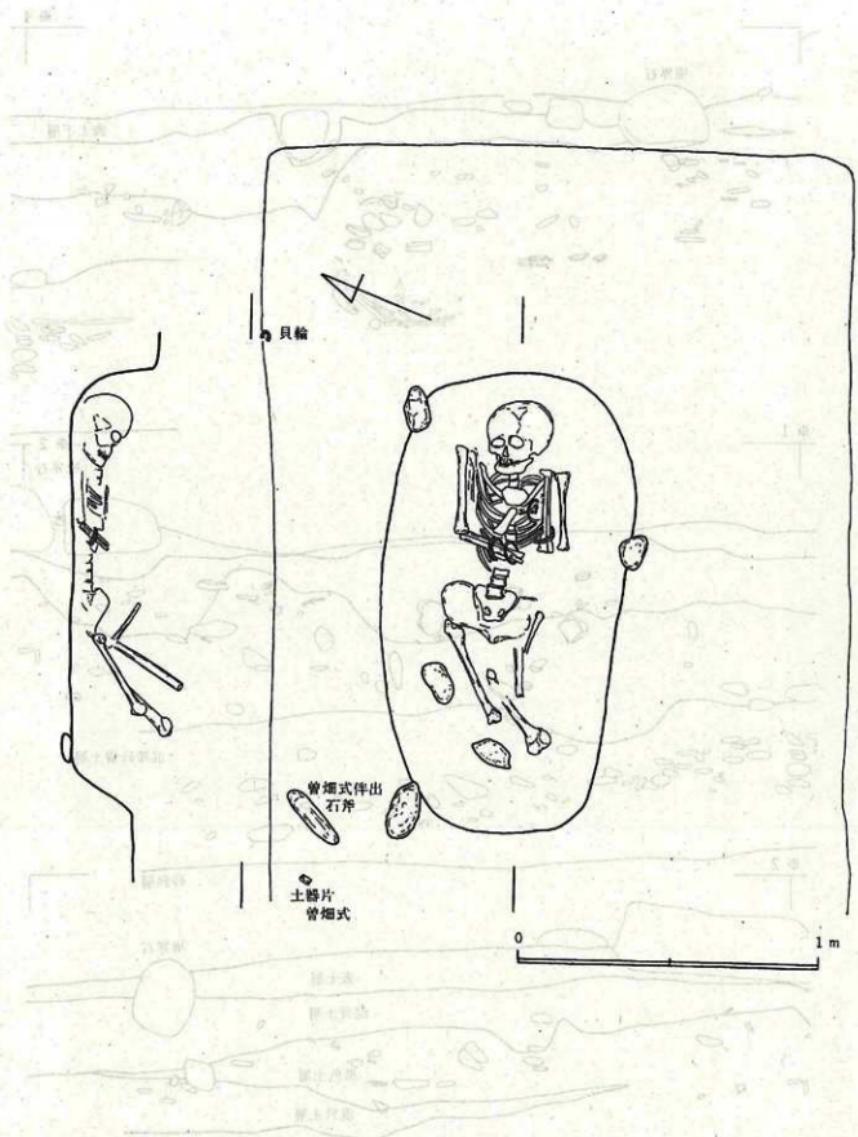
遺構

VIN区の北寄りの部分より、第4号人骨が検出された。墓壙は第IV層より掘りこまれ小判形をなす。人骨は脚を立て膝状に強く折り曲げている。発掘時にも髖骨は立った状態であった。腰部から上は、ほぼ直線的となる。右腕は肘をやや鈍角に曲げ、手を腹の上に置く。前腕部に3個の貝輪を装着している。左腕は肘を強く曲げ、手を肩に置く。その前腕部に3個の貝輪を装着しているが、内1個はやや外れ発掘時には胸骨の上から出土している。

曾畠式・轟式に伴う人骨とみられる。墓壙の周囲には石囲み等は存在しない。IVS区の北側より第5号人骨が検出された。第III層である黒色土の下に墓壙がある。墓壙は長方形に砾を配してあり、小口にあたる短辺には砾がない。脚は膝を強く折り曲げており、調査時は左側に両脚とも倒れた状態で検出されている。骨盤にはあまり傾斜はみられない。脊椎骨はほぼ水平にちかい。頭骨は左側に傾き、横向きとなっている。腕は左右とも強く折り曲げ、手を胸部に置く。腹部には平らな砾が1個、ほぼ水平に乗せられている。坂本氏のメモによれば、砾と脊椎の間は僅に1cmであると、記されている。



第14図 第IVトレンチ西壁断面

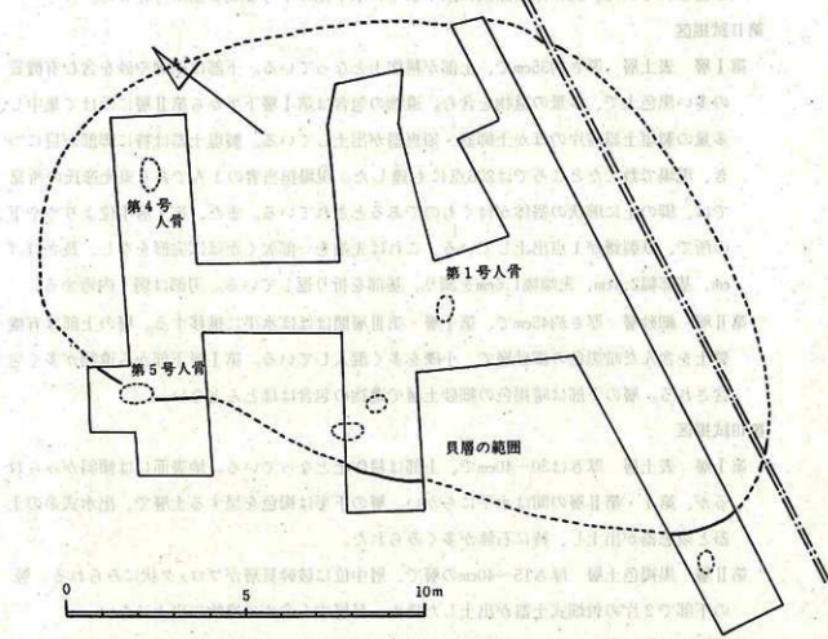


第15図 第4号人骨出土状態 第IVトレンチN区

西瀬戸支那古墳群 因村義

土塗りの施設跡と土塁の穴、その裏に立派な中堅城跡である。

（上）各部の配置と掘り出された平の斜面の断面図。左は北、右は南、北東隅日影



第16図 発掘区貝層の範囲と出土人骨

第I試掘区

第I層 表土層 厚さ約45cmで、上部が耕作土となっている。下部約20cmには遺物の包含があり、製塙土器の脚等も出土している。

第II層 混土貝層 約20cmの厚さがある。

第I層・第III層との間は起伏がなく、水平位で移り変わる。層中より鐘ヶ崎式・出水式系の土器が出土している。

第III層 細砂層 赤褐色を呈する細砂層である。中程度の礫を点々含み、特に地表下100cmあたりに多い。遺物はほとんど含まれない。

造構

試掘区東北隅より柱穴状のピットが検出されている。この穴は第I層下面で確認され、第

Ⅱ層をへて第Ⅳ層途中の地表下85cmまで達している。穴の埋土には貝殻細片の混る黒色土が含まれていた。底には断面図に示すように水平位の平らな礎2個が存在した。

第II試據區

第Ⅰ層 表土層 厚さ約35cmで、上部が耕作土となっている。下部は細礫や砂を含む有機質の多い黒色土で、多量の遺物を含む。遺物の包含は第Ⅰ層下半から第Ⅱ層にかけて集中し、多量の製塙土器破片のほか土師器・須恵器が出土している。製塙土器は特に脚部が目につき、現場で数えたところでは206点にも達した。現場担当者の1人である東光彦氏の所見では、脚の上に碗状の器体が付くものであるとされている。また、第Ⅰ層中位よりやや下の所で、鉄製鎌が1点出土している。これは先端を一部欠くがほぼ完形をなし、長さ11.7cm、基部幅2.4cm、先端幅1.6cmを測り、基部を折り返している。刃部は弱く内弯する。

第Ⅱ層 細砂層 厚さ約45cmで、第Ⅰ層・第Ⅲ層間はほぼ水平に推移する。層の上部は有機質土を含んだ暗黒色の細砂層で、小礫を多く混入している。第Ⅰ層下部から遺物が多く含まれる。層の下部は暗褐色の細砂土層で遺物の包含はほとんどない。

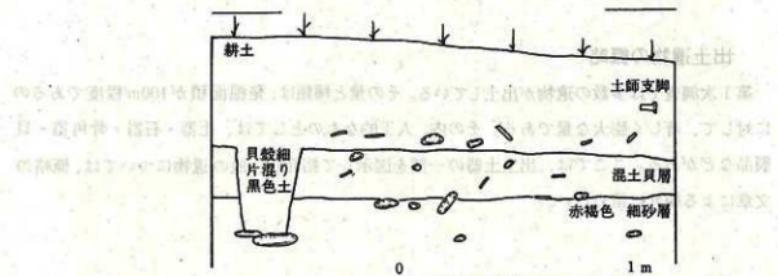
第三試験区

第Ⅰ層 表土層 厚さは30~40cmで、上部は耕作土となっている。地表面には傾斜がみられるが、第Ⅰ・第Ⅱ層の間は水平にちかい。層の下半は褐色を呈する土層で、出水式系の土器と須恵器が出土し、特に石錘が多くみられた。

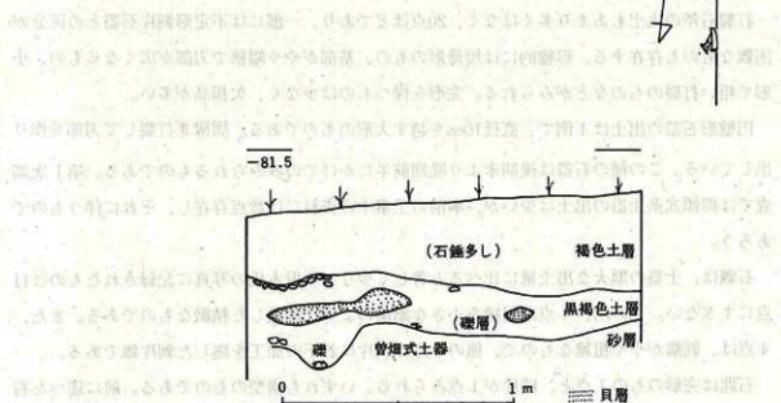
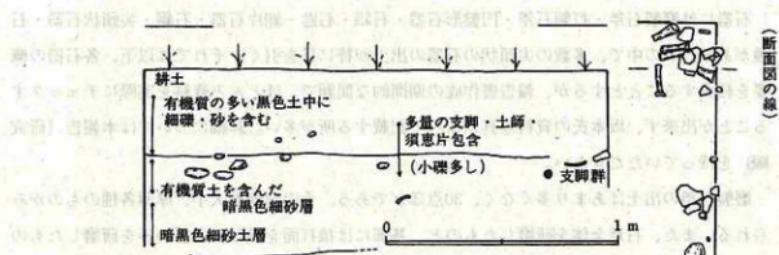
第Ⅱ層 黒褐色土層 厚さ15~40cmの層で、層中位に破碎貝層がブロック状にみられる。層の下部で2片の曾畠式土器が出土したほか、貝層中を含めて遺物の出土はない。

第Ⅲ層 砂層 堅くしまった砂層で50cm以上の厚さをもつ。無遺物層である。

試験土出、B



基部、A



上、第17図 第I試掘区東壁断面

中、第18図 第II試掘区断面図及び平面図の一部

下、第19図 第III試掘区南側断面

5. 出土遺物

出土遺物の概略

第1次調査では多数の遺物が出土している。その量と種類は、発掘面積が100m²程度であるのに対して、著しく膨大な量である。その内、人工的なものとしては、土器・石器・骨角器・貝製品などがある。ここでは、出土土器の一部を図示して紹介し、他の遺物については、概略の文章による紹介に留めたい。

A. 石器

石器には磨製石斧・打製石斧・円盤形石器・石鎌・石匙・剝片石器・石鋸・尖頭状石器・石錘がある。この中で、多数の尖頭状の石器の出土が特に目を引く。それでは以下、各石器の概要を紹介することとするが、報告書作成の期間的な問題で、ほとんど資料を実際にチェックすることが出来ず、坂本氏の資料写真によって記載する所が多い。詳細については本報告（研究編）を待っていただきたい。

磨製石斧の出土はあまり多くなく、30点ほどである。その形態も大小、厚薄各種のものがみられる。また、石斧全体を研磨したものと、基部には搞打面を残し、刃部のみを研磨したものとがある。

打製石斧の出土もあまり多くはなく、20点ほどであり、一部には不定形剝片石器との区分が困難なものも存在する。形態的には短冊形のもの、基部がやや幅狭で刃部が広くなるもの、小形で粗い打製のものなどがみられる。完形を保つものは少なく、欠損品が多い。

円盤形石器の出土は1例で、直径10cmを越す大形のものである。周縁を打製して刃部を作り出している。この種の石器は後期末より晩期前半にかけてのみみられるものである。第1次調査では御領式系土器の出土は少いが、事前の工事中の資料には数点存在し、それに伴うものであろう。

石鎌は、土器の膨大な出土量に比べると著しく少ない。坂本氏の写真に記録されたものは11点にすぎない。この内、4点は周縁を小さな鋸歯のように剝離した精緻なものである。また、4点は、剝離がやや粗雑なもので、他の3点は剝片に若干の加工を施した剝片鎌である。

石匙は完形のもの1点と、破片が1点みられる。いずれも横型のものである。前に述べた石鎌が少ないと、石匙の少ないと、この遺跡の特徴を一部物語るものかもしれない。この石匙が少ないので対して、同様の用途が考え得る鋭利な剝片に一部加工を加えた剝片石器が70点以上も存在する。その形はいずれも不定形であるが、概して三角形（台形状）・木葉形などのものが多い。

石器は3点出土している。現在では石器の出土例も多くなっているが、学術的発掘調査で検出されたものとしては初期のものである。1例は黒曜石製で長方形をなし、長さ1.9cm・幅1.0cm、鋸歯の抉りこみは4ヵ所あり、その深さはそれぞれ0.5cm・0.4cm・0.2cm・0.35cmである。他の1例も黒曜石製で台形をなし、長さ2.4cm幅1.3cm、鋸歯の抉りこみは0.5~2mm程度のものが10ヵ所みられる。他の1例は硬質安山岩製で台形をなし、長さ2.8cm・幅1.6cm、鋸歯の抉りこみは2ヵ所あり、その深さは0.35cm~と0.3cmである。

尖頭状石器は沖ノ原貝塚を代表するとも云える石器である。それは発掘で数多く出土した事、及び坂本氏により使用が研究された事による。この石器は大きく分けて、尖頭部が1ヵ所のものと2ヵ所になるものの二者がみられる。

単頭式の石器は礫を三角錐又は四角錐状に打ち割ったものを素材としている。この場合、頭部は非常に鋭角で、基部には礫の自然面を残している。基部の自然面のカーブから推測すると、本来の礫はそう大きな原石ではなく、直径が15~20cm程度の扁平なものであろうと考えられる。錐状の素材には、先端に細やかな剝離が加えられて仕上げられる。その長さは、小さいもので8cm程度、大きいもので13cmほどである。坂本氏は第1次の発掘調査時から、二江地方に伝わる裸もぐり漁法の漁具アワビオコシとの形態類似から、アワビ採りの漁具ではないかと考えられた。調査日誌抄録でも紹介した通り、8月6日にはもぐり経験40年という岡本久次郎氏(53才)により調査し、その仮説をたてられた。その後、実際に石器を用いた採取実験もされてい

る。

双頭式の石器は扁平な礫または円形に加工した素材に半円形の抉りを入れたものである。この抉りによって、その左右に尖頭ができ、その尖頭部を中心に仕上げの剝離を施したものもある。この双頭式の石器は、単頭式の鋭角な先端に対して、やや鈍い角度となる。その角度を計測すると、単頭式では約20°~30°であるが、双頭式では約40°~60°となっている。また、先端の鋭利さも亦、単頭式の方が鋭い。坂本氏のアワビオコシという仮説の場合は、明確ではないが単頭式に対してのものらしく、双頭式に対しては不明である。しかし、筆者はこの単頭式と双頭式の尖頭の数と角度の違いは使用目的に大きく関連するものであろうと推測する。その具体的な用途については今後の検証を待たなければならないが、第1次調査における坂本氏の仮説とその実験は、遺物の使用目的に対する実験考古学的な先駆として大きく評価されるべきものと考えている。

この単頭式・双頭式のほかに1例づつの出土があるが3頭のものと6頭のものがある。3頭のものは上左右(又は下左右)の3方に尖頭部を作り出したものである。或いは他の一方の鈍い基部らしいのを尖頭とみて十字形の石器とも見えなくはない。しかし、後期後半から晩期前にかけて出現する十字形石器とは趣を異にする。また、基部の造作は他の3尖頭部とは違つており、3頭の尖頭状石器とした方が適当であろうと考える。左右は12.8cmを測る。この場合

尖頭の角度は 25° ～ 30° で、角度からいえば単頭式に近い左右の頭部もあるが、先端が丸味を帯びて単頭式のものほど鋭くなく、全体的に双頭式のものに似る。

6頭のものは円形の素材に6ヵ所の抉りを入れて6頭を作り出したものである。各々の抉りはさして深くなく、尖頭の角度は 60° ～ 80° で全てのものが鈍く、先端に丸味をもつ。対角の各尖頭間の長さは、3対ともほぼ12.2cmで、元の素材がほぼ円形であったことが知られる。

石鏟も數多く出土している。いずれも扁平な礫の側縁に打裂を加えたもので、糸を掛け部分を磨り減して凹めたものはない。打裂による加工が対角の2ヵ所のものと、4ヵ所のものがある。数は2ヵ所のものが多く、4ヵ所のものは少ない。また、小形のものはほとんど2ヶ所で、大形のものでは両者が存在するが2ヵ所が多い。また、2ヵ所のものでは、楕円形の礫の長端に打裂を加えたものが大多數であり、短い径の方に加工を施したもののは数少い。石鏟の内、大き目のものは長径が14cm程度、小形のもので5～6cm程度である。長径・短径の和が最も大きなものは 12.5×11.0 cmのものがある。この石鏟の出土が多いことも、当然のことながら、沖ノ原貝塚の立地や性格を物語るものであろう。

以上述べた石器のほかに磨石と石皿及び敲石がある。しかし、遺跡の立地が砂丘上であり、その中には多くの礫が含まれている。この礫は海岸で洗われて表面が磨滅したものが多く、磨石・石皿と自然礫との見分けが困難なものも少なくない。

磨石には、楕円形又は隅丸の長方形をなす定形化したものもあり、普通の礫と変らず表面が磨かれたものまである。定形的なものでは、中央や周縁に打裂痕を残すものがある。

石皿には扁平な石を用いており、中央が凹む皿状のものは少ない。敲石は自然の拳大の礫に打裂痕がみられるもので、定形化したものはない。

B. 骨角器と装身具

骨角器には釣針・刺突具があり、装身具には腕輪・垂飾がある。骨角器の出土が少い九州では稀に多くのものが出土してゐる点貴重である。

釣針は鹿角を加工したと考えられるものである。大小の2種類がみられる。大形のものは組み合わせ式の釣針で、体部が1点、先端が2点出土している。体部は基部を欠いているが、現長9.1cm、復原長10cm程度と推定される。曲りの幅は4.2cmである。先端部の2例は、この体部より大きいものに組み合わさると考えられる。ともに先端部に逆刺がある。小形のもの1点は基部・先端を欠くが、現長1.8cm、現幅1.3cmである。復原すると長さ2.5cm、幅1.5cm程度のものであろうと推定される。

C. 土器

土器は出土遺物の中で最も量の多いものである。これまで何度か調査関係者及び五和町によって図化が企画されたが、1次調査分はまだ完全に完成されていない。当報告でも遺物についてあまり実査していない。そこで拓本を中心とする図には、当初の報告書で土器の担当であ

った乙益重隆氏の作成されたもの、及び一部坂本経堯氏のものを使用させていただいた。詳細には遺物考察編をお待ちいただきたい。

出土した土器は一部早期に属すると考えられるものから前期・中期・後期を経て晚期に及ぶものがあり、ほぼ全ての縄文土器が存在する。その中心は後期前半にあり、坂本経堯先生は、かつて沖ノ原式という型式名を使用されていた。

1. 繩式・曾畠式系の土器

包含層の下部より出土した土器である。(20図~22図4)が、前期に属すると考えられる繩式・曾畠式系の土器である。全形を知り得る大破片はないが、口縁部がやや開いた単純な鉢形を呈するものが多いとみられる。表面とともに口縁部内面に施文するものが多い。

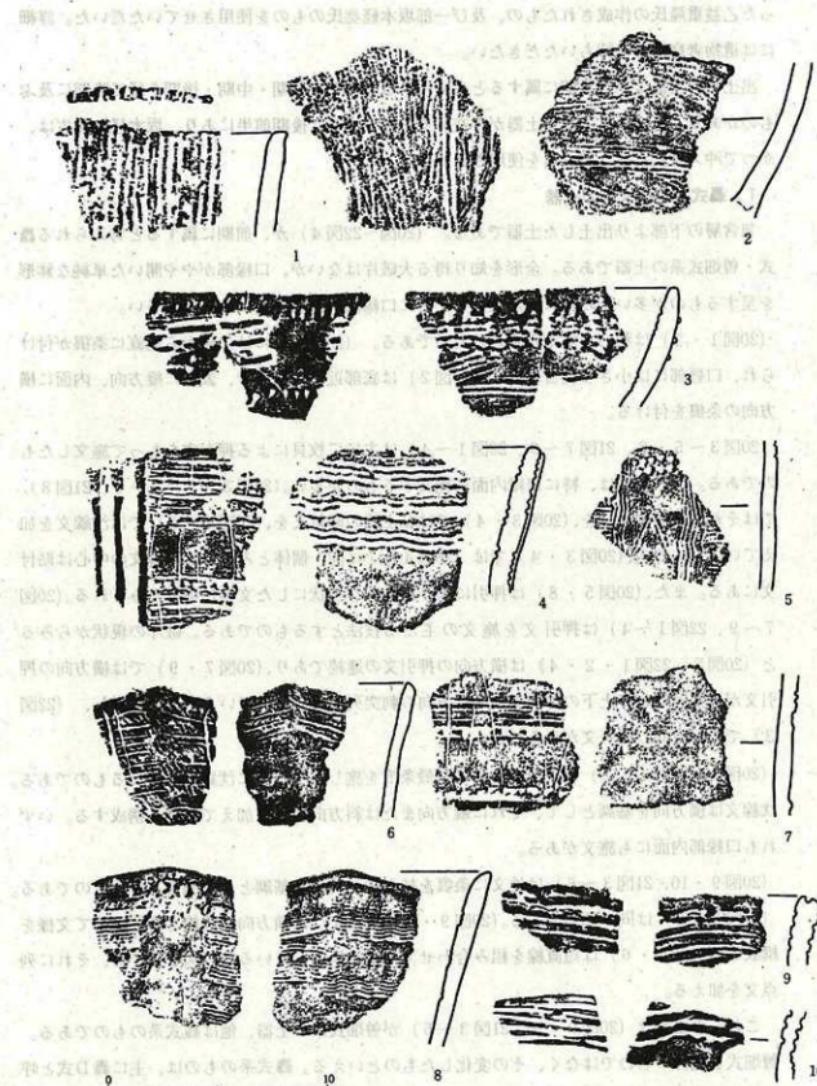
(20図1・2)は粗い条痕がみられるものである。(20図1)には口縁から垂直に条痕が付けられ、口唇部には小さな刻目を見る。(20図2)は底部近くの破片で、表面に縦方向、内面に横方向の条痕を付ける。

(20図3~5・8、21図7~9、22図1~4)は主に二枚貝による押引文をもって施文したものである。この中には、特に口縁内面に施文するものが多い。(20図3~5、7~9、21図8)ではそれに刺突列点文を、(20図3・4)では粘土紐の貼付文を、(20図4・5)では沈線文を加えている。この内、(20図3・4)では(20図4と7は同一個体とみられる)施文の中心は貼付文にある。また、(20図5・8)は押引により、条痕を波状にした文様に特徴がみられる。(20図7~9、22図1~4)は押引文を施文の主たる技法とするものである。破片の現状からみると(20図8、22図1・2・4)は横方向の押引文の連続であり、(20図7・9)では横方向の押引文が一部途切れで上下の押引文間を縦方向の刺突列点文で結んでいる。これに対し、(22図3)では斜方向の押引文がみられる。

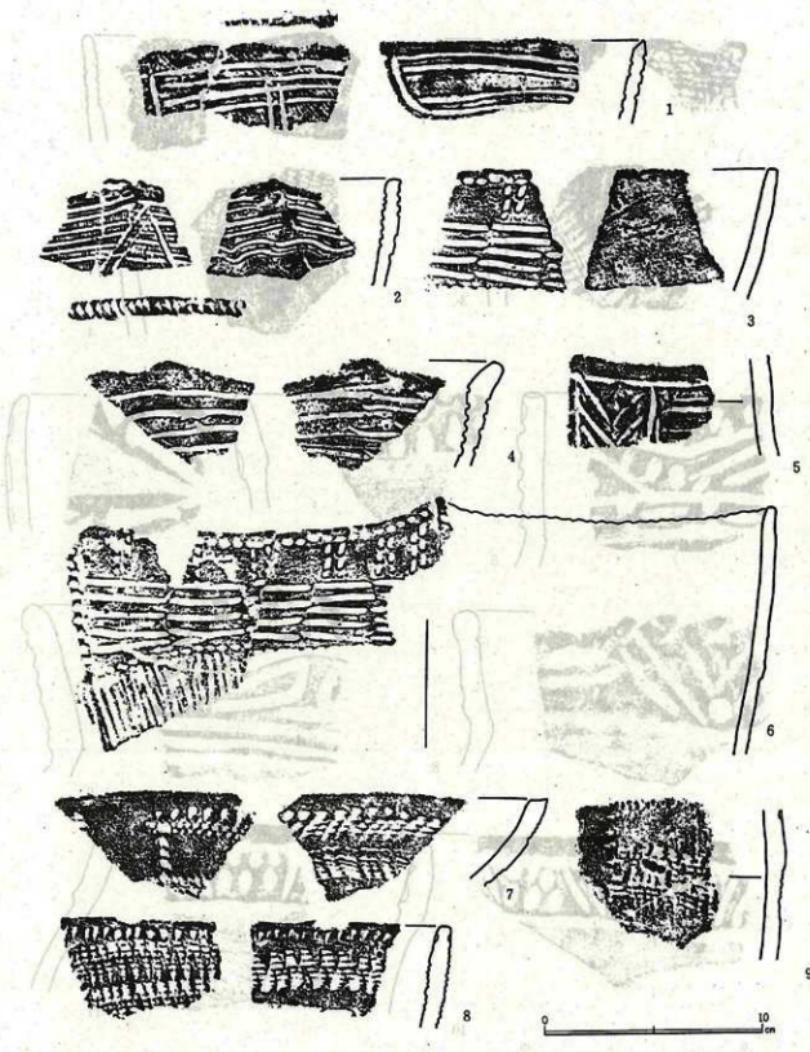
(20図6、21図1・2)は表面の地文に貝殻条痕を施し、その上に沈線文を付けるものである。沈線文は横方向を基調として、それに縦方向または斜方向の線を加えて文様を構成する。いずれも口縁部内面にも施文がある。

(20図9・10、21図3~6)は地文に条痕を持たず、沈線を基調とした施文を行うものである。(21図3・6)は同一個体である。(20図9・10、21図4)は横方向の沈線を基調として文様を構成し、(21図5・6)は短直線を組み合わせて文様を構成している。(21図6)では、それに列点文を加える。

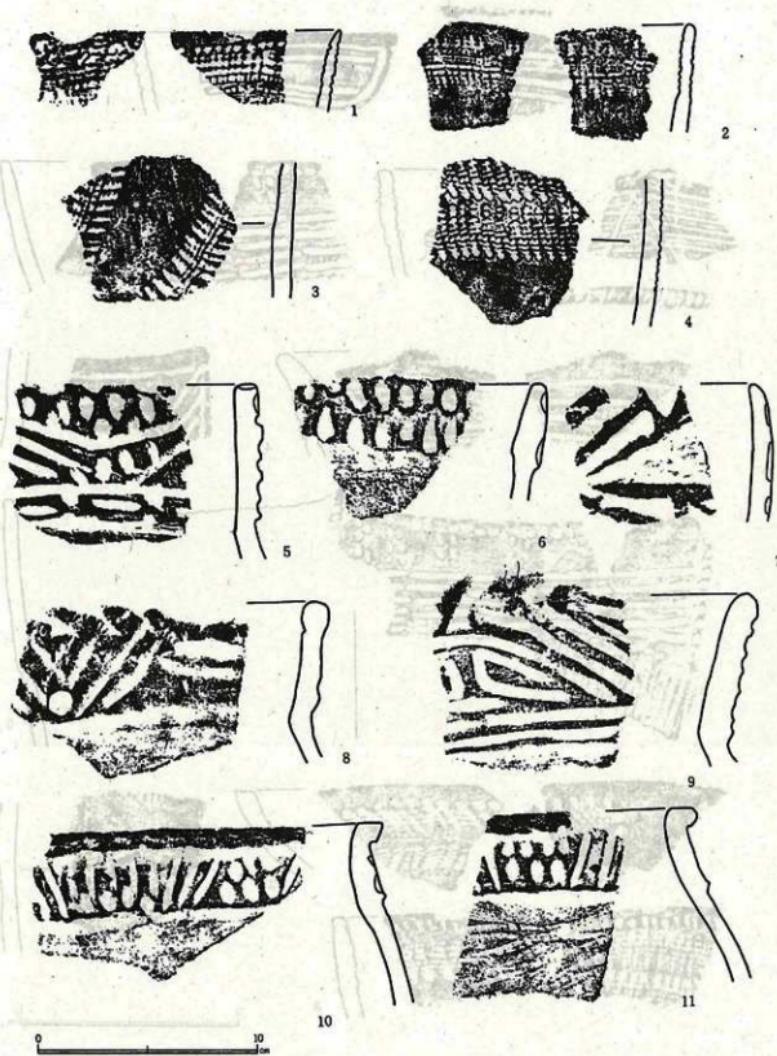
これらの土器は(20図9・10、21図3~6)が曾畠式系の土器、他は繩式系のものである。曾畠式も純粹のものではなく、その変化したものといえる。繩式系のものは、主に繩D式と呼ばれるもので、(22図3)のみが繩C式とされるものに属する。時期的には、ほぼ同じ所産とみてきつかえないであろう。



第20図 第1次調査出土遺物(1)



第21図 第1次調査出土遺物(2)



第22図 第1次調査出土遺物(3)

2. 阿高式系の土器

沖ノ原貝塚出土の土器で、最も中心となるものが、この阿高式系統の土器である。(22図5～27図)に示したものがそれで、底部については別に紹介する。阿高式系の土器は西九州の縄文中期を代表する土器であるが、後期になんでもその前葉までは継続される。ここに収めたものは、ほとんど後期前葉に属する資料である。器形は口縁部が直行し単純な鉢形を呈するものもみられるが、多くのものは口縁部下で屈曲し内面に屈曲の線がみられる。大半は口縁部が直立もしくは弱く外反するが、一部口縁部が内傾した無頸壺状に近いものもみられる。

阿高式土器にみられた豪放な文様は収縮し、口縁部に文様帯が集約される一方では胴部全体に施文するものもある。施文をみると阿高式の凹線文が太目の沈線に変化する傾向にある。また一方では器面を削り取る手流で幅広の施文をするものも出現する。

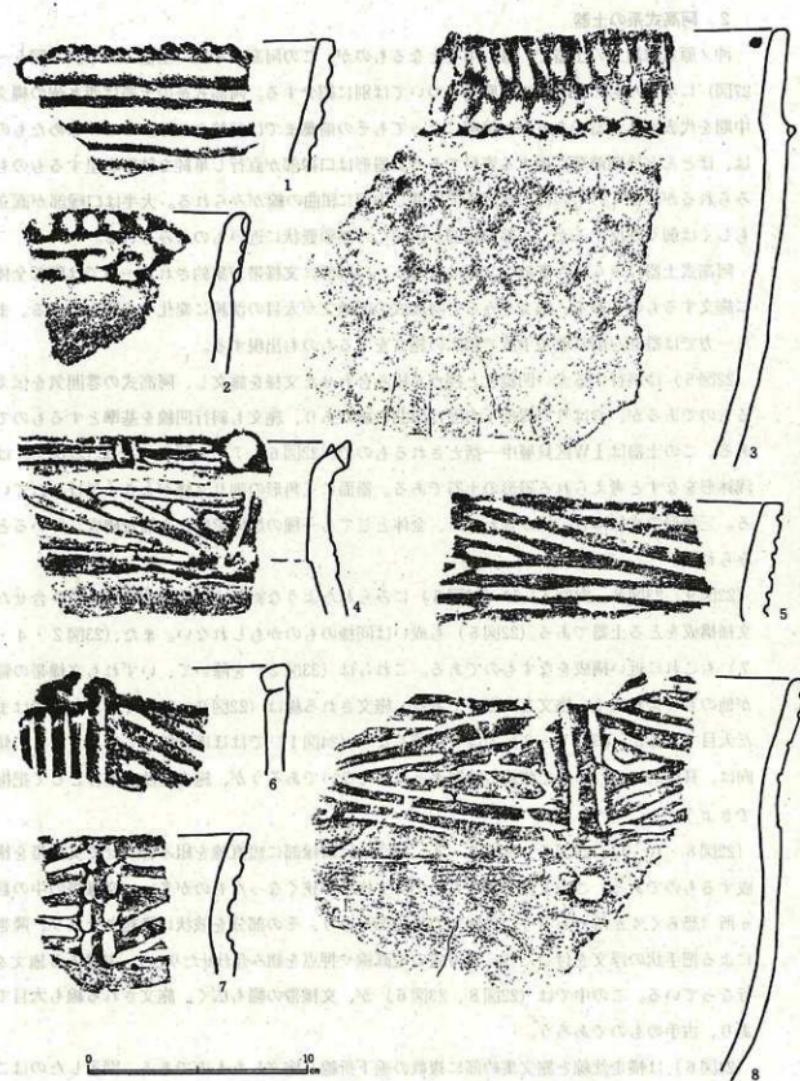
(22図5)は斜行する太い凹線文と押点を組み合わせた文様を施文し、阿高式の雰囲気を伝えるものであるが、やはり口縁部下内面に屈曲の線があり、施文も斜行凹線を基準とするものである。この土器はIW区貝層中一括とされるもので、(22図6・7)も同じである。(22図7)は浅鉢形をなすと考えられる器形の土器である。器面に三角形の削り文様が大きく付けられている。三角形の文様は互に組み合わせり、全体としても一種の幾何学的な文様を構成しているとみられる。

(22図9、23図8、24図1)は(22図5)にみられたような斜行する線と曲線文を組み合せた文様構成をとる土器である。(22図5)も或いは同様のものかもしれない。また、(23図2・4・7)もこれに近い構成をなすものである。これらは(23図2)を除いて、いずれも文様帯の幅が他のものより広く、施文も大振りである。施文される線は(22図9、23図4)あたりではまだ太目であるが、(23図7・8)ではやや細くなり、(24図1)ではほぼ沈線化してくる。この傾向は、具体的にこれのみで前後の時間差とはいえないであろうが、施文技法の推移として把握できよう。

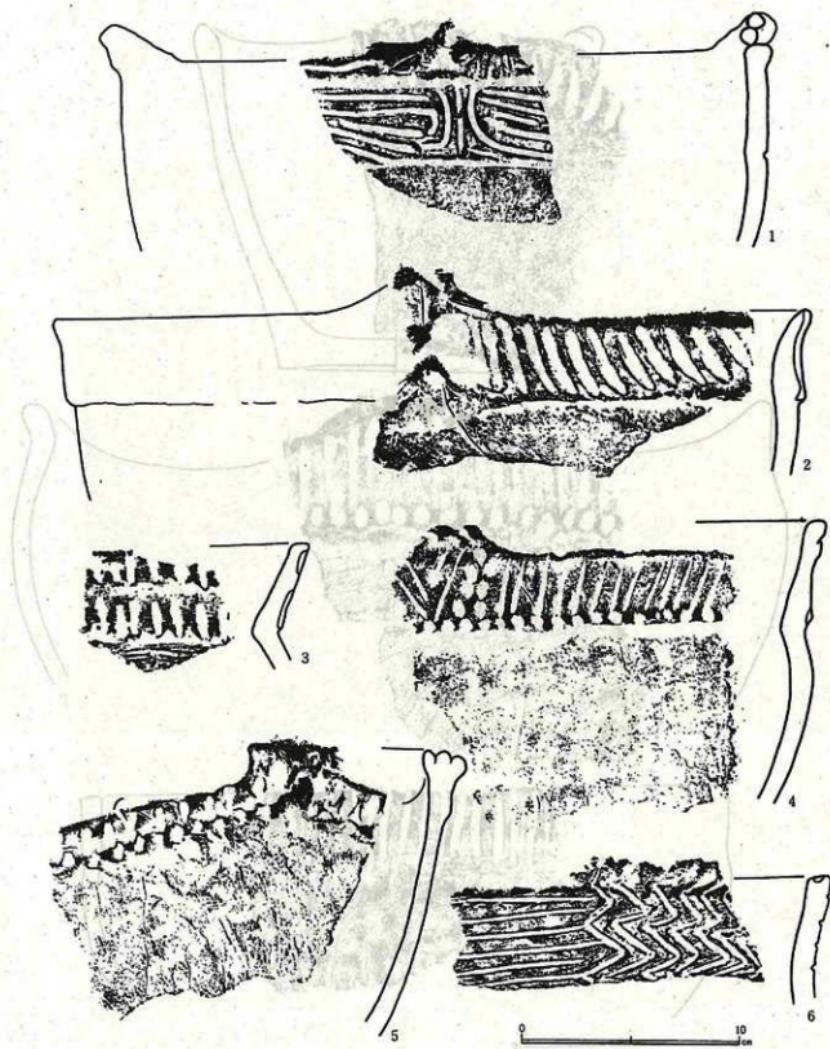
(22図8・10・11、23図6、24図2・4、25図)は口縁部に短直線を組み合わせて文様帯を構成するものである。この文様をもつものでは文様帯が狭くなったものが多い。文様帯の中の数カ所(恐らく4カ所であろう)に施文の集約部があり、その部分を波状に隆起させたり、隆起による把手状の浮文を付したり、異方向の短直線や押点を組み合わせたりして、特徴ある施文を行なっている。この中では(22図8、23図6)が、文様帯の幅も広く、施文される線も太目であり、古手のものであろう。

(24図6)は横走沈線と施文集約部に複数の垂下折線を施文したものである。図示したのはこの一例のみであるが文様構成の単純化したものの例である。

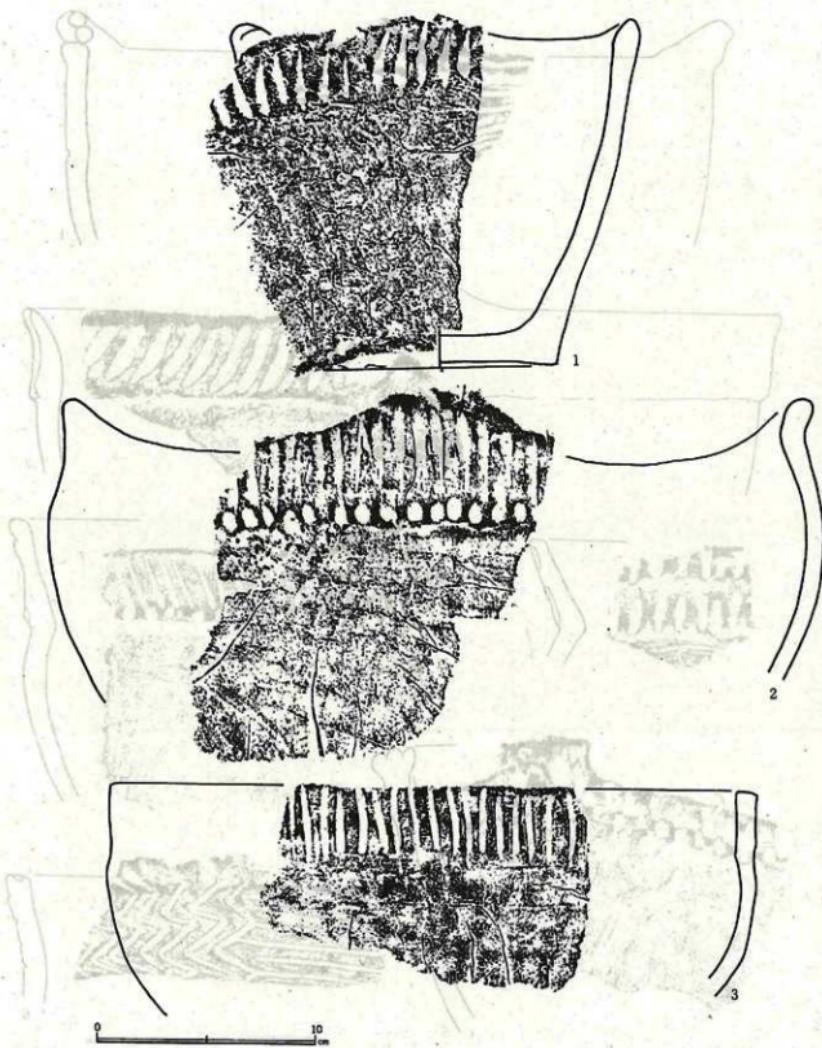
(22図6、23図3、24図3・5)は押点で文様を埋めたものである。押点を1列だけ付したものはなく、上下2段にしている。(23図3、24図3)では押点がやや長目で、(23図3)ではその



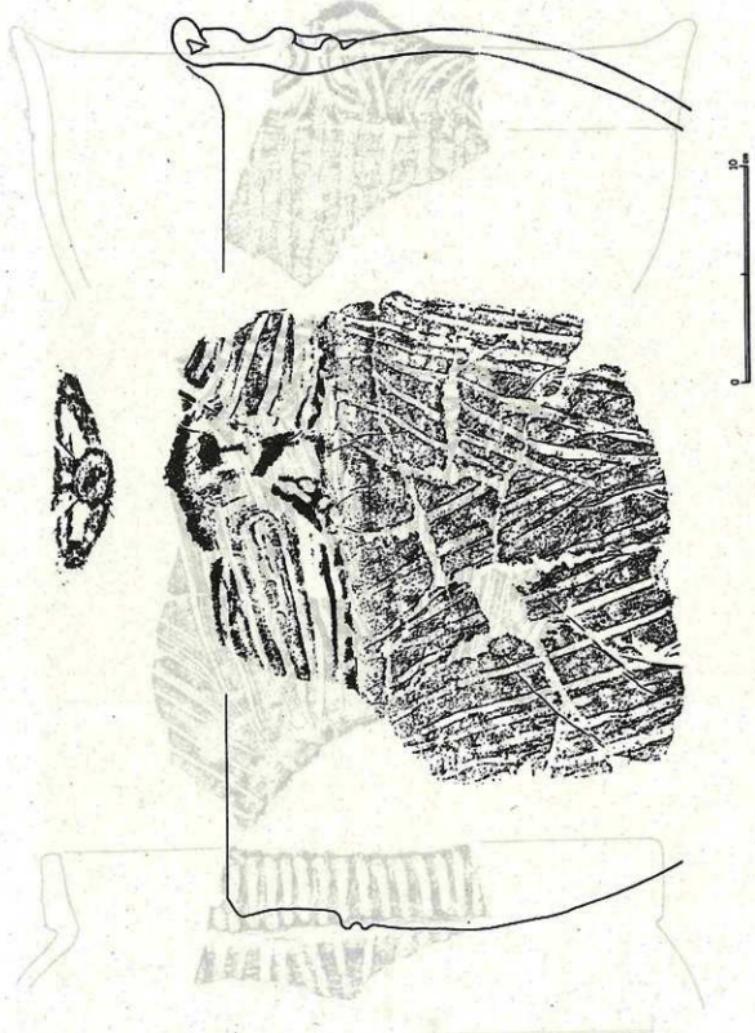
第23図 第1次調査出土遺物(4)



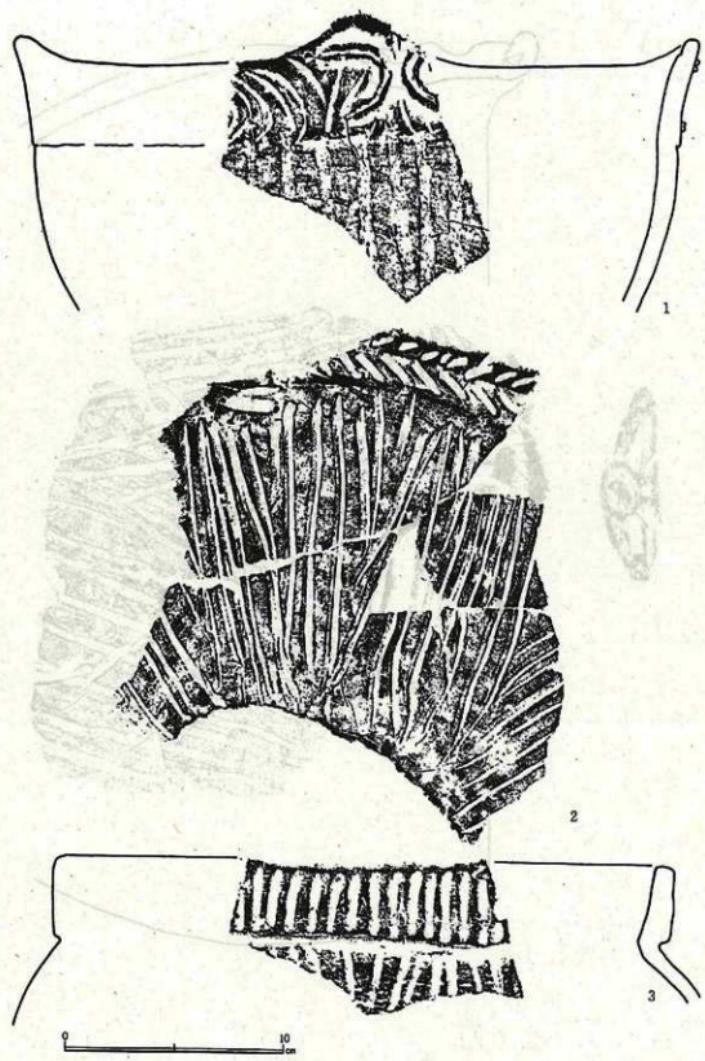
第24図 第1次調査出土遺物(5)



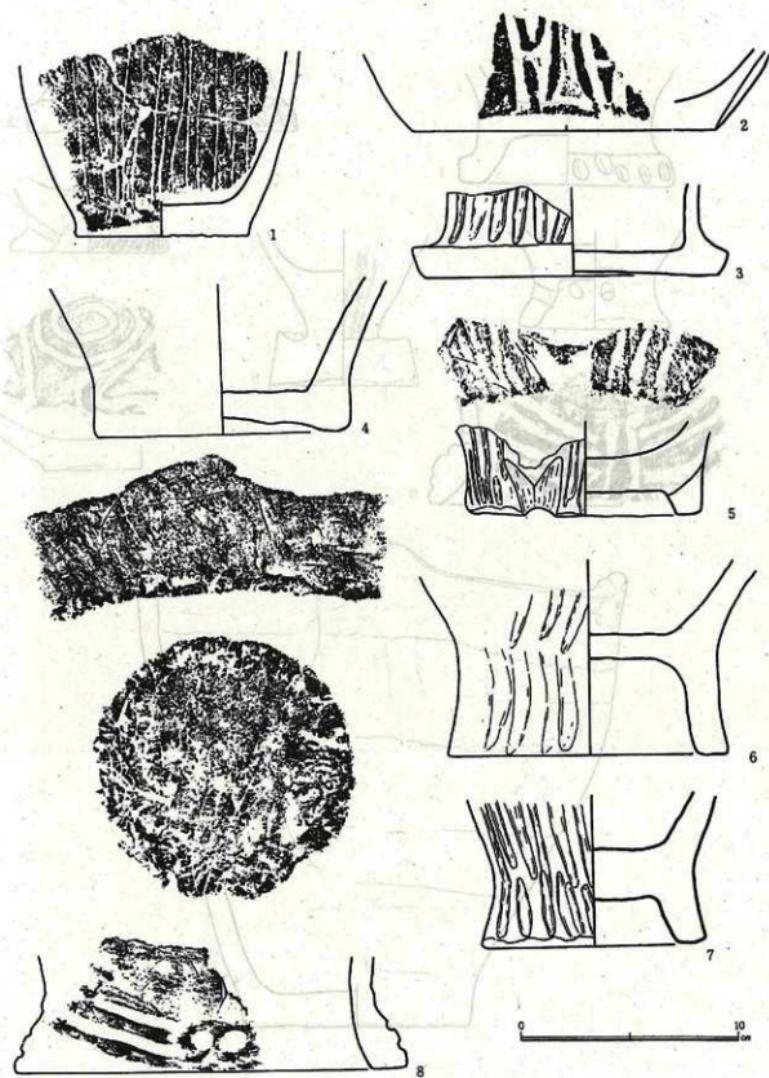
第25図 第1次調査出土遺物(6)



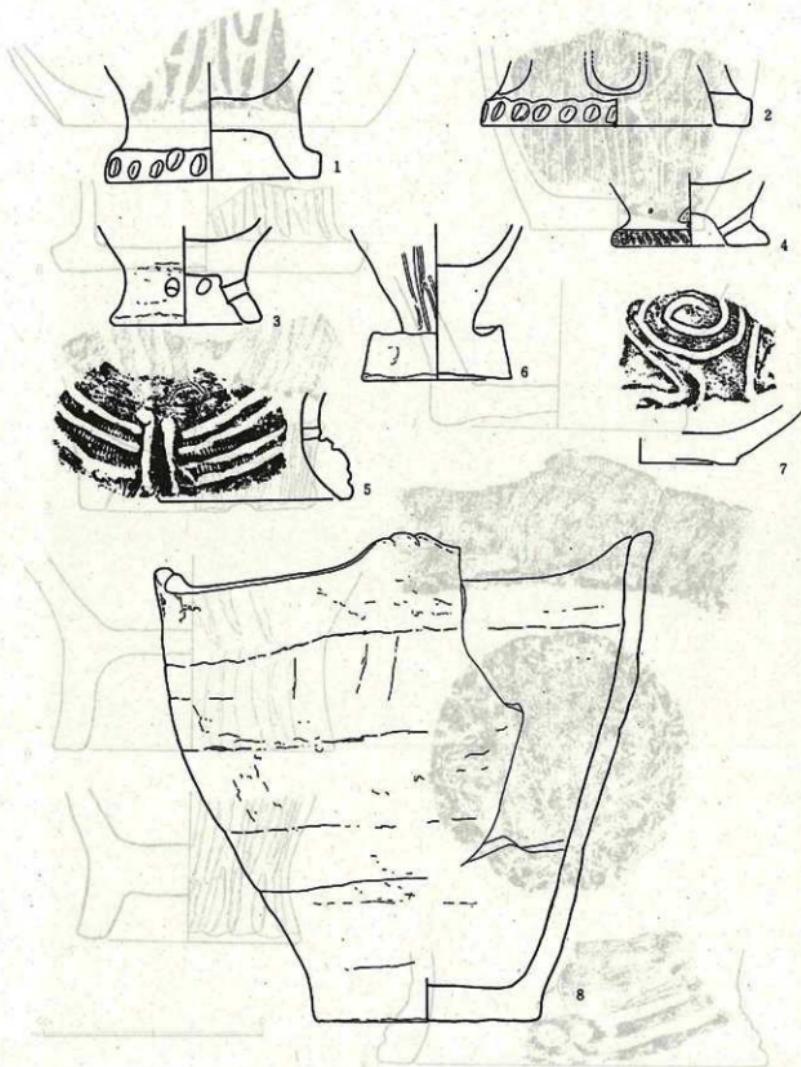
第26図 第1次調査出土遺物(7)



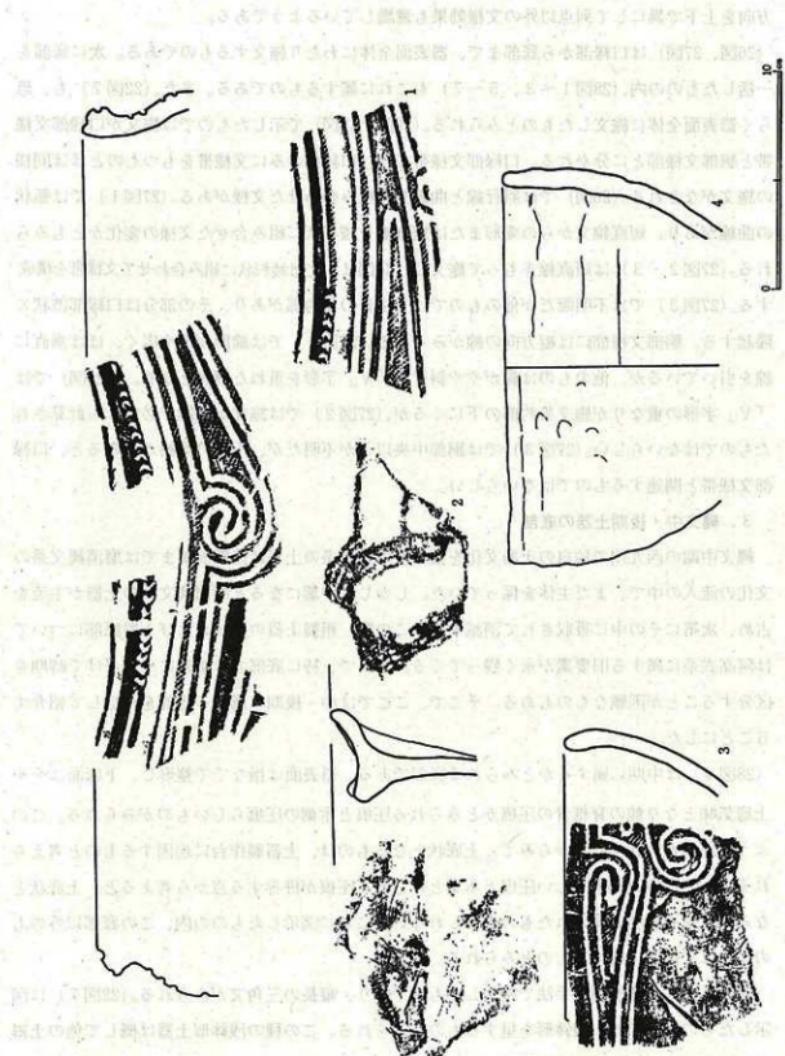
第27図 第1次調査出土遺物(8)



第28図 第1次調査出土遺物(9)



第29図 第1次調査出土遺物(1)



第30図 第1次調査出土遺物(1)

方向を上下で異にして列点以外の文様効果も意識しているようである。

(26図、27図)は口縁部から底部まで、器表面全体にわたり施文するものである。次に底部を一括したもの内、(28図1~3、5~7)もこれに属するものである。また、(22図7)も、恐らく器表面全体に施文したものとみられる。(26図・27図)で示したものでは施文が口縁部文様帯と胴部文様部とに分かれる。口縁部文様帶では、口縁部のみに文様帶をもつものとほぼ同様の施文がなされる。(26図)では斜行線と曲線文を組み合わせた文様がある。(27図1)では弧状の曲線があり、短直線文からの変形または短直線を綾杉状に組み合せた文様の変化かともみられる。(27図2・3)は短直線をもって施文し、(27図2)では綾杉状に組み合わせて文様帶を構成する。(27図3)では不明瞭だが他のものでは文様帶の集約部があり、その部分は口縁部波状に隆起する。胴部文様部には縦方向の線がみられる。(27図1)では線間がやや広く、ほぼ垂直に線を引いているが、他のものは線がやや斜行し、「V」字形を重ねた構成となる。(26図)では「V」字形の重なりが施文集約部の下にくるが、(27図2)では施文が粗雑で必ずしも計算されたものではないらしい。(27図3)では胴部中央以下が不明だが、上部の傾斜からみると、口縁部文様帶と関連するものではないらしい。

3. 繩文中・後期土器の底部

縩文中期の西九州で独自の土器文化を築いた阿高式系の土器は後期前葉までは磨消縩文系の文化の流入の中で、まだ主体を保っていた。しかし、中葉になると磨消縩文系の土器が主流を占め、次第にその中に吸収されて消滅する。この間、粗製土器の系統および土器底部については阿高式系に属する旧要素が永く残ってくる。そこで、特に底部では明確にそれだけで時期を区分することが困難なものもある。そこで、ここでは中・後期に属する底部を一括して紹介することにした。

(28図4)は中期に属するかとみられる底部である。器表面は指などで整形し、下底面はやや上底気味となり鯨の脊椎骨の圧痕かとみられる圧痕と木葉の圧痕らしいものがみられる。このような圧痕が存在する点からみて、上底状となるものは、土器製作台に起因するものと考えられる。しかし、鯨の脊椎らしい圧痕と木葉とみられる圧痕が併存する点から考えると、上底状となるのは或る程度計算されたものかもしれない。ここに図示したものの内、この底部以外のものは、ほぼ後期に属するものとみられる。

(28図2)は三角形削り手法で施文したものであり、縦長の三角文がみられる。(22図7)に図示したものと同類で、浅鉢形を呈するものとみられる。この種の浅鉢形土器は概して他の土器に比べて作り方が丁寧である。

(28図1・3)は縦方向の線を底部まで引きおろす文様構成をとるもの平底をなすものである。(28図1)は凹線や太目の沈線でなく、細い沈線を施文している。

(28図5~7)は底部まで縦線を施文するものの内、底部が脚台状となるものである。(28図5)

では脚台が低い。また下部に「V」字状の切り込みをみる点でも特異である。

(28図8、29図1・2・4・5)は脚台端部を肥厚させて文様帶とするもので、前に述べた脚台をもつ土器より後出の要素とみられるものである。(29図2・4・5)には脚台に孔が穿かれている。(29図3)は脚台下端の肥厚はないが、(29図4)あたりと形態的に類似し、また孔を有する点で同時期のものとみられる。

(29図6)は底部が厚くて大きく横に張り出した異形の土器である。

(29図7)は浅鉢形を呈するとみられる土器の底部破片である。内面に曲線を組み合わせた施文がみられる。破片内に渦文が存在する点から推測し、何カ所かに施文の中心となる渦文があり、その間を三角形を単位とする曲線で埋めた文様構成が考えられる。鐘ヶ崎式またはそれ以降のものであろう。

4. 鐘ヶ崎式土器

九州で磨消繩文系の土器が定着したものが鐘ヶ崎式土器である。(29図8、30図)の土器がそれにあたる。(29図8)は無文の粗製土器で、口縁部の内4ヵ所が波状に隆起し、その部分に粘土紐による「山」形の文様状のものがある。この土器は波状部のこの手法からみて、或いは阿高式系として紹介したものの中に含めた方がよいかもしれない可能性がある。

(30図1～3)は繩文で飾った土器である。(30図1)は鉢形、(30図3)は塊形をなす。(30図2)については不明瞭だが、擂鉢に近い浅鉢ではないかとみられる。(30図1)は短い頸部でややくびれ、口唇部と胴部に文様帶をもつ。胴部文様帶では施文集約部で渦文を構成し、(1')でみると集約部と集約部との中間でも小さな渦文を形成するようである。(30図3)も同様に渦文を施文するもので上・下に渦文がみられる。(30図2)は口縁部が著しく肥厚し、口唇部と器表面に幅広の隆帯をもつ土器である。隆帯部に繩文粒が付されている。(30図4)は無文の単純な鉢形土器で、鐘ヶ崎式の粗製土器である。

さまで異聲さうある本をみせり印の本空。Vの跡可とま。この跡は右側に下
端点の跡が残り、そのする左側は文部省蔵頭字跡の跡（2・ト・3・1回02；3回03）
左側は許可音頭れに（2・ト・3回03）。さあうのさめきさめき書類の出資印本の上にさめ
き印の上に頭字跡の跡（ト回02）がねむれ頭字の跡（2回03）。さう

さめき印の上に頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

撮影 坂 本 經 堯 松 岡 史

さめき印の跡（ト回03；8回03）。さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

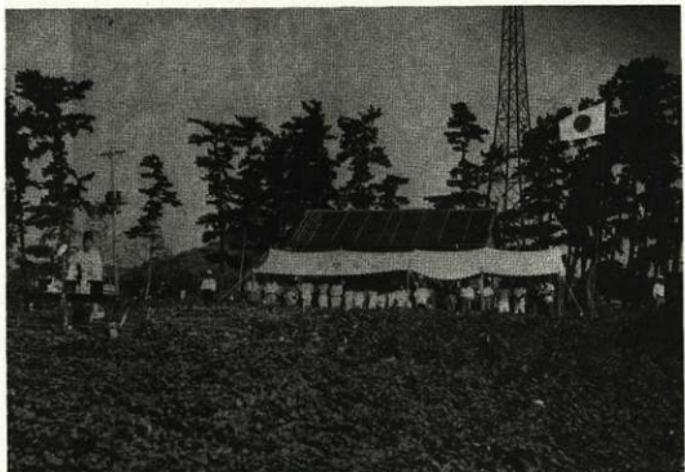
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

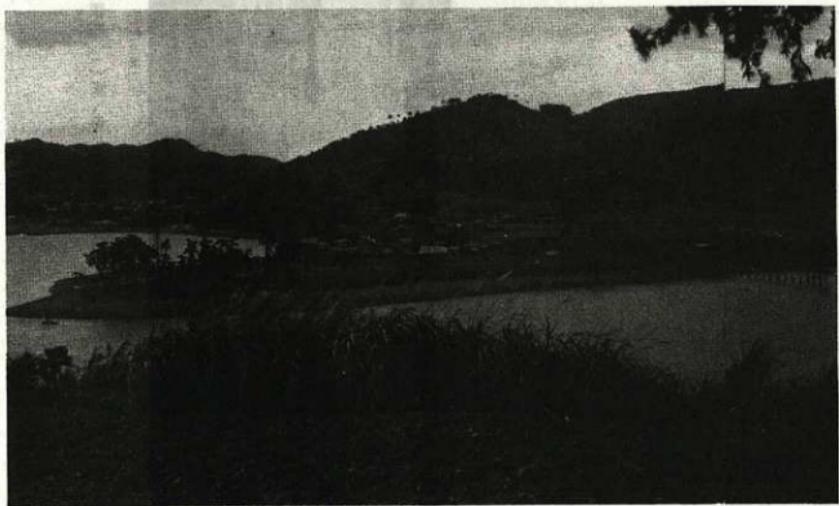
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）

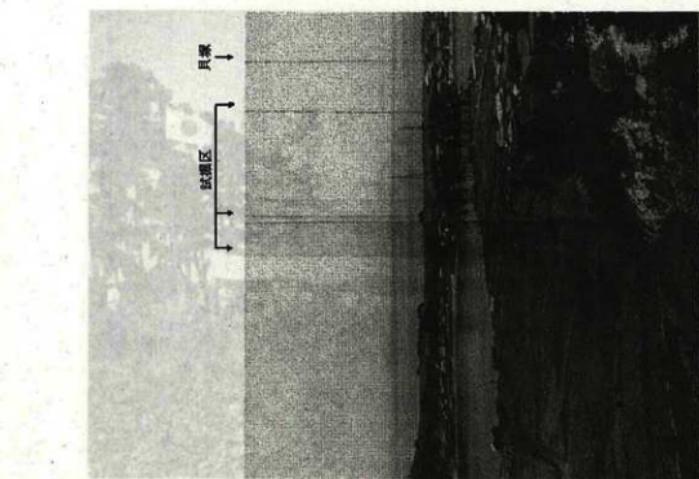
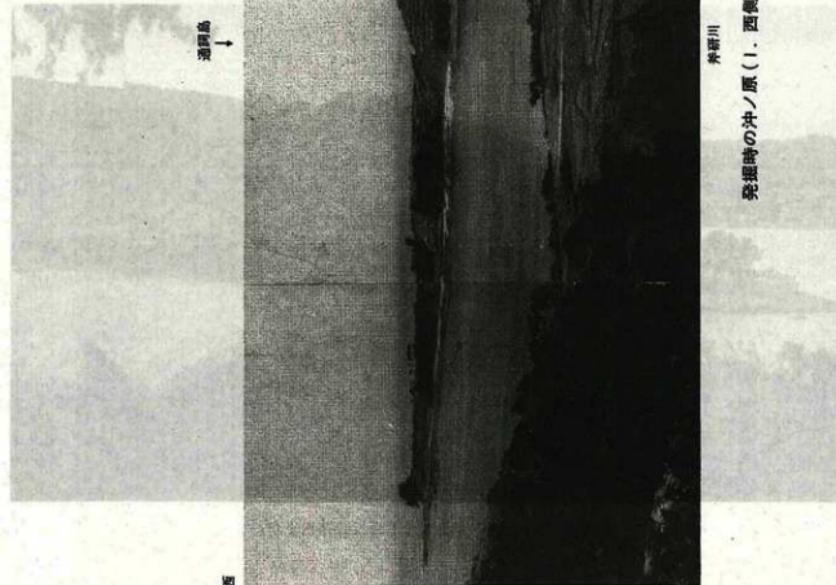
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）
さめき印の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）が本の頭字跡の跡（ト回03）



発掘祭 昭和34年8月1日



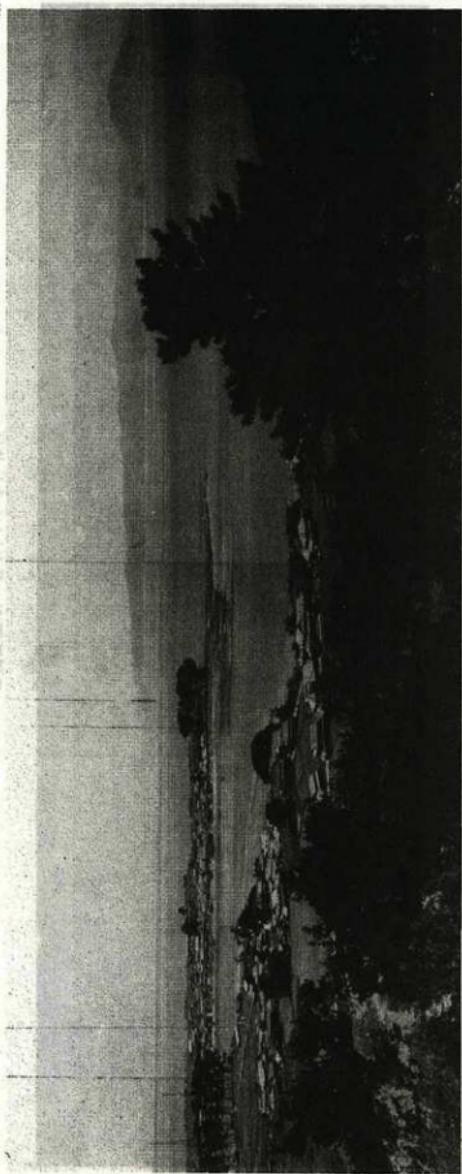
発掘時の沖ノ原 通詞島より沖ノ原西岸を望む



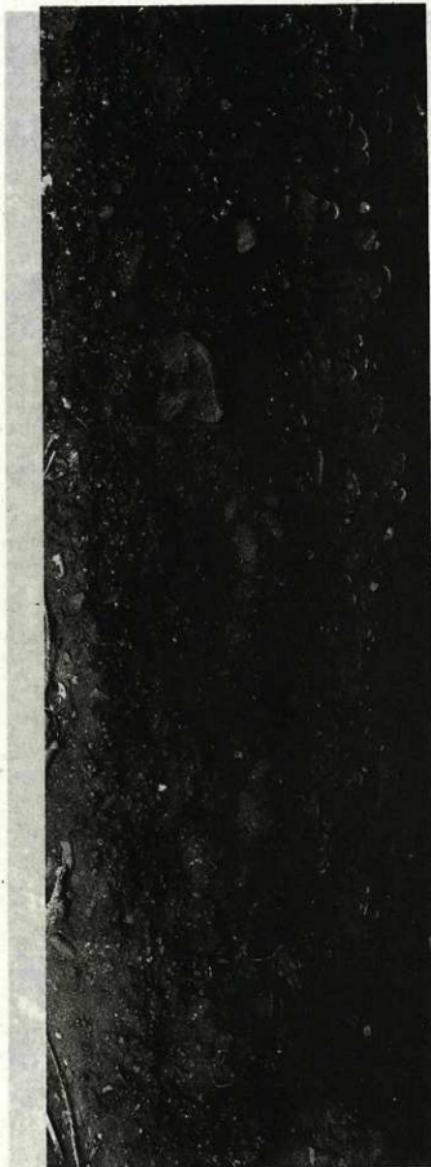
発掘時の沖ノノ原（1. 西側） 南側高地より見る
岸断崖

発掘時の沖ノ原(2. 東側) 前頁写真の右につづく

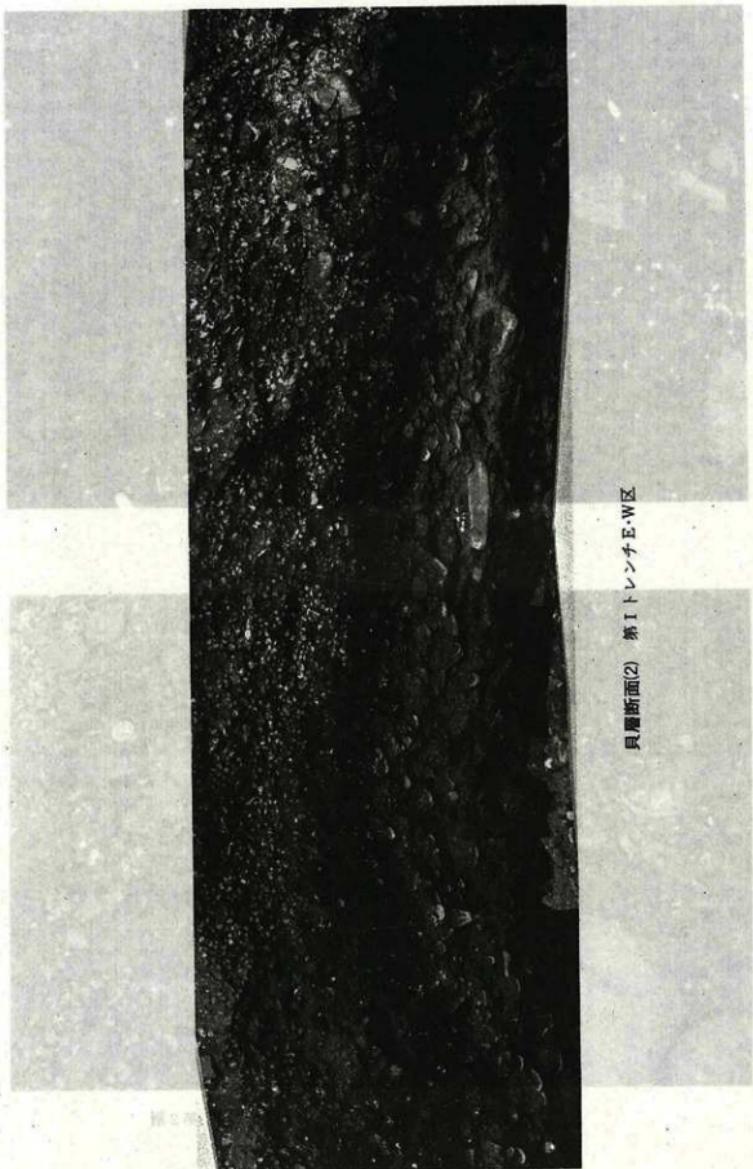
通洞古墳



月層断面(1) 第1トレンチE・W区



貝層断面(2) 第I レンチE-E'区





完形土器出土状態 第Ⅰトレンチ 第2層



第1号人骨検出状態 第ⅠトレンチE区 第2層

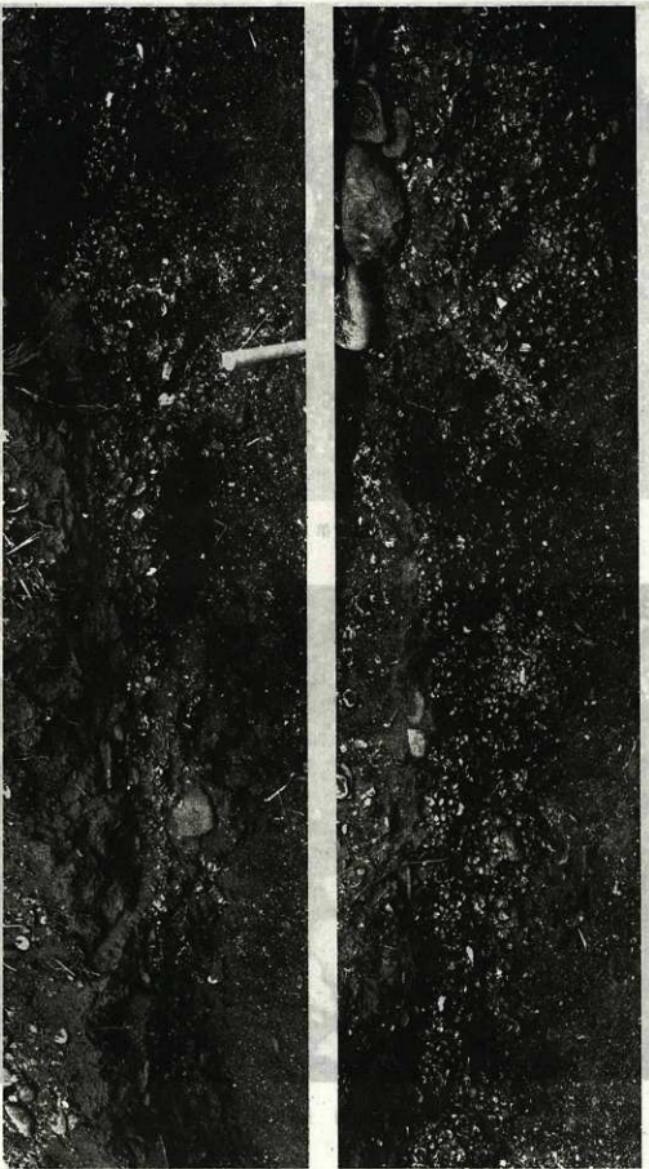


遺物出土状態 第 I トレンチ 第 2 層

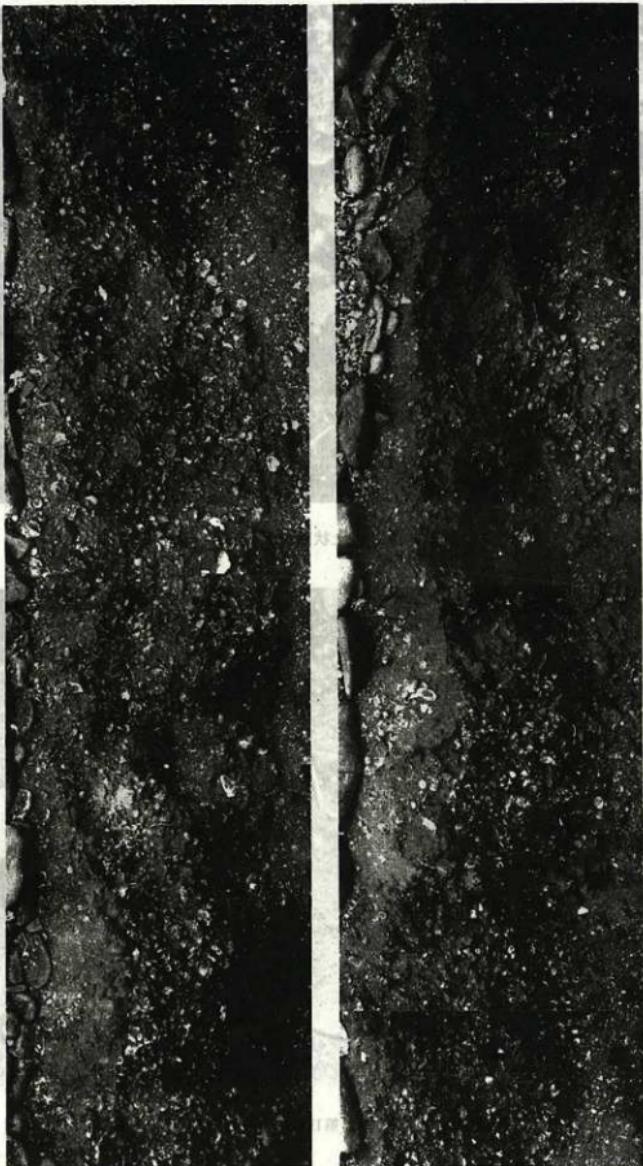


第 4 層の疊層 第 I トレンチ

貝層断面(1) 第IIトレンチN区(下段写真は上段写真の右につづく)



貝層断面(2) 第IIトレンチN・M区前頁写真の右につづく(下段写真是上段写真的右につづく)

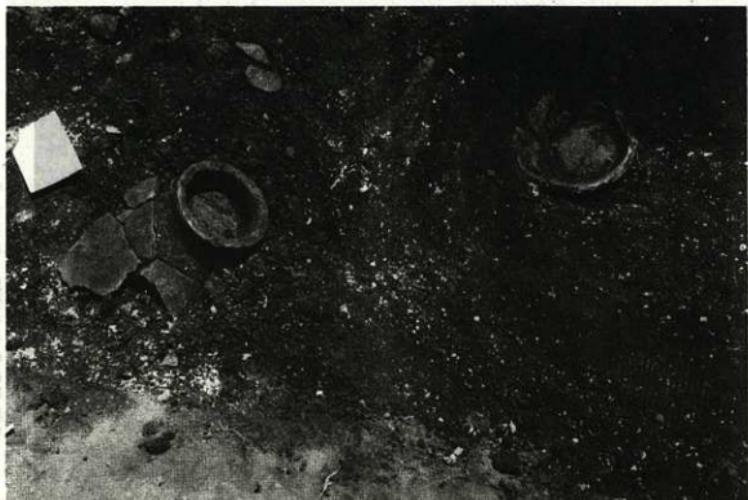




貝層中遺物出土状態 第IIトレンチ



貝層中遺物出土状態 第IIトレンチ 写真中央上は骨針



貝層中遺物出土状態 第IIトレンチ



黒曜石製石器出土状態 第IIトレンチ 第2層

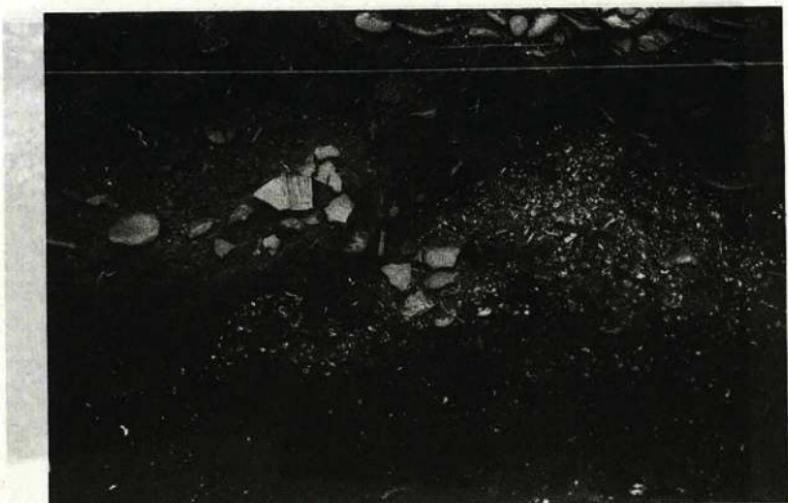
有孔貝製品出土状態 第IIIトレンチN区



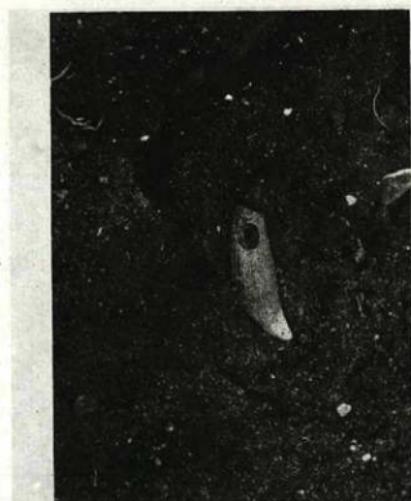
想對土出発断面中蒙具

貝層断面 第IIIトレンチN区(下段写真は上段写真の右につづく)





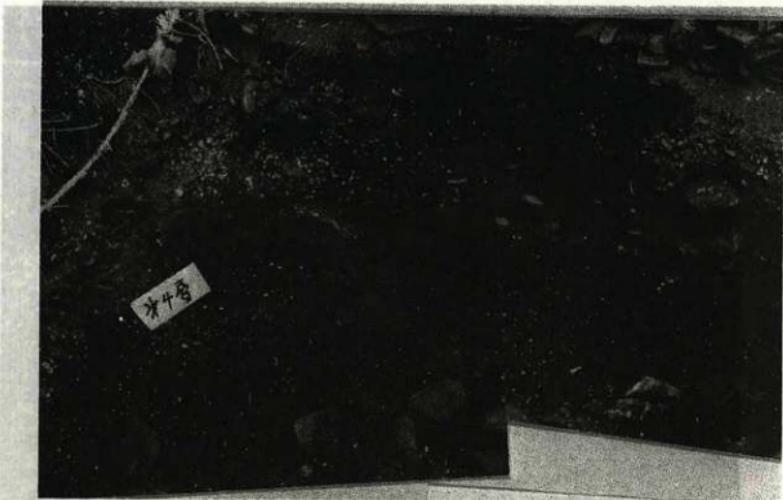
遺物出土状態 第IIIトレンチS区(IW区域)



猪牙製垂飾出土状態 第IIIトレンチS区
(IW区域)



骨製髪飾出土状態 第IIIトレンチS区
(IW区域)



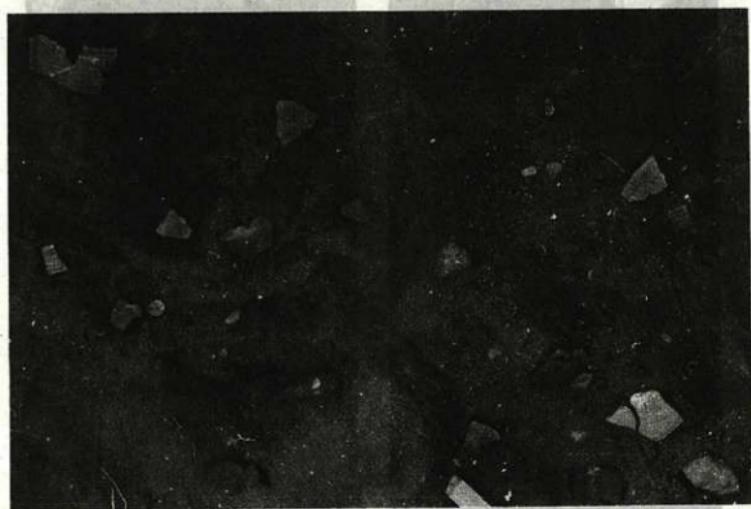
(第ⅣトレンチN区) 貝層断面



イノシシ頭骨出土状態 第ⅣトレンチN区 第2層
(第ⅣトレンチN区)

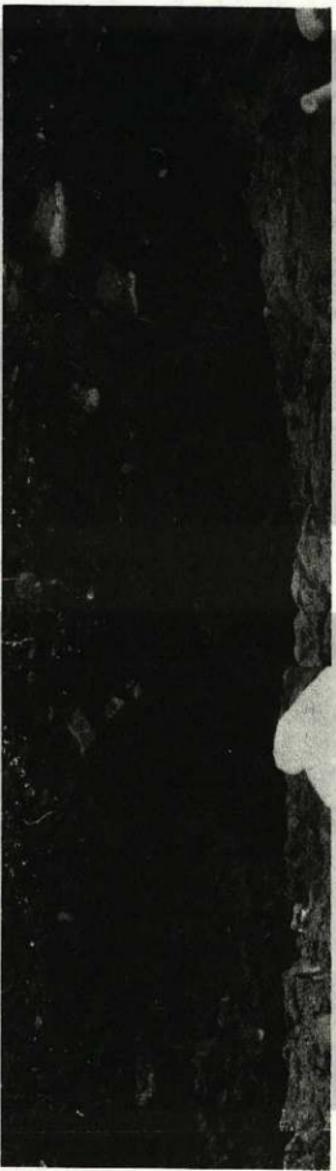


シャチの牙と土器出土状態 第IVトレンチN区 第2層



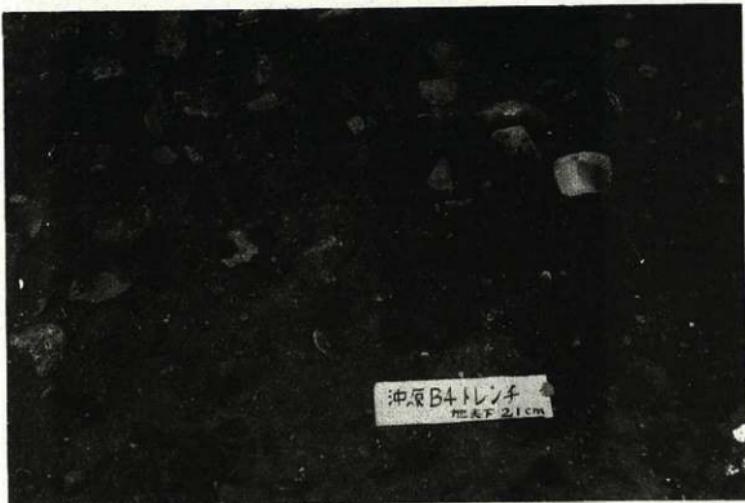
下層土器出土状態 第IVトレンチN区 第4層

貝層断面 第IVトレンチS区 上段中央下部 は断面にあらわれた第5号人骨(下段写真是上段写真の右につづく)



南
出水
管地

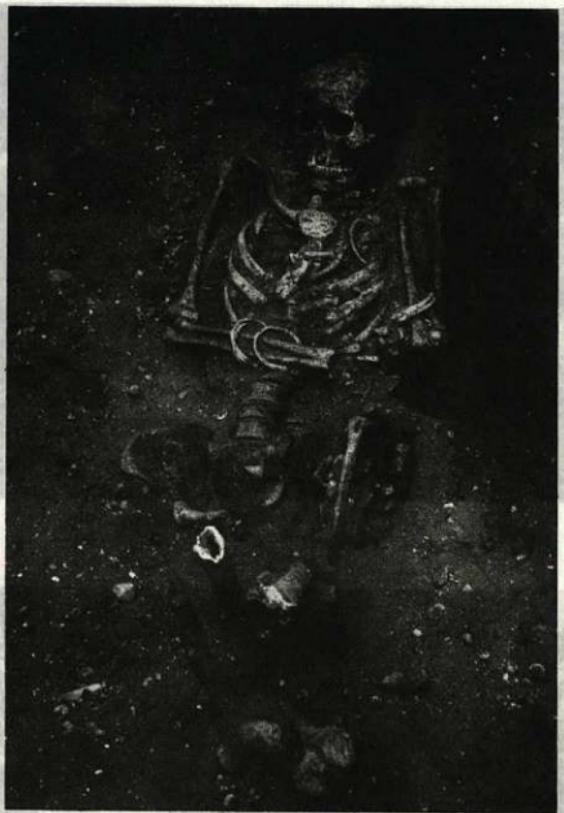




遺物出土状態 第IVトレンチS区 上層



遺物出土状態 第IVトレンチS区 上層

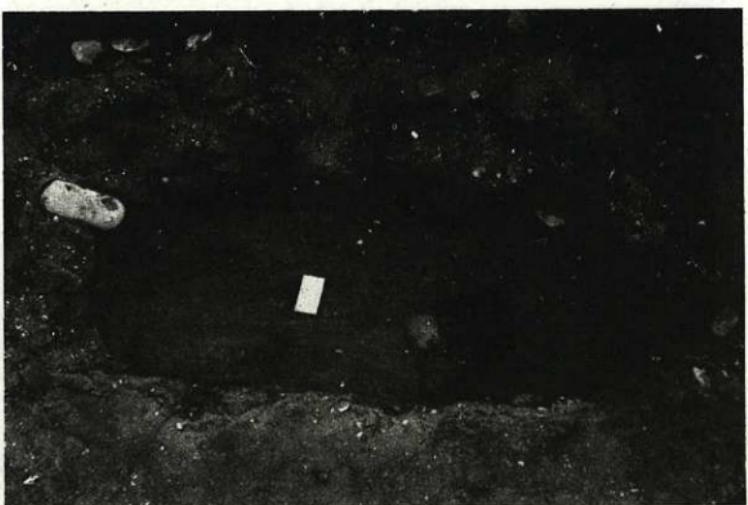


第4号人骨検出状態
第IVトレンチN区



第4号人骨貝輪装着状態

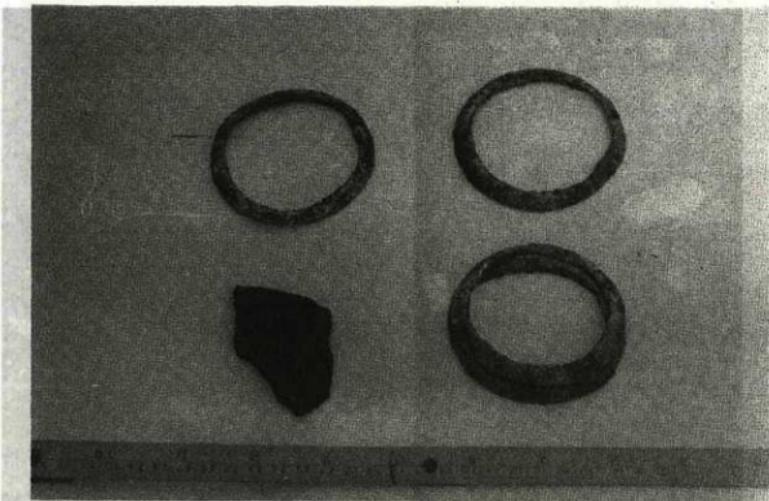
出土 石器時代後期



第4号人骨埋葬土壤



第4号人骨埋葬土壤と貝層断面



第4号人骨装着貝輪と埋葬土壙出土土器

東北歴史博物館蔵



第5号人骨石圓（人骨取り上げ後）

東北歴史博物館蔵



第5号人骨検出状態 第IVトレンチ S区



第5号人骨腹部の疊 左、検出状態。右、脊椎骨と疊の間の土、厚さ1cm弱。



第 I 試掘区断面



第 III 試掘区断面

第三回トモセ、土に埋もれてる骨頭部、み、歯科出典、三、獣の頭蓋骨入骨と類



第II試掘区断面



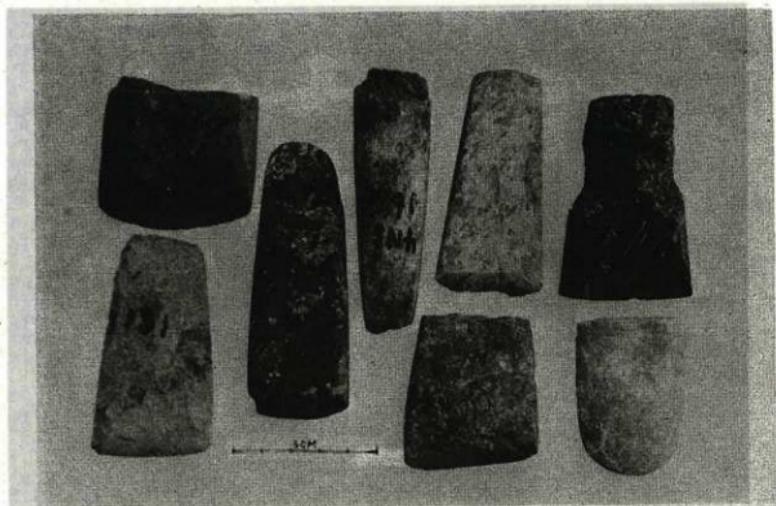
第II試掘区 製塙土器出土状態



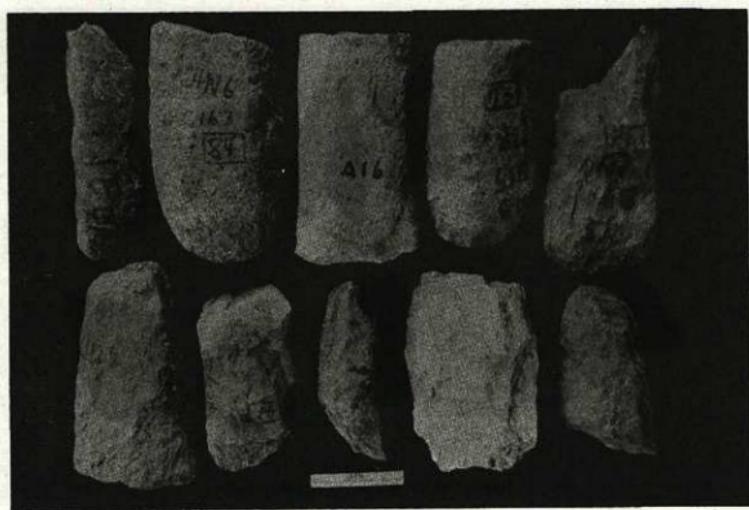
発掘風景



博士による貝の同定



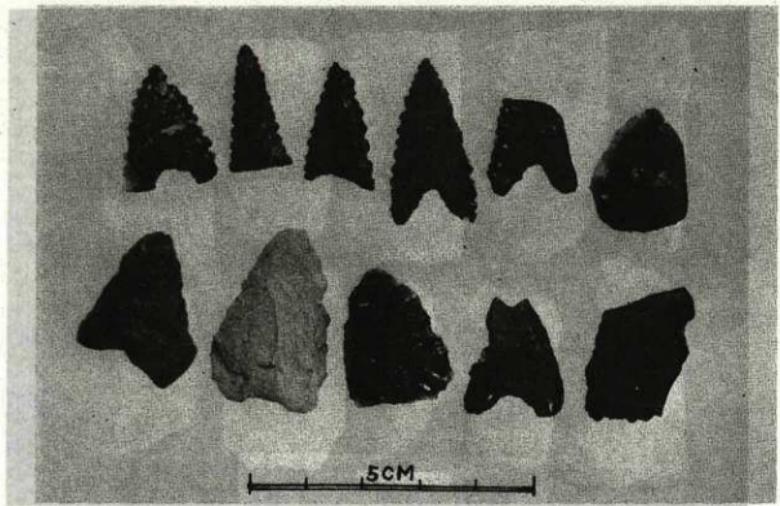
出土遺物 (1) 磨製石斧



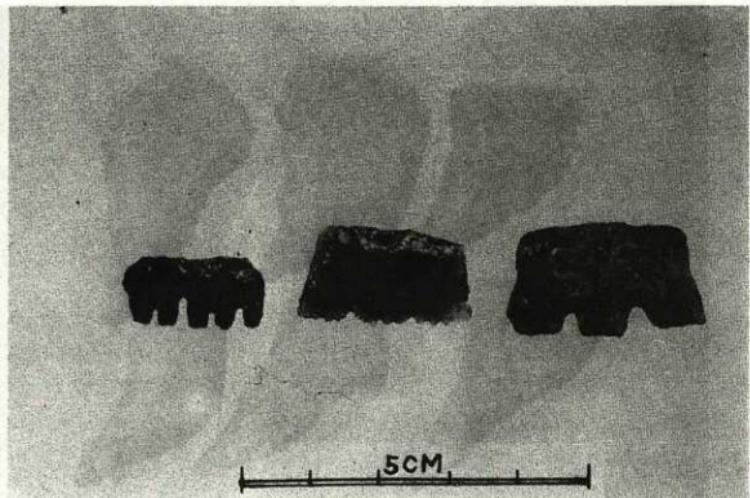
出土遺物 (2) 打製石斧



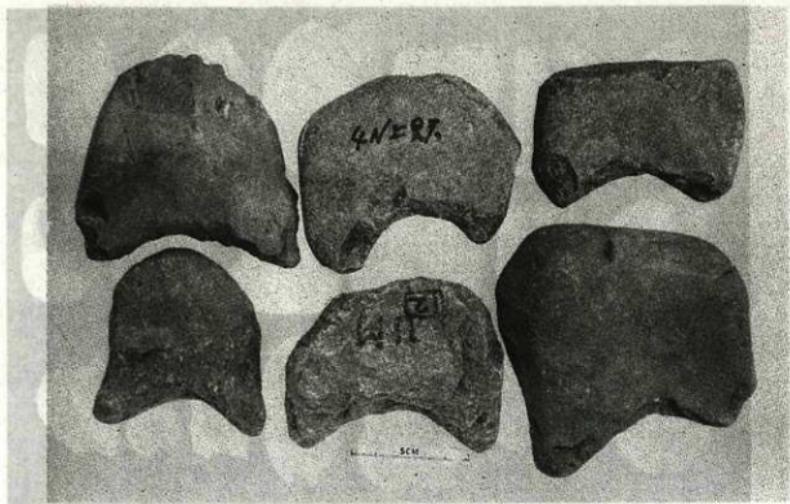
出土遺物 (3) 石匙と剝片石器



出土遺物 (4) 石鏃



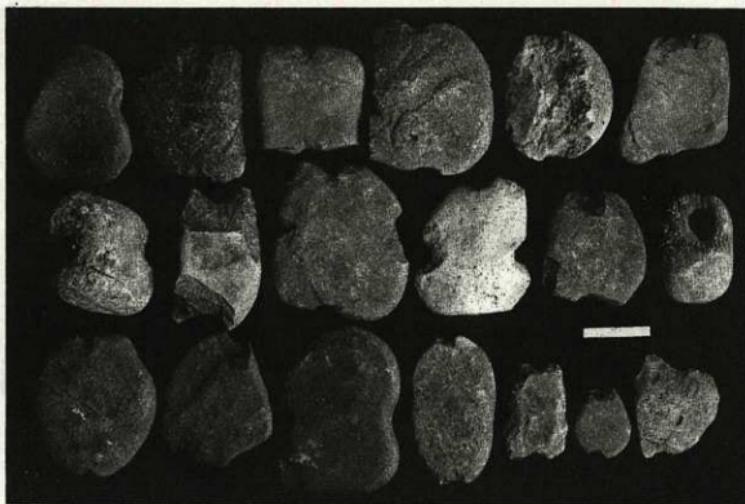
出土遺物 (5) 石鋸



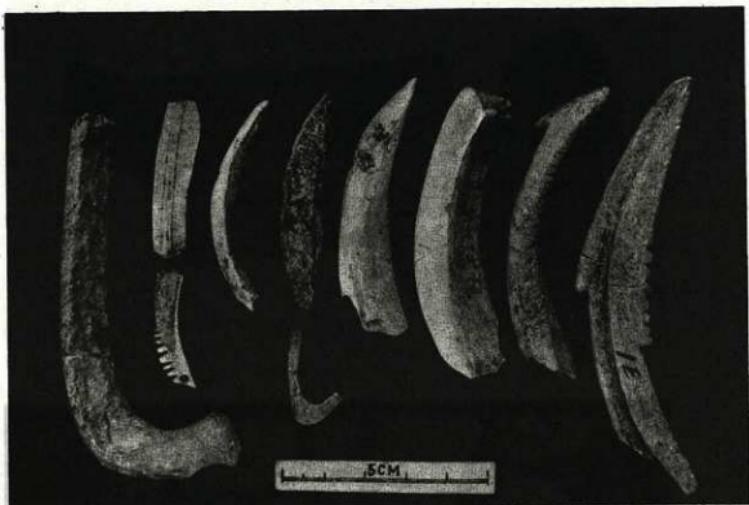
出土遺物 (6) 尖頭狀石器 双頭型



出土遺物 (7) 尖頭状石器 単頭型



望鄉某 器口 出土遺物 (8) 石錘出

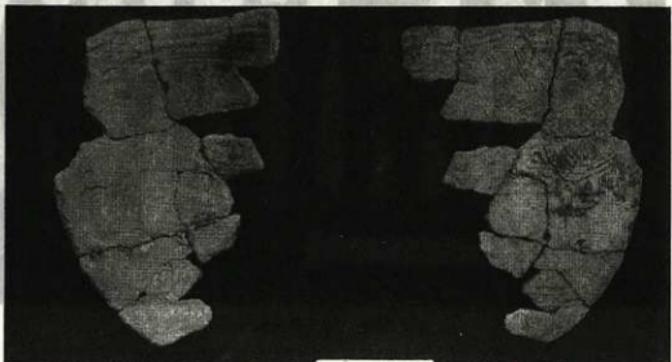
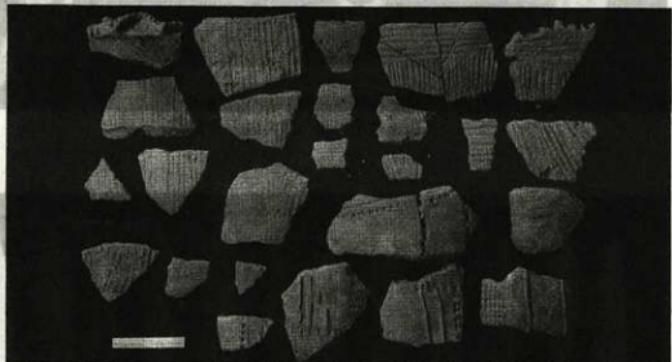
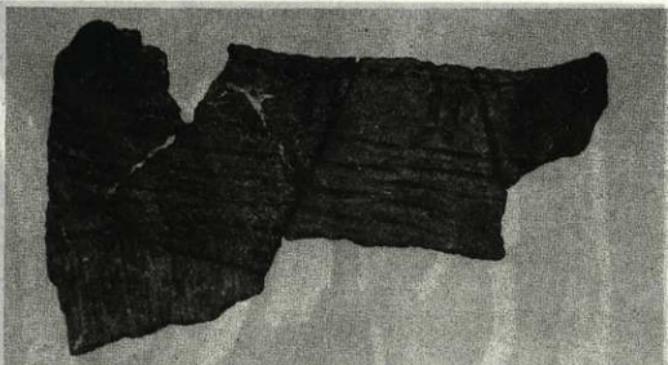


出土遺物 (9) 骨角器・釣針



出土遺物 (10) 骨角器・モリ等

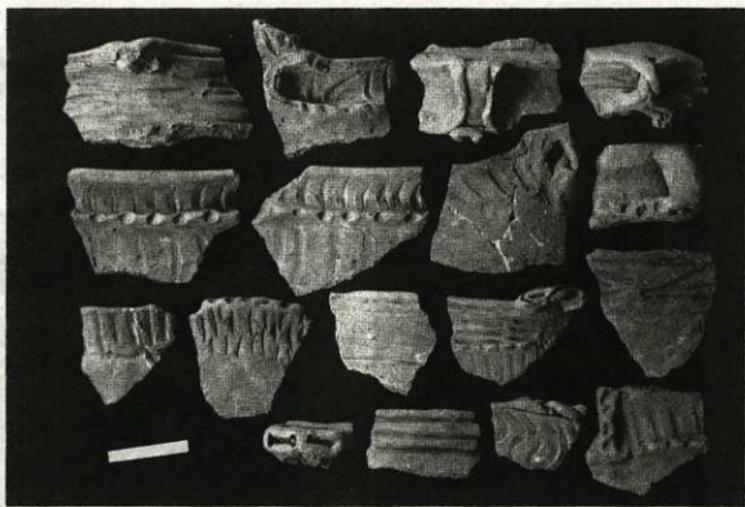
系左森・映曾・器土・印・冲街土出



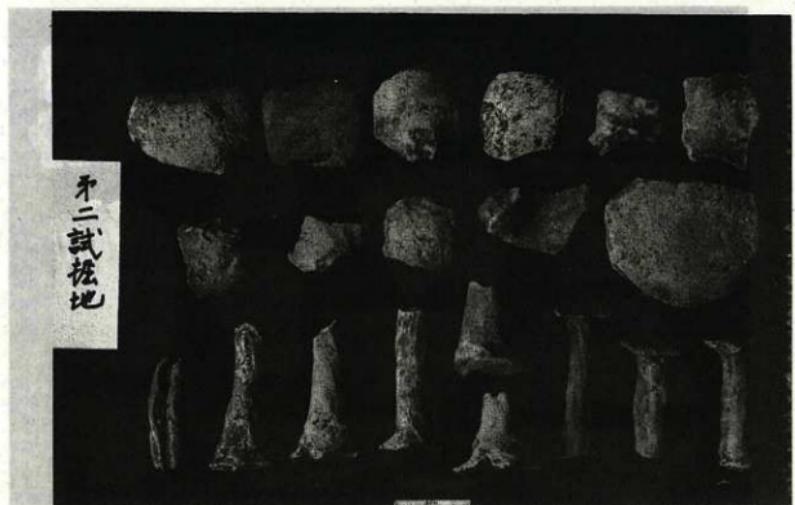
出土遗物 (1) 土器 曾烟·嘉式系



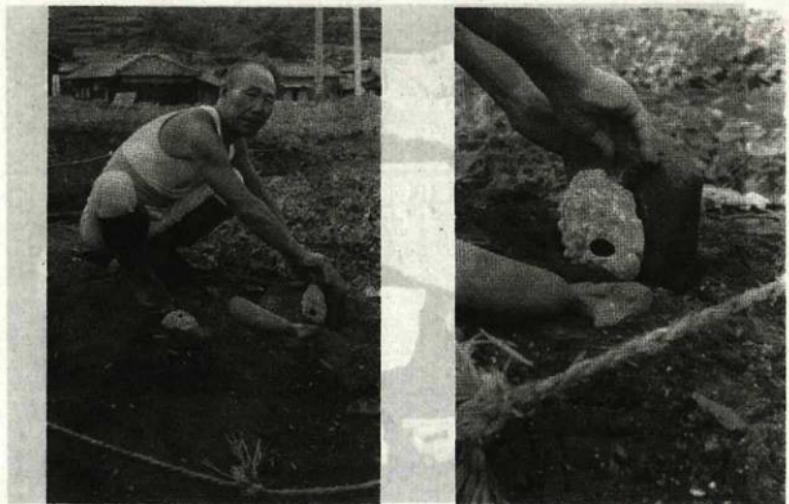
外村町六番地出土物
器物等
古墳時代



外村六番地出土
器物等
古墳時代



出土遺物 (3) 土器 製塩土器 (古墳時代)



尖頭状石器によるアワビ取り模様 岡本久次郎氏